

●同じ天を戴く 君父の難は與に共に天を戴かずといふ古語あり。必ず親の難は組ひ、誓つて難と俱に生存せむことなき。

き物を青く見せ虚を實に振舞は、きやつはそれを誠とし、其通を内通せん、時には敵に裏くはせ居ながら敵の懐ろを知るに味方に十分の勝ち十分の得取て、闘仕舞にはこいつを殺しても助けても、損も益もない事、損益なくは同じくは助くるは慈悲仁の道、我計畧は知より出、お主が手打は勇の道、是常にいふ知仁勇、弓馬の家の守りにも保存にも此三つ 是を守るを忠臣共忠義の武士共名付るぞ、エ、はやまつたり粗忽なり、去ながら若き者道理がなく、我も口には斯くいへど主君を無罪に殺害させ、其仇をも報じ得ず主の敵と今日迄も、同じ天を戴くは、智仁勇も口ばかり、忠臣の道を失はん、口惜さよと兩眼に無念涙を浮ぶれば、

●寺岡平右衛門 寺坂吉右衛門のこと。

地力彌も教訓聞に付け、父が涙に催はされ、フシ落涙、とゞめかねにけり、地深手の岡平起直り親子の顔を熟見て、涙をはらくと流し、眞實敵の内通と思召れん恥しや、疾に名乗らんくとは存せしかど、一日も師直が扶持を受けば、主従の道にあらずと延引し、地此仕儀に罷成る拙者が親は先殿様、御持弓の足輕寺岡平藏と申せし者、某は寺岡平右衛門、先年我等九歳の時、御領内の鹽焼濱、檢地の越度に親平藏御扶持を放され、地流浪の身とは成ながら奉公こそは足輕なれ、忠義の道に、フシ違ひはなし、二君には仕へまじ、譜代のお主に今一度と、十餘年の活命は草の根を食み木の實を拾ひ、水を吞で暮せしに、去年殿様滅亡と

聞より親子が此時に、大手の御門を枕にして、鹽谷殿の弓足輕寺岡親子が忠臣と、地鎗下に名を留め御恩を送り奉らんと、御城本へ駈せ参じ、籠城願ひなげさしかど、牢人を集めては謀叛の籠城同前にて、天下の咎め憚り有りかなふまじきと追返され、親平藏は七十の老の望みも是迄なり、冥途へ参つて殿様へ御奉公仕らん、地手ぶりのお目見得いひ甲斐なし、をのれは敵師直が、首取てお土産に跡より参れと申置き、去年の當月切腹致す親の遺言お主の仇、人手にかけじと存じ立縁をもとめ心を碎き、師直が馬屋奉公に罷出、馬の口取時もがな只一打と佛神に、祈つて時節を窺へ共用心深く引籠り、馬は扱置乗物でも他行とて致されば、

地本望途ん時節もなく、我身の運の拙さと思ひながらも世を恨み天を啣ちて一冬は、布子の袖の乾く間もながき夜すがら忍び泣、よし仕損ぜはそれ迄よ切込んと存ぜし内、各方の検見のため方々へも犬いる、我らも其役申付見事聞事内通し、虚言他言有まじと、熊野の牛玉に血判すへ、方々へ出けるが、只目にかくるは此御親子、案内人に知らせじと當春より御奉公、親が念願殿様の草葉のかけの御忠節、せめてもと存ずる故内通の度事に、詞由良之介親子の者腰がぬけて武道を忘れ、遊女に耽り酒宴に長じ、武具も馬具も賣拂ひ主の敵を打ことは思ひもよらず、一門も中違ひといひ遣すを誠にして、地師直が用心怠り連歌茶の湯花の會

●那由他 梵語にて非常の大数なり。一那由他百億をいひ、或はなほそれよりも多数なりといふ。却は那由他よりも更に大数なりと要するに人力にては計算し能はざる程の数なり。即ち未來永劫阿鼻地獄に墮ちて浮ぶ瀬なしと。

油斷とは此時也、片時も早く御下り、本望を遂られよ、
 詞サア此事申しまふては浮世に思ひ置事なし、はや
 くとゞめをさいてたべ、熊野の牛王の起請の罰、現
 世には有々とお手討にあふ現罰、地未來の無間も疑ひ
 なし、那由他劫が其間、阿鼻の苦患は受る共一言成共
 主君の忠、親の願ひを達する事悦ばしや嬉しやな、去
 ながら願はくば今少ながらへ、敵打の御供し敵の首を
 一目見て、一所に腹を切ならば、なんばう嬉しかるべ
 きぞ、忠義は人に負ね共、誠の時にはづるゝは是も起
 請の罰かとして、くどき歎くも息きれて、フシ哀、涙の玉
 の緒の脈も、みだれて見へにけり、親子も不覺の涙に
 くれ驚き入たる忠心、今一言の知らせにて大勢本意を

●四十五人 赤穂義士四十七人、其の内より足輕寺坂吉右衛門一人を引く時は四十六人なり。こゝに四十五人とあるはいぶかし、殊に寺岡平右衛門父子を加へて、四十七人とす亦謂れなきに似たり。

●感状 戦場にて功名を立たる者は大將より當座の褒美として書付を與へ置く、これを感状といふ。

遂る事、一騎當千ともいひつべし、身柄こそ足輕なれ、
 お主は冥途の鹽治殿、我等親子も朋輩也、主君の忠義
 に朋輩の禮をいふも慮外也、由良之介が心ざしに此
 度の一味の武士、我々親子を始として以上四十五人有
 たとへ其場へ出ず共其方親子を差加へ四十七人忠義の
 武士と末代に名をとゞむべし、地これを冥土の感状と
 親父に語り吹聴あれあつたら、武士を残念やと涙ぐめ
 ば嬉しげに、顔さし上て一禮をいはんとすれど舌すく
 み、聲も出ねば手を合せ頭を下げてうなづきし、フシ心
 の内こそあはれなれ、地力彌は手負の顔色見てはや目
 の色も變つたり、息の有る内師直が、屋形の案内聞お
 きたしと云ければ、げに是は氣が付たり、あらましい

かにと尋れ共、心計りに息切の、只ウ、くくと苦しみて、言説更にわからねば、由良之介碁盤をよせ、是此方より碁石を並べ、圖を作つて尋ぬべし、あは、額き合ぬ時はかぶりを振り、指を以て引直せ、白石は堀黒は屋形と心得よ、地こゝは東表門一目を一間積り、ならべし石数十四目、百四十間是皆堀か、ム、く折廻しに平長屋、西の裏手は長屋か堀か、扱は是も折廻しの長屋門、櫓はこゝに異角立關はこゝの程、侍小屋は南か北かム、く三方に取廻し、馬屋は西か武具の藏、扱はこゝらぞとを侍、廣間は是より是までな、奥の寢所はこゝかかしこかム、できた、然れば此あひ長廊下、此間が泉水築山廣庭ならん、北は明地か碁盤の

●山寺の春の夕べ 謡曲「道成寺」の「山寺のや、春の夕暮來て見れば、入相の鏡に花ぞ散りける」を讀びしなり。

目、明ても塞ぐ手負の目、うんと計りを最期にて、終にはかなく成にけり、地ヤレ音立な沙汰するな、町家住居の氣の毒さ、家主へ聞へては今日か明日かの發足に、大事の前の障り也、隣座敷へ聞へても、母女房に包む事、後はともあれ當分遁れ、是又旅宿の重寶と、親子領き疊を揚げ、ねだこち放し死骸うち込み、やうくに元の如くに取締ひ、疊にこぼれし血を押拭ひ、物かけにしきかへく、サアよいは、とは云つ此上にも、慎むは兩隣外より人も來る事有り、色悟られなと呷きて、親子碁盤に差向ひサア幾つで五つでか、爾れでも成まいま一つ置いて六つのかね、山寺の春の夕べを來て見れば、入合の鐘、地おきの聲庭の切戸を

●盤上 碁將碁などのしてあそび
亂舞は今様などを歌ひ舞ふこと。

●諸侍の上 大石内蔵之助は播州
赤穂の國家老にして、諸士の筆頭
なり。

フシ押開て、由良之介の奥方つかく立出申々
謠の聲碁石の音隣座敷へ響きまする、私は夫婦の中お
いとしやお袋様、遙々お供申せしも、そもじ様の腰が
ぬけ、お主の敵は打忘れ盤上亂舞の遊び事、弓矢の
道はすたりしと一門中の腹立、此意見の爲計り國元の
老母女房が、夕へ登つた今朝早々内を出て今歸り、親
子碁盤で阿呆げな山寺所じや有まゝい事、調過分の所領
を給はり、鹽冶判官高貞の執權と敬はれ、三千騎五千
騎の諸侍の上に立、國中を靡けしは殿様の御恩ならざ
るや、地其敵を生て置御命日の精進も、御回向も寺參
りも何しに佛が受給はん、御恩は何でも報ぜんとや、
詞ヤイ力彌め忤め、父こそ腰がぬけふすれ母が腹をか

●家に争ふ子 「孝經に、父に争子
あるときは身不義に陥らず、故に
不義に當つては則ち子以て父に争
はずんばあす可からず。此の語に
取れり。

●烏帽子 力彌といふ名は君の命
に給ひし所なりと。

●けしやう

飾りの義。

したぞよ、なぜ父御前に意見はせぬ、家に争ふ子なけ
れば家治まらずといふ事を、常にいふたが忘れたか、
地をのれが二歳の秋の末有難や殿様の、お膝の上に抱
あげられ、親に劣らぬ人相有り成人して忠功なせと、
力彌とは殿様のおきせなされし烏帽子ぞや、其時に勿
體なや稚い者の習ひとて、殿の御膝をぬらせしを、か
へつて殿には御機嫌よく、でかしたく主の膝を憚ら
ぬ、其心では百萬騎の敵を敵共思ふまいと、御感の詞
を常々に、いひ聞せたを忘れはせまい、人でなしの父
親は忘れても此母は、寐ても起ても主君の御恩束の間
も忘れはせぬ、庭にかひかふ犬迄も主の讐に噛付ぞや、
さいた刀はけしやうか伊達か左程敵がこわいか、いつ

●岡目八目

迄命がいききたいぞ臆病者卑怯者、何の因果に腰拔を、
 子に持たぞと聲をあげ、前後、不覺に泣給ふ、恨み
 のほどぞ道理なる、地力彌は俯向返答せず、由良之介
 色をかへ、岡ヤア口上ばるな女め、主の敵を得討いて
 耻をかいても身共が耻、酒宴遊興長生して樂しみも身
 が樂しみ、人を備ふ事でない、威勢強き師直を打損な
 へば首が飛ぶ、討負すれば腹を切る、どちらへしても
 死なねばならぬ、地損する者は我計り、ほめられて死
 なんより、譏られて生たが徳、一門も縁者も、岡目八
 目傍からはいひよい物、力彌へ向て悪口我子にはいは
 れふが、夫にはいはれまいサア、いはれふば云ふて見
 よと聲もあらくなる所へ、老母は走り出給ひ、ヲ、夫

●碁笥

碁石を入れる器。

には云ひにくく我子には云ひよいな、調然らばそちは
 わらはが子、そちに云ふは此母、去ながら口では云は
 ん、地犬同前の畜生は礫に思ひ知らせんと、碁笥なる
 石をひつ攪みかい攪み、目鼻もわかずばらりくと投
 付く、さんぐくに投かけて、わつと泣出しなふ奥、
 こなたも元は他人なり、あの様な子を持つて、そなたの
 心が耻かしい、何もいやらないふまいぞ、サアこなた
 へと手を引て、涙ながらに入給ふ、道は武士の嫁姑、
 ナクリためし、なふこそ聞へけれ、地力彌は泣てひれ伏
 しが、御心根もいたはしし、そと御知らせあれかしと
 いへばいやく、詞一言大事の所、其上母や女房も一
 味也と云はれては、母方の一門妻の縁者天下の詮義に

●百丈の木に登つて一丈の枝より落る。油断を戒むる譬。千丈の堤も蟻蟻の穴より潰るといふの類。

かゝらん時、人の心まぢくにて見苦しき事もある時は、
地屍の上の耻辱也、百丈の木に登つて、一丈の枝より落るとはこゝの事、母の恨も妻の嘆も、本望遂れば、
地今の間に晴る事、大事を思ひ立者が小事に拘る事勿れと、
教訓あれば御尤く、
聞や忘れたり、鎌倉下向の一味の衆、四十餘人より段々飛札到来と、
地箆箆を開き取出せば是はく、
扱は鎌倉首尾よき便と覺へたり、
それ封を切と親子の人手々に聞き見給へば、
敵師直油断の時節到来せり、
一時も早く御下り待奉り候と、
大概同じ文體也、
サア目出度しく、
武具は先へ廻し置く、
旅立とても此身柄、
明日と云ふも手延なり、
笠も草鞋も道での事、
此文共を火中して、
金子を肌

忘るゝな當地の拂ひ宿代は、
書付に相添て箆箆の中に残し置、
心にかゝる事もなし、
我女房はそちが母、
我も老母の顔ばせを暇乞に只一目、
ちよつと覗いて立べしとて、
燭指上奥座敷の、
襖戸そつと明ければ、
床の前に人伏たり、
誰成らんとよく見れば、
嫁姑の笛のくさり、
朱にそみて伏給ふ力彌是はと驚けば、
由良之助をし鎮めア、
是でこそ我女房、
是でこそは我母なれ、
命を捨て我々が、
心に勇を付られしは尤かふこそ有べけれ、
主君の敵の師直に母の仇妻の仇、
三ツの恨を一太刀に晴さんと思ふ門出は、
嬉しうないか嬉しうござる、
足が軽いと進むにもさすが恩愛骨肉の、
變れる形に氣をくれして、
父にはつゝむ力彌が涙、
父は我子を

諫めの笑ひ、泣も笑ふも武士の道、哀にも又頼母し、
 地老母むつくと起上り、ア、嬉しや本望や、其心が知
 りたさに母は自害をなかばにして、今の詞を待たるぞ
 や、いか成る智識のすゝめより、今の詞を引導にて嫁
 姑は成佛す、跡の死骸の取をきも去かたに頼み置、浮
 世に氣がより露塵なし、突込脇指合圖にして、跡見返
 らず門出あれ、あなたへ參つて殿様へ、御披露申さば
 お悦び、さぞお待かね成へし、片時も早く本望遂げ親
 子連立早ふおじや、委しい事は冥途にて先それ迄はさ
 らばやと、がばと突立あつといふ、聲を聞捨て振捨て、
 行衛に響く夜半の鐘、ともにかうく忠孝の武士の、
 道こそ 三乘 逞しき フシ爰に鎌倉、地高の武藏守師直

いぬ島 本庄吉良氏邸のこと。

●文和三年 後花園帝の御宇、足
 利義勝將軍の時の年號。元祿十五
 年のこと。
 ●口切の夜會 實録には近日上杉
 屋敷へ引取るべきに付き、當夜
 上野介は親類の者を集め、吸乞の
 振舞あり。此の事を内通するもの
 ありて十二月十四日の夜大事を仕
 送げたり。

がいの嶋の屋敷構へ、東西に石壁高く西には大河漲り
 て、南の方に入海の船の往返自在にして、甚堅固の要
 害也、忠功武勇の鹽冶が郎等、此要害に氣を屈し、今
 は狙ふ人なしと、聞より師直油斷を生じ、くせの奢の
 歡樂は フシ運の末とぞ聞へける、地文和三年空牙て冬
 も半ばの雲こほり、霰亂る夜嵐に口切の夜會を催し、
 數輩の客人かつてがた、はては亂舞の酒盛に 小
 夜も やうく更にけり、地や有て表の門を叩き、
 調薬師寺二郎左衛門公能、初雪の御茶の湯に伺候致す
 と呼はれば、門番立出、はやお振舞は相濟お客も残ら
 ず御歸り、奥も漸しまひにてお夜詰もひけ申、明日お
 出と答ける、いや苦しからず、宵より參るはづなれ共

●典廩 右馬頭の漢名。典廩といへるは、もとより假設なれど、義央の子に米海藩主たる上杉正徳、密網を指せるなるべし。義央の義子左兵衛佐義周といへり、仇討の當夜屋敷にありながら隠れて出でさりしかば、遂に吉良家断絶に及ぶ。

●燒鳥にへな へなは提緒にて、鷹の脚に結び付る紐。燒鳥に紐を付けるといふ譬へなれば、用心の上に用心をすること。

●柔よく剛を制す 「三番に、軍謀に曰く、柔能く剛を制す、弱能く強を制す、柔は徳なり、剛は威なり云々。同書は石公の撰なりといへど、其の實なほ後の作なりといへど。

●稻村が崎 鎌倉の地名を假りたる。桶屋十兵衛にて手打蕎麥を食し、本一ツ目辨才天の社内にて裝束を付け打入りたり。

●人酔つて清漪は沈み 清漪は小波をいふ。江上波の靜なる冬夜の景色を述べたるなり。朝露といふはなかしけれど、冬夜風無き時は、空に深霧の横はるこれなり。

●拍子木の調子金 丁度此の時夜廻りの拍子木を打つ。其の数は九ツ即ち九ツ時(今の午後十二時に九時即ち九ツ時なり)金といふは五行の一の金なり。陰陽家の説に、五行すといへば、今敵討にも時刻を支配行との關係を考へたるものなるべし。

典廩の御所に御用有て遅參せり、師直公のお寢間にてお咄申事も有り、今宵は是に一宿いたすお心易き薬師寺、地ゆめく氣遣なき事こゝ明られよと云ひければ、實にもいつもの薬師寺殿いざ御通り候へと、門を聞けばつと入り、番の衆太儀く、もはや夜中であらふが、鹽冶判官が家老腰拔の由良之介、今は町人同前に成たるとは聞たれ共、燒鳥に提緒用心にあきはな、柏子木をたやさずかはりくゝに寝ずの番、必ず油斷召るゝな、ヤイ身が供の者、明日晝時分に迎ひに來い、地朝飯はこなたで食ふおれが飯はたかするなと、玄關に入れれば廣間は雨戸しむる音、屋敷の廻り柏子木の音しんくとぞ 三重ふけ渡る、地それ柔能く剛を制

し弱能く強を制するとは、張良に石公が傳へし秘法也、鹽冶判官高貞の家臣大星由良之介、是を守りて既に一味の勇士四十餘騎、露命を亡君になげ打死を一戦に極めて、漁船に取乗て苦深々と身を隠し、稻村が崎を漕出し天にみちたる曉の、霜もするどき白波の 岸の岩根に漕寄せたり、地嫡子大星力彌苦をし退て船板上につと出、忍び提灯指上敵の要害遙に見て、時こそよけれあれ御覽せ、人酔つて清漪は沈み空に朝霧よこおれて、だく氣上を覆へり、柏子木の調子金にして、數は九ツ老やう金尅木火尅金、自滅の相現れたり、破軍は巽に向ふたり、東の門より南へついでのれやくと下知すれば、心得たりと片山源太鎗引提てぞ出にけ

し。老やう時ならず、金冠木は金は木は冠、火は金に冠つとなり是等の關係詳しく知らず、死に角今敵自滅の相の現れたるを見て、今を立出で、實録には九ツ手打蔭すを立出で、今より今より今より今より一時半頃吉原家へ打入しなり。破軍は北斗の第七星、破軍の形をなすより、破軍の先といふ。此の星の指せる方より、陰陽道にて萬事に利あらすついでなる。今破軍は東より南に指ついでなる。東に利あらすとな

●奥山孫八 奥田孫大夫の。須田五郎は矢田五郎右衛門、勝田は勝田新左衛門、早見は早水藤左衛門と、うの森は富藤助左衛門。掛矢の大助、實録に十八貫目の掛矢を以て、即ち打破るとあり。●吉田 忠左衛門のこと。岡島は岡島八十右衛門、不破は不破敷右衛門、前原は前原伊助、立川甚平は横川勘平、千崎彌五郎は神崎與五郎、川瀬忠太は間瀬久太夫。

●兼野 兼野和助、菅谷は菅谷牛之丞、千馬は千馬三郎兵衛、村松は村松喜兵衛、村松傳次は倉橋傳助。●彌田 彌田又之丞、赤根は赤垣源藏、磯川十郎は磯貝十郎左衛門。●遠松甚六 近松勘六、木村は木村岡右衛門、三村は三村治郎左衛門。●くわでんのはいき ぐわでんは花田色即ち花色の脚絆なり。●大竹に憂 大竹を弓の如くに張り、之を関にはめ、弦を断ち切る時は竹延び関を上下し戸おのづから外る。●堀井彌惣 堀部彌兵衛、十子彌九郎は堀部安兵衛。●矢間庄司 間喜兵衛、矢間十太郎は間十太郎。●奥山 奥田定右衛門、大屋瀬平

甚六片鎌かたげ、杉野木村三村の二郎、皆一様のくわでんのは、由良之介が智略にて、八尺計りの大竹に、蔓をかけてぞ持たりける、勇む心は春めきて雪に秀づる雪の梅、白梅そねむ白出立、白小袖に黒羽織、金の札に面々の假名實名書付て、袖印に付たれば、有明月に光り相白石、黒石、打散す亂甚盤に、地金銀の、砂子をまきしに、三重ことならず、フシ扱其次に、地堀井彌惣七十二歳一子彌九郎廿歳、親子名にあふ覺の者ゆらりくと出ければ、矢間の庄司六十八歳嫡子矢間十太郎廿六歳、音に聞へし親子の武士、今日を限りの死軍とにつこと笑ふて出たるは、獅子と虎とが子を連て、フシ湖山を廻ることく也、地扱其外吉田奥山小寺が

る、竹森喜多八大長刀、奥山孫七須田五郎、勝田早見藤の森七すち合せの鎖にて、板金繋ぎの着込を著しわりのかたわりふくべ、家金らんの塗小手を揃へてこそはさしも實に音に聞へし原郷右衛門、大鷲文吾掛矢の大槌、引提く、おり立ば吉田岡島不破前原、各素鎗地横たへて、フシ列をそろへて打たりけり、地小寺藏内立川甚平、千崎彌五郎川瀬忠太夫彼等四人は半弓たばさみ、敵若遠見を付置か、又は落行こばれもの助勢有ば射止よと、由良之介が下知によつて、左右を見定め前後に氣を付、しんづくと歩み行く葦野菅谷千馬村松村橋傳次、大太刀佩てぞ續きける、地鹽田赤根は長刀かまへ、中にも磯川十郎は十文字の鞘はづし、遠松

は大石瀬左右門、岡野は岡野金右衛門、中村は中村勘助、矢崎の右衛門、岡崎八十右衛門、平賀の左衛門は貞賀彌左衛門、牧野の平治は杉野十平次。

●義を泰山より頼んじ命を驚毛と輕んじ、義は泰山より重く、命は狐毛より輕しといへる古語を取りしなり。司馬遷の「人固より死あり、死或は泰山より重く或は狐毛より輕し」といふ語に基く。

●天寛波句 天寛も波句も悪魔にて人に害を興ふるもの、而も義士の鍛石心には何者も加ふる能はず天下を恐るゝ。 天下の法度を恐るゝなり。

●合詞 夜討夜戦の時など、闇黒にて敵味方を辨じ難きより、豫め合詞を定め置き、夜中出會する時は互ひに唯可し、合詞を交換し、

三〇
嫡子、由良が従兄弟の大星瀬平、岡野中村矢嶋の右衛門平かの左衛門牧野の平治、由良之介は後陣の押へ忠臣以上四十五騎、義を泰山より重んじ、命を驚毛と輕んじ、心を金石にたくへしは、いかなる天魔波旬成共たまりつへうはなかりけり、由良之介下知して曰く、夜討の大事は奇正の變敵を明りにおびき出し、味方は暗みをこたてにとれ、女童に手な負せそ、地天下を恐るゝ敵討矢を放つ共塀を越すな、火の用心に心を付て繋ぎ馬を放さすな、折々に合圖の笛吹合せく、敵に中をわらるゝな敵押へて打ならば、名乗りて勢を引まとへ合詞を常にして、味方討すな同士討すな、合詞も三度に替へ、乗込時は山か鐘、軍に成ては花か海、退

合詞の合はざる時は敵なる事を知る。即ち下に山といへば鐘、花といへば海の類。

口は笠か柄、向ふ者は討て捨邊る敵を追駈て、無益の高名手間どるな、取るべき首は只一つ、サア攻寄せよと手組を揃へ、しとしとく、しとしとく、とつめ寄せて、門の南北二手にわかり、館を睨んでひたくと、堀うちに付たりし心の内こそ 三重嬉けれ、地時刻はよきぞすは乗れと千崎彌五郎、須田五郎が肩を踏へて飛揚り、堀の腕木に手をかけて、乗入んとせし所に、夜巡中間拍子木打て來りける、人々あつと静まれ共、イヤ乗かゝつた一番乗、やはか乗らで置べきと、ゑいやつと打またぎ、フシ難なくひらりと乗込ける、地中間驚きやれ盗人よといふ所を、彌五郎取て押へ打て捨つべき奴なれ共、案内の爲暫くと帯を解て縛しあげ、ひ

●川忠太夫

間瀬久太郎。

かへ柱にくくり付我拍子木を打間に、門の戸びらを打
 はなせと、扉の内外しめし合せ、拍子木けはしく打
 れば、外より小寺川瀬忠太夫、掛矢振上どうくと、
 打音に相番の中間、何事やらんと出る所を彌五郎飛か
 ぶつて切て捨て、又拍子木を打ければ、外よりかけや
 どうくと、咎むる中間すつはと切り、拍子木の音
 かちくくと、掛矢の音どうくと、中間出ればす
 つはと切り三人切て捨る間に、力にまかせて打掛矢門
 の金物打外し、貫の木中よりほつきと折、扉微塵に打
 碎かれ、大門くはつとぞ開ける、地大將由良之介忍
 びの火指上、内を見廻し山と聲をかければ、鐘と答
 へて一同に、我もくと込入しが、つまりくの戸を

しめて、内より錠は固めたり叩き割ば目を覺し、内よ
 りせんをとらるべし、左右なふ入べき様もなき所に、
 かねて期したる謀こと大竹の弓五張、戸口くの敷居
 鳴居にしつかとはませ、各一度に手を揃へ刀を抜て弓
 の弦、ふつくと切ければ、大竹にはちかれて鳴居
 を四五寸持上、遣戸妻戸ははらくと、將基倒しと
 成にける、調力彌すかさす椽の上へ駈上り、鹽冶判官
 高貞が家臣大星由良之介義國、同じく力彌義道、此外
 忠義の武士四十五騎、亡君の讎を報せんため攻寄候、
 武藏守殿の御首を給はつて、亡君判官が黄泉の闇を照
 すべき、地存念なりと呼はつて一文字に切て入れば、
 すはや夜討と混乱して、宵の茶の湯の茶せん髪、寢惚

●二木石堂 高師直に縁を求めて
二木石堂となしたるなり。實録に
は東隣土屋主税、北隣本多孫太郎
屋敷なり高張提灯を掲げて尋ねた
り。

顔に素肌武者、フシ太刀よかまよとひしめいたり、地小勢なれ共寄手は今夜必死の勇者、合詞合圖の笛吹合せく、こゝに集まりかしこに亂れ右手にひらき弓手につばみ、秘術を盡せば由良之介、餘の者には目なかけそ、只師直を討取れと八方に下知をなし揉立く、三重せめにけり、地北隣は仁木播磨守、南隣は石童右馬の介、地兩屋敷より何事かと、屋の棟に武者を上提灯星のごとくなり、洞軍兵屋根より聲をかけ、御屋敷騷動の聲太刀音矢叫び事騒しく候故、狼藉者か盜賊か但非常の沙汰候か、承り届よと主人申付らるゝと高らかに呼はりける、シテ地寄手は元より返答せず師直方にはうろたへて、聞入る者もなく隙間あらばと逃足も、

門々には寄手の兵鎗の穂先をつゝかけて、出ば突んと待かけたり、ロキ洞屋根の上より口々に、よし何にもせよ隣屋敷の騷動を、聞捨にせん様もなし、御加勢申一防仕らんと呼はりける、シテ大鷲文吾原郷右衛門詞をそろへ、是は鹽冶判官高貞が家來の者共、主君の仇を報ぜん爲の働き候、天下へ對する狼藉にても候はず、元より兩隣仁木石童殿へ、何の意恨候はねば卒爾致さん様もなし、火の用心はかたのごとく申付て候へば、是以御用心に及ばぬ事只穩便に捨置れ候へ、それとも是非御加勢と候へば、力なく一矢仕らんと高聲に呼はつたり、ロキ兩家の人々は是を聞、御神妙く弓矢取身は相互、我人主人持たる身は尤かくこそ有べけれ、

地御用あらば承らんと、フシ静りかへつてひかへける、
 地一時計の鬪ひに寄手わづか二三三人、薄手を負たる計
 りにて敵の手負は數知ず、討るゝ者は百餘人残る者は
 逃隠れ、今は手に立者もなしされ共大將師直、影も形
 も見へざれば由良之介大きにせきて、年月心を碎き
 しは彼奴一人を討ん爲、寢間と覺しき所を見よと、地
 襖障子を蹴破りく、奥へ入て見てあれば、夜着布團引
 さばき枕計りを残りける、調ヤア是を見よ、かゝる寒
 夜に此蒲團暖りさめざるは、只今脱しに極つたり、近
 くにあるぞそれ捜せと、天井屋根うち椽の下鎖を突
 込矢を射入、うちかへして尋ぬれ共師直はなかりけり、
 調外にも人を配り置く門へ出ん様もなし、をのく、呆

れて立たりしが、由良之介あたりを見廻し横手を打て、
 あの水門のそどこいこそ一人はふては通るべし、内よ
 り水を流しかけ外へまはつてうかゞひ見よ、内に人の
 有ならば水のはゞに知るべきぞ、地心得たりと堀井の
 彌惣遠松甚六、外へ廻つて待かけしに内より水をどう
 ぐと、汲入く、流せ共水口わけてしたゞりの、跡へ
 あまつて落口は、フシ岩にせかるゝ如く也、地サア人有
 に極つたり、鎖を入て捜せやと、手々に鎖を突込く
 かりたつれば、たまりかねて泣叫びなふ御助け下され
 と、調這出るは薬師寺也、人々はつと呆れし所へ、大
 星力彌走り寄なんのごくにも足らぬ奴、地人手間取ら
 せし憎さよ憎しと、振上げて首打落せばくれなるの、フシ

血汐の樋とぞ流れける、由良之介大音あげ是程迄し
 おほせて、師直を討もらすよつく天道に捨られたる我
 々、武運の程こそ口惜けれ、調すごとくかへつて死な
 んより此所にて腹搔切、四十五人の怨念悪靈となつて
 師直を取殺さんと、思ふはいかにといひければ、力彌
 を始め原矢間、堀井片山四十餘人いづれも左様に存す
 れ共、大將の詞を相待たり、我々先を仕らんと、面々
 肌を押寛ろげ既にかふよと見えし所に、地かねて信す
 る正八幡愛宕山の御加護にや、馬屋の傍成小屋の内よ
 り烟しきりに渦き揚る、由良之介きつと見て南無三
 寶、あの烟其儘打捨外の人にしづめられ、鹽治郎等四
 十餘人師直を討損じ、うろたへたりといはれては耻辱

●浮木にあへる盲龜は是三千年の優
 曇華 千載の一遇を悦びたる詞。
 「法華經」に「佛羅得值如優曇華波
 羅華、又如一眼之龜值浮木之孔。
 とあるに基く。優曇華は三千年に
 一度花咲くといひ、盲龜の浮木と
 同じく共に遭遇し難き譬なり。

の上の名折なり、地いざ鎮ん尤と、我もくと小屋の
 戸に手をかけ、ゑいやつと引放せば、中には薪木炭俵
 フン烟は消てなかりけり、此内は物ぐさし捜せや捜
 せといふ聲に、内より炭を掴かけ割木を投かけ投つく
 る、矢間の庄司は炭俵弓手に掴んで投のけ、無二無三
 に切て入師直今は叶はじと、おどり出るを十太郎餘す
 まじと飛かより、押ならへて無手と組一しめしめては
 ね倒し、調取て押へ高の武藏守師直を、矢間十太郎組
 留たりと呼はれば、由良之介を始めとし四十五人が
 聲々に、浮木にあへる盲龜はこれ、三千年の優曇華の、
 花を見たかや嬉しやと、首打落し聲を上、躍上り飛上
 り、扇を開き舞もあり、悦びの時の聲、首眞中に取廻

●光明寺
泉岳寺。

鎌倉の名刹。實は芝の

し妻を捨子に別れ、老たる親を失ひしも此首一つ見ん
爲の、今日はいか成る吉日と首をた、いつくひつい
つ、一度にわつと嬉泣、フシことはり過てあはれなり、
地由良之介は師直が白無垢ちぎつて首をし包み、
間殿御親子は姿を變て片時も早く、我君の御菩提所光
明寺の御墓迄此首を持參あれ、地我々は跡よりとあら
ぬ下郎の首取上、同じく師直が白無垢切てをし包み、
鏡に結び付、堀井の彌五郎、大鷲文五にさし荷なはせ
師直が本首を、御墓所に供ゆれば、今生の本望これ迄
なり、せくまいくせく事ない此屋敷も今迄は、師直
が屋敷也、討れし跡は天下の地、踏荒すは恐れぞや第
一は火の用心、螢程の火もしめせと、つまりくを静

●矢はげ 矢を短ぐこと。馬のは
るび、馬の腹帯の略。膚脊、馬に
鞍を置かずして乗るをいふ。

々と心静かに巡見し、敵の類一家の武者、追手かく
るは目前也、いらぬ我等が一命、彼等に施し報捨せよ
と門外におりして、待合せみる武勇の程、天下にふ
るゝ東雲や、是は高名寺の名は光明寺へと 三重いそ
ぎける、夜も明ゆけは、谷七郷に隠れなく、在鎌倉
の大小名、何事やらんと兇は着れども鎧は着す、片手
矢はげて走るもあり、馬のはるびをしめ兼て、膚脊に
乗て駈るもあり辻々の番太こ、人馬東西に走達へ上下
の騷動なのめならず、師直が嫡子師康が郎等、光明
寺の門前に雲霞の如く取かけ、門を開きて御首渡せ、
異議に及ばし寺の門を叩き割り、堂も伽藍も打碎き片
はしに坊主首、捻切て奪ひ取れ渡せくと轟きける、

いさかひ過ぎての棒ちぎり
嘩過ぎて棒ちぎり木ともいふ
事後に騒ぎ立る誓へ。

地寺僧の面々衣の袖に玉襷、棒よ杖よと防げ共、フシ制
止かねて見へければ、地住職の老僧立出、調やあく
かくいふは師康殿の手勢とや、して侍か下郎かよも侍
にては有まじ、鹽冶殿の家臣四十餘人の人々は、師直
を打取首を鹽冶の墓に手向、本望達せし上は、鎌倉殿
の御咎め恐れ有とて、各身を捨て只今幕府の御所へ罷
出、いか様共御制法に仰付られ候へしと、御下知を相
待申さるゝ、是をこそ弓取の手本とはいふへけれ、和
殿原は主君の親をやみくと討せ、其場へおり合討手
の一人も切とめず、地いさかひ過ての棒ちぎり木、佛
場といひ長袖にむかつて、いかつがましき振舞當寺の
法師は怖からず、幕府の御所より御指圖のなき間は、

●はち言 八辨のこと。

●畠山左京 上使に來りし人。

あの生首が髑髏に成迄もいつかな事、此老僧が手足を
もいで取らば取れ、渡す事はかなはぬと、フシはち言放
つての給へば、地いや論は無益唯唯込入て奪ひ取れ、門
押破れと喚きける、かゝる所に畠山左京の太夫上使な
りと呼ばれば、さしもの軍兵憚りて門の左右に平伏す、
調内より門を明けければ、畠山老僧に對面有、鹽冶判官
が家來共主人の仇を報はんため、夜前高の師直が館へ
押寄せ、師直を打取る條武門の面目弓馬の譽といひな
がら、御所近邊共憚からず鎌倉を騒がす、御咎めによ
つて則仁木石童に御預け、今日鹽冶が墓の前にて、殘
らず切腹せさすべしとの御誼也、地はた又師直が首は
一子師康願ひに任せ、送り遣すべしとの仰也と述らる

れば、住寺御誂を承り、首桶しつらひ宜しくまかない
 とり納め、調師直殿の御内にて、人かましき方請取給
 へとありければ、地執權三任の郡司と厳しげには名乗
 れ共、甲斐なき主の首持て、すこくとして歸りしは
フシ面目なふこそ見へにけれ、地直に用意有へしとて
 判官の廟を中にて、左右に疊敷並へ前に白砂積みた
 るは、こぼれし糊を清めんための用意なり、後に白幕
 引廻し白絹の蒲團を敷、四十餘振の腹切刀三方になら
 べたり、鎌倉中の諸侍天晴武士の守り神、弓矢取身の
 あやかり者と、威儀を正して參詣す、歌人は傷みの和
 歌をつらね、文者は歎きの韻を搜り、上下萬民老若男
 女名残をし合我先にと、光明寺に群集して門番、市を

●未の歩 人の死に近づくに喩ふ。
 摩訶摩那經に「譬へば勝陀羅の羊
 を驅りて屠所に至るに、歩々死地
 に近づくが如し、人の命も亦是の
 如し」とあり。これより取りしな
 り。

●名古屋肥前守 細川越中守のとも。

ぞ 三乘一なしにける、フシ既に時刻も、午の刻、地未の
 歩み近付て檢視の大將名古屋肥前守、光明寺に著給へ
 ば、介錯の役人を始めとして、帳付横目其外の、役目
 く、の場を受取、フシこゝを晴と列座あり、地用意よく
 は面々出られよと有ければ、左の幕より大星由良之介
 を先に立、矢間堀井原郷右衛門廿三人つゝいたり、右
 の幕より大星力彌第一にて、小寺片山藤の森廿二人打
 連て、歩み出たる有様は古今稀成る武士の業、譽れを
 取て世の中の、濁りにしまぬ白小袖、娑婆は夢なる契
 りにて淺黄上下あさく共、君に三世の忠孝と各々墓に
 回向して、諸役人に一禮述へ一面に著座して、目と目
 をきつと見合せ檢視の詞を待たるは、天晴名士の腹切

●強將の下に弱卒なし
に弱卒なしとも云ふ。
勇將の下

様尤もかくこそ有べけれど、知るも知らぬも涙を浮べ
あつと、感ずる計り也、名古屋肥前守進み出
上よりの御説には此度鹽谷判官が家臣四十餘騎、高の
師直を打て亡君の讎を報する事、前代未聞の忠臣一人
當千の働き甚感じ思召、一命助け置れたく思召といへ
共、太平の御代に干戈を動し御旗下を騒すあやまり、
國制據なく切腹仰付らるゝ、強將の下には弱兵なし、
方々か忠義によつて鹽谷判官、存生の仁徳思召やられ
判官が一子竹王丸父が遺跡相違なく、出雲伯耆兩國宛
行はるゝとの御説、冥途へ参つて判官に申傳へ有難く
存奉り、地早々切腹仕れと高らかに述べ給へば、はあ
つと一度に頭を下げ、悦び涙悦び笑ひ、肩衣取てをし

のけく由良之介刀頂戴して、左の小脇に突たつれば
力彌も續てつき立たり、次第く突立つき込引まは
しく、時も違はず場も違はず、主君の墓の左右にて、
一度に腹を切たりし、三世の縁こそ頼もしけれ、
地やがて残らず介錯して、直に御寺を墓所、萬劫末代
萬々年、朽せぬ石に名を残し、主君の子孫家繁昌、富
貴自在の幸も忠と孝との誠の心、天地にかなひ佛神も
目出度、守り給ひけり

お夏 清十郎 五十年忌歌念佛

解題

此の淨るりの材源も古き巷説にして、其の實説は寛文年中の事に屬す。「實事譚」には寛文二寅年の事とし「中興世話早見」には、萬治三子年のこととせり。寶永六年に五十年忌とすれば後者當れるが如しといへども、これ或は寶永六年より五十年前を割出したるものなるやも知れず。兎に角寛文初年のことと見れば大誤なし。即ち播州姫路の米間屋但馬屋九左衛門の娘お夏「五人女」は九左衛門の妹に作る。手代の清十郎と密通したるを兩親驚き、二人の間を裂きて清十郎には暇を遣はしたるが、清十郎はお夏と謀し合せ、兩親の隙を窺ひお夏を窃出し、船にて大坂に欠落せんとせし所を、早くも追手かゝりて途中にて取押へられたるが、折ふし但馬屋には金子紛失の事ありて其の嫌疑は清十郎にかゝり、殊に主家の娘をそゝのかし誘拐したる咎によりて、清十郎は遂に死刑に處せられぬ。お夏は一命を助かりしも

戀人の刑せられたるを悲み、一時發狂したるも後ち再び正氣となれり。されどかゝる事件の片破れ女とて惡評立ち嫁に貰ひ人もなければ養子に来るべきものもなく、但馬屋の家も零落し、お夏は寡居して片上といふ所に茶店を出し、憂き年月を過ごし、卒塔婆小町のそれならで七十餘歳まで存命したりといふ。「五人女」に其の頃は上方狂言になし、遠國村々里々まで二人が名を流しける」とあれば、歌舞伎狂言にも仕組み、世の是沙汰となりし事件なれば、小唄にも作りて流行したり。「實事譚」に、青木鷲水が「吉日鏡會我」寶永七年版といふ當時の小唄を集めたる書より左の一曲を引けり。

むかい通るは清十郎じやないかいのヨイ／＼笠がよく似た昔の小笠がさりと
はゑいやらゑいそりやサアゑいやらゑい、笠が似たとてな清十郎であらばいの
ヨイ／＼お伊勢参りはの、皆清十郎か、さりととはゑいやらさ

其の他「五人女」近松の作中に取入れたるもの等數種あり。「清十郎殺さばお夏も殺せ、生きて思ひをさしよよりも」、「よさ來いといふ字を金紗で縫はせ、裾に清十郎と寝たところ」、「小舟作つてお夏を乗せて、花の清十郎に櫓を押さしよ等二三にして

足らず、當時いかに浮名の高かりしかを知るべし。しかしお夏は美人にはあらで、醜婦なりきとの一説もあり。「亂脛三本槍」西澤一風作享保三年版にいふ。

〔前略〕片上のお夏を見よ、あれこそ日本に名を流せし播州姫路但馬屋お夏がなれのはて、手代清十郎とせゝくりあひあげくのはてにお夏をぬすみ出し、大坂へたちのきしが主人の娘をかどわかせし咎のがれず、つゐに顯はれ二人共姫路へ引もどされ、清十郎は首をはねられ、お夏はいたづらものとうきな立嫁いりの口なく、二人の親はころりさんしやうみそ、兄弟なければ誰とりあぐる人もなきのみだ、身すがら此片上へ引こし、生れながらの後家となり、茶店を出して旅人の足をやすめ、茶の錢とつて渡世とす、當座はお夏が茶ともてはやせしが、次第につむりの雪山をなし、したぢの惡女による年の、ひたいの皴もより來るや、ゆくも來るもわきめして立寄るものなし……いま語りし但馬屋お夏事は、國元までも風ぶんの女道筋なれば立寄らんと、互ひに語るうち、片上につきたり、爰よそこよとみるうちに、但馬屋といへる書つけ、まづ休まんと床几に腰をかゝれば、七十ばかりの老女あるほど腰をかゝめ、旅人茶を参れとさし出す手はわしくまたかの如

し、湯ぎやう水もいつしたやらしれず、あたまに油つけず、櫛の齒入れねば鼠の巢にひとし、そなたは姫路のお夏とやらか、老女興さめたる顔ふりあげ、旅人は何をいはします、それは昔々の名、今更聞くもうらめしと少しは耻る顔、そらうづ川のうばよりつり取る俵、人間世にある時ぞかし、さしも名高きお夏も、よる年のつれなく、かくまで衰ふるものか

と作者は歎息したり。此の記事は作者の實見談を筆の序に挿入したるものなるべければ、享保の始めにはお夏はなほ七十余歳にて存命したるなるべし。淨瑠璃には、加賀掾の正本に「お夏清十郎歌念佛」の外題あり。竹本座にては寶永二年十一月廿一日初日前「木曾軍記」の切に「お夏清十郎笠物狂」あり、兩者とも其正本を見ざれば詳説しがたきも、後者はお夏狂亂の一段物なるべし。「五十年忌」は寶永六年正月二日初日にて、前が「今川制詞條目」の切に出たる者なり、加賀掾の正本はこれよりも以前にして、外題に「五十年忌」の文字を加へ竹本座にて出したるものか、或は宇治にて竹本の作を「五十年忌」だけ除き用ひたるものか、恐らく二者の一なるべし。これら淨瑠璃小唄より、歌舞伎狂言、小説にまでお夏清十郎の事を作りたるもの頗る多

し、されば其の噂は雲の上までも響き、靈元上皇はある時、清十郎聞け夏がきてなく時鳥と遊ばされし由。文化文政に至り、讀本双紙等の材源に二人の事實を作りたるものは枚擧に遑あらず。

歌念佛の外題は、清十郎處刑の場へ、妹と嫁と歌比丘尼となりて入込むことあれば、斯くは號けたるなり。五十年忌の追善なれば念佛に縁を求めたるものなるべし。

お夏 五十年忌歌念佛

近松門左衛門作

上之卷

●通ひ車云々 昔し深草少将、小野小町を戀ひ、百夜通ふ事を約し、九十九夜まで通ひしが、其の都度車の楯に其の敷を記し、百夜に滿る夜に到り、障る事ありて逢はざりきといふ故事を引けり。

●仇の情 百夜通へとは小町が少将をたぶらかしたる詞にて、眞實の情にあらずとなり。

●閨の扇は班女が親骨にせかれ 「和漢朗詠集」班女閨中秋扇色、班王蓋上夜琴聲。これは漢の成帝のおもひもの班婕妤が、後に君龍の哀へたるを怨み、扇の詩を作りて閨をやりし事を賦したるものにして、また諸曲「班女」にも、吉田少将と花子の上に、此の扇の事なれば、扇の親骨より親父のせくとはいひしなり。

序詞 通ひ車は小町が仇の情に乗せられ、閨の扇は班女が親骨にせかれ、形身の烏帽子は行平の言かぶり、相木の鞠山路が笛、古今其品かはれども、皆これ戀路の寄せ榎、根太も根強き門柱、其但馬屋の初色に、立つや浮名の濡草鞋、笠がよく似た菅笠の、雫積りて戀の淵、湧て流るゝ和泉の國、水間の里の佐治右衛門島作りの田烏や、鶯が生たる高給取の手代は主の代りをも、清十郎といふ子を持って、フ老の入まへ暮しよ

●形見の烏帽子云々 これは松風が須磨浦に、在原行平と別れる時、形見に賣ひし烏帽子持衣のことなり。諸曲「松風」に「行平の中納言、三年はこゝに須磨の浦、都へ上り給ひしが、此程の形見とて、御立烏帽子持衣を渡し置き給へども、之を見る度に、いよましの思ひ草」とあるに基き、巢林子作「松風村雨」の淨瑠璃には、此の形見を持來り行平に見せんと煩悶するもあり。松風村雨「奉照」

●柏木の鞠 柏木右衛門督、六條院にて鞠の御遊ありし時、女三宮に近き姿らせ、遂に宮と通じて淨名を流すと「源氏」若菜の巻に見えたり。「大經師昔曆」から猫が男猫呼ぶとて云々の條参照

●山路が笛 「用明天皇職人鑑」に花人親王亂を避けて筑紫に落ち、山路と名をかへ身を牛飼に變し、草を蒔り笛を吹き、世を忍び玉ふをいふ。●初色 但馬屋の一人娘にして美色あるをいふ。●立や浮名の濡れ草鞋 其の頃の流行唄。●湧て流るゝ和泉の國 「みかひの原わきて流るゝいづみ川、いづみきとて戀しからん」の上の句を取りて、和泉國にかけたたり。●水間の里 泉州にあり。水間寺又は水間觀音とて有名なり。「五人女」に清十郎の父は播州室津酒造家、和泉屋清左衛門とあるを、近松は其の屋號を取りて泉州水間の百姓左治右衛門として、憑手代勤十郎に欺むかるゝ正直親父に作り變へたり。●田烏 賤しき百姓の。●鶯が生んだ高給取 醜き親が美しき子を設けたる時など、鶯が鷹を産むといふ。古語なり。●入まへ 收入の意。●正月着物播磨瀧 正月着物を着て播磨瀧を越ゆるの意なるべし。●おぼこ 世なれぬ處女のこと。おぼこ娘のこと。●とはかは とつばかは又とつばはといふ。念がしき形容。それに川口をかけたるなり。川口は安治川口にして、中國四國等への乗船場なり。

き、正月着物播磨瀧、延引ながら年頭に、娘はおしゆん嫁の名も、三人連の木賃宿、明日は出船の名残とて、道頓堀の芝居過ぎ、名所くは大阪の、娘子達に交りても、打てず押されず手入らずの、田舎生れのおぼこにも、父の乗りたる便船の、印しは如何に錨綱、手繰り着いたぞ日は傾く、いざ急がんとちよこく走り、とはかは口にぞ着にける

●正眞貧乏隙なし 貧乏隙なしといふ事を口實にして無沙汰をするものあれば、偽りにあらず誠なりと。

●物作り 小作人の意。

●赤らむ 穀物などの熟して黄色となるをいふ。

●したゝゐるま 下に落付いてゐる間。

●留守をいふ 清十郎の妻にするをいふ。

かのお禮も申さつしやれと申すする、チ、くとは申しながら、正眞の貧乏隙なし、物作りの事なれば、いや大根時の綿時の、爪を蒔くは茄子を作るは、牛蒡島豆島、粟よ黍よ藍時よ、麥を蒔くぞ赤らむぞ、田を植えては草を取る、穂が出れば刈まする扱になれば磨まする、米になれば炊まする、飯になれば食まする、地何んじやしたゝゐるまとてなく、フシ御無沙汰とこそ語りけれ、地勘十郎打首肯き、調尤もく、何方も隙はなし、して此船に乗て何方への下りぞといへば、先旦那へ春の御禮も申し清十郎にも逢んど存じ、これは妹お俊あれは行くく、清十郎が留守をもさせんと存じおさんと申す娘分、連て姫路へ罷下る、迎もの事に

●片假名の木の空 森利は片假名の木の字形に體を括り付けて、楯にて突き殺すが故にしいふ。

●如來様 情け深き親切な人といふ意。

御同道致さんといひければ、イヤコレ逢ひたいといふは其事よ先づ下る事は入らぬもの、清十郎が沙汰を聞かれぬか、さてく氣毒笑止な事、旦那の娘お夏様と密通して、お夏様のお腹は茶壺を抱た様になる、それに立野の一門中へ祝言が極つて、嫁入道具も出來揃ひ、身共が道具を請取て下り次第の嫁入、彼の腹の土産物、聲から詮議があるは定、否でも應でも清十郎は、片假名の木の空で、此様に手を廣げ、引張風は知れた事、親兄弟も同罪なり、何卒嫁入の無い先に、身を引く思案がさせたさに、フシ知らせますると威しける、地親は在所の律義者何の企みのあるとも知らず、ア、お前は如來様内々どうやら承り、地氣遣いたせし折柄なり、

●火屋へ片足 火屋は火葬場のこと。年六十より餘命少ない者の縁起したる西落、棺桶に片足突込んでゐるなどいふ格なり。

●下心のわるい

朋輩の好みとて御知せ有難し、年六十に餘つて火屋へ片足踏込んで、一人の悴が木の空で、引張風になるのが、そもや見て居られうか、悴が命助かる様に、御思案頼み奉る、さりとは誰に似て、下心の悪い悴めと、何處で聞てかいふことと泣て口説くぞ哀れなる、地時に船場に案内して、姫路の本町但馬屋の勘十郎様のお船は是か、難波橋の蒔繪屋誂へのお道具、今宵船に積んと存じ、銀子請取申さん爲参りたりとぞ言入ける、あれ親父聞てか、銀を渡せば道具が下る、道具が下れば嫁入がある、嫁入があれば清十郎は引張風、何んと此處が談合、身は國へ歸つて、旦那へは道具屋が出来さぬ分て濟し置く、彼の道具屋の手前は親父から、百

●百五十兩か八貫目 假りに一兩を六十兩替とすれば、八貫目百三十三兩餘なり。即ち百四五十兩の金といふと。

●から鮭 鮭の鹽引のこと。支那には身體を鹽にする醃刺あれば、それを通俗に碎きてから鮭といひしなるべし。

●皮の身 察しの悪い人、又は譯の分らぬ人などの意にや。証ならず。

●構ひ 故障といふに同じ。

五十兩か八貫目渡してさへ置たれば、波風立ず嫁入が延る、地延さへすれば清十郎、隙を取らうと走らうと、此勘十郎請取た、こゝは親父大儀ながら、八貫目何んぞいの田地賣ても子の爲じや、出したがよいと言ひも果ぬに佐治右衛門恂として、詞工、御前様は一口に八貫目、假へ清十郎引張風にならふが、鹽鮭にならうが、世が泥の海に成るとても、一文も銀は無い、エ、此方は皮か身か合點が往かぬと顔擧め、立て入るを引留め、それは親父廻氣な、然らば銀も入らぬ思案がある、あの蒔繪屋に對みて、此娘には構ひあつて嫁入はさせぬ、道具は其方へ預けた銀渡したら損であらうと、一言いへば濟むじやが成るまいかといひければ、ハテ金さへ

●切羽脛金 切羽は刀の鍔の両面
 桐と鞘とに當る所に添ふる金物、
 脛金は鍔元を固むる金具にして、
 切羽脛金するといへば詰開きする
 の意。

入らぬ事ならば、我子の爲じや申さいではと表の間に
 ぞ出にける、播磨の姫路但馬屋の嫁入道具を、請取た
 蒔繪屋は此方か、身共は和泉のどん百性、土堀せりて
 おじやれども、但馬屋のお夏にはこつちに先の構ひが
 ある、外の男を持せぬからは嫁入道具を押へた、勘十
 郎殿先刻にから切羽脛金する通り、金渡したら御損で
 あらう、斷つて置たぞと苦りきつてぞ申ける、地蒔繪
 師の手代冷笑ひ、間ハテサテ悪い工面ななされ様、こ
 れ娘に構ひあるならばそれは先との詰開き、此方に構
 はぬ事、如何でも是は廻し者、近頃悪い仕方といへば、
 ヤア何んじや廻し者、チ、男じやもの廻しをせいでは
 いものか、若い時は小相撲の一番も捻つたおれじや、

●あの仁
 上方調、あの人といふ
 に同じ。

地男につがふ詞がある、廻しかいたかかよぬか、來い
 見せうと裾褰げ、フッ胸を叩いて方身ける、蒔繪師も
 聞ぬもの、片肌脱げば二人の娘、船頭船方居合せ先づ
 勘忍と取付きける、勘十郎も分け入りてさままゝ宥め
 押沈め、蒔繪師屋殿も悪い合點、道具は其方の銀は此
 方の、銀遣らずに此方へ請取らうといふにこそ、其方
 と我とに彼の仁から一筆取て置くならば、我も旦那の
 手前が立つ、其方も下細工へ手間遣らいても大事なし、
 身に任せて黙つて居やこれ親父、何んと一筆召されう
 か、ハテお前の御了間ならば如何なりとも、それおさ
 んお望み次第に書きやといへば、勘十郎立寄て、但馬
 屋のお夏祝言に付構ひこれあるにより、嫁入道具押留

●一左右 通知するを。

め申所件まうけんの如ごとし、但馬屋たじまや勘十郎かんじゅうらう殿、蒔繪師まきゑし權之丞ごんのじやうぢやう殿、清十郎せいじゅうらう親左衛門おんさゑもんと好む通よほりに書かければ、親おやは悦よろこび申着まを明け、墨すみ黒々と捺なしたりし、フシ因果いんぐわの程ほどぞ不便ふびんなる、地ち一札いちしやく巻まて勘十郎かんじゅうらう懷中くわいしゆうにしつかと收おさめ、サア埒らちは明あた塗師屋ぬしや殿、萬事ばんじは國くにより一左いちざ右うせん、先まお歸かへりといひければ、塗師屋ぬしやは船中せんちゆう一禮いちらいし、フシ辭儀せぎを陳のたまてぞ歸かへりける、地ちなふ親父おやぢ殿どの此この勘十郎かんじゅうらうがよい時ときに居合ゐあせて此この方あた親子おやこの仕合しあはせ、道具どうぐさへ下くだらねば祝言しゆげんは延引えんいん、其中そのうちには清十郎せいじゅうらう、隙ひまを取とらうが走はらうが氣遣きづひな事ことはなし、勘十郎かんじゅうらうに任まかされよ、此この舟ふね今宵こんや出いると聞きく、然しからば是こゝにと乗移のりうつり、方々かたがた此度このたび下くだつては、清十郎せいじゅうらうが爲ためにも悪わるし、よい時分ときぶんに便たすせん、其時そのとき必ず侍人まじりるぞや、數年すねん馴染なじみの

清十郎せいじゅうらう、悪わるい様さまには致いたすまじ、何なんれもさらばといひければ、親おや子の者ものは船ふねより上あり、手てを合あせ涙なみだを流ながして、朋輩ほうばいの好このみとて有難ありがたし忝かたじけな、生なまの親おやの我等われらより、清十郎せいじゅうらう、郎奴らうぬが命いのちの親おや、嫁よめも娘むすめもやれ拜まがめ辨わへもなき清十郎せいじゅうらう、弟あにとも下人くだじんとも思おも召めて御意ごい見みなされ、うつくしくお暇いとま取と再び在あり所ところへ來きる様さまに、偏ひとへに頼たのみ奉たごると敵かたきと知らぬ愚おろかさの、親おやの情なさけは子この爲ために藥くすりといへど是こゝは又また、毒どくを合あする佐治さぢ右衛門うゑもん、心こゝろは律義りつぎ一ひとばいに、煎いじ詰つたる水間みづまの里さと、船ふねは別わかれて 三重みへ下くだりける

中之卷

フシ所ところさへ、地戀ちこひ知り顔かほに姫路ひめじとは、いつ名付なづしぞ但た

●月雪花紅葉 春秋といふに同じ。

●深き濡れ 深き戀のこも。

●菩提心 佛門に入るこ。

●蚊帳の祝儀 嫁入蚊帳を新調したる祝ひ。

●生絹 すいしは生糸織にして、練絹に對していふ。

●縵子 麻糸を縵りて目を荒く織りたるもの。心のもつれにかけたるなり。

●紙帳 紙にて製したる蚊帳なり。

馬屋のお夏が父は九左衛門、國一番の米問屋、有銀箱も十づゝに、六十近き月雪や花も紅葉も算盤に、かゝる親には似ぬ娘、お夏は深き濡れゆるに、菩提心と意地張て、嫁人も丈も延くの、それも戀する氣の前か二人の親の顔までも、飾磨のからち播磨湯、フシ國に浮名や立ぬらん、地今日は蚊帳の祝儀とて、萌黄の生絹六日町七日町、屋の内祝賑へども、お夏は更に氣に染まぬ、心の内の縵子の蚊帳、色香を外に漏さじと、ア、おれや風引たさうなとて、はなうちかみて紛らかす、忍び涙ぞ道理なる、心を知らぬ腰元共、お夏様と聲様と、此蚊帳でしげらしやんしたらば、いかな藪蚊も羨りかろ、此方は蚊帳は及びもないせめて嫁入の紙帳な

りと、あやかり度いと口々に申しお夏様、新し蚊帳の御祝儀少し浮きくとなされませ、賑かに酒盛して謠ひませうといひければ、ア、何をさはくしやるぞい、蚊帳が出来やうが紙帳が出来やうが、此氣合で今やなど、嫁入する氣は微塵もない、あつたら手間であの蚊帳を、生絹の衣にして着たい、只無常氣でをかしうないと、後を見れば父親は内手代の源十郎に、帳を讀せて算盤のつぶく言やんな喧しい、先づ來て祝やと赤飯の怖い目付は我戀を、知てさうなと百千に、碎き破たる胸算は、フシいかな算者も及ばじな、地かゝる處へ清十郎勘十郎同道してぞ戻りける、九左衛門悦び、ヤア好い處へ戻つたは、今日はお夏が嫁入蚊帳

●不務居

落着せむ。

の祝ひ、此拍子ならば大阪の仕合もよかるといへば、清十郎庭に立ながら、旦那の病になされた、中國北國残らず賣て爲換手形濟ました。利合は高で貳拾四五貫目と目を合する二人が中、無事な顔見て嬉いと、フン心に心を言はせたり、地九左衛門上機嫌、お手柄くお夏が嫁入は只出来た、扱なんと勘十郎、蒔繪道具も出来つらん、跡から来るか如何ぞ、といへば、お道具も出来致し代銀残らず渡し、職人の手前は濟ながら、不落居な事にて、道具を留められ下りませぬと、言も果ぬに九左衛門立腹し、それは如何じや、餘る程銀は遣る、但馬屋九左衛門が娘の嫁入道具止められう覺えは無い、惣じて此祝言お夏が氣色に日限延び、やうや

●不務居
あて、すり、又はい
やみないふ。

う此度協まで詰め今日明日となつて、道具が出来ぬ何んのとて、此嫁入が延さりよか、世間からは道具渡さぬと評判せん、地それに浮く銀渡し、素手で戻るといふ様な、子供遣たも同然と、算盤の割れる程、疊を叩いて叱りける、地勘十郎迷惑さうに、御立腹御尤拙者も脱りは致しませぬ證文をお目につけ、密かな處でお物語致し度い事ござるといへば、チ、いひわけあらばサア聞かう、源十郎も来て聞け勘十郎此方へ来いと、打連れ裏の小座敷へ、チ、苦い顔して入にけり、地清十郎奥を見て、ハア、餘所には嫁入があるさうな、こちや洗足でも致しませう、やあるいと沓脱に、腰を懸ればお夏つかく走出て、地又ねすりことばつかり、

●是に懲りよとうさい坊 古語にて是にこりよとんさい坊といふ
 ●一里塚 天正年中織田信長路程三十六町毎に一里塚を築き、其の上には榎の木を植るに始る。徳川時代には到り街道の諸所に之を設く。富士山と一里塚これし約合のわるき比喩。
 ●口舌 口舌は女郎と客とが、互に心に一物ありて懸隔をいひわけをなす。

地同なじ口で可愛やといふ事がならぬか、意地の悪いと抱付き、フシ戀には涙脆いぞや、清十郎は懐中手、ア、思へば阿呆な者、身の正直な勝手して人の詞をまん誠に、世間の奉公する者は態々隙を貰ふては、春は親に逢に行く此清十郎は親里の近所に、十日二十日逗留しても、親の所に嫁許の女房分があるゆるに、これに逢ふと思はれては心中が立たぬと思ひ、親へ便もせず、主の娘と念頃など駿河の富士と一里塚、及ばぬ事をエ、阿呆など、舌打してぞ頭掉る、お夏涙を押し拭ひ、其方と我が身は實事にて、口舌などする挨拶か此度の祝言を、好きこのんだる事でもなし、知ての通

●室の女郎 播州室の津は有名な傾城町なり。お夏の母はここの女郎なりしと。

り母様は室の女郎、今の内の母様に、あの弟が出来るまでは、我も室で育ちしゆゑ、母方が悪いの傾城の風があるのとて、何處の嫁にも嫌はるゝ、これぞ好い事幸ひと、なほ女郎の風を似せ、人は隠せど我は只母様は傾城と、一季半季の者にまで、觸れ廻りたる村時雨、縁には付じと願ひしに、あの立野の阿呆顔、敷銀に目が暮て、嫁に取らうと嫌らしい、此お夏はつかりは言ふた事を違へるか、恨みも辛みも後を見て言ふたが好い、惚じて和方もこんな時、どうなされかうなされの主あしらひが聞えぬ、地私から詞を直しませう、なふこちの人こち向んせと、袖口から手を入れて、ほとく叩いて抱しむる、清十郎四邊を見廻

し、コレお前に聞えぬ事がある、此袖下は何事を、若衆の前髪女の脇詰、男が知らいで立つものか、出来ぬ仕方といひければ、なふそこらを忘れるお夏でなし、ま一度振袖見せ度さに、皆くお針が縫ふたれど、祝ふて我も縫んとて片袖ばかり縫ふ顔して、地是が嘘かと帯解て、上着を脱げば右左、振と詰との片ちぐに、かたえは蕾片枝は、開き初めたる花衣、二人前見る誰も皆、フン斯ぞ仕立て着せまほし、地清十郎は身を擲ち手を合せ、涙が翻れて忝し、それほどに此男を不便に思召さるゝかや、冥加に盡ん勿體なやと取付き、フン拜めば手に縋り、女房を拜む事かいの、是程思ひ合ふた中、何故に女夫になられぬと、辛氣泣にぞ泣居たる、

●片ちぐ ちぐはぐといふに同じ。
物の彼此不揃ないふ。

ヤア申しお夏様、日外やお前に借ました七十兩の小判の事、私が遣ふ金にてなし朋輩の勘十郎、私商ひに損をして平に頼むと申したゆゑ、地取替えやらんと存ぜしが、思ひも寄らぬ仕合して、損を埋しと途次の咄、もう入らぬ金子なれば、戻しませうといひければ、ア、よいはいの、祖母様の譲の金、如何しても大事な、人の来ぬ間に彼の蚊帳の、開眼をせまいかと怖く頭ふ春風も、人目を忍ぶ緞子の蚊帳、蚊帳はお夏に縁深く、神の結ぶの釣手かと、戯れかはす手枕も、サクリ心へせはしき契りなり、地内手代の源十郎、お夏様、旦那の呼つしやると出けるが、はつと廣げし手も打れず、呆れて立てば清十郎、お夏が褌を引被く、お夏騒がす

●商の冥利 誓ひの詞。商人なればしつゝいふ。武士の誓言には弓矢八幡などいふが如し。

●寄親 「養親業」寄は寄偶の謂、親は親方の如し云々。奉公人の身元引受人なり。されば置人受宿のとな寄子屋といふ所あり。

袖にて隠すこれ源十郎、其方も男じや引せはせぬ、忍んで逢ふは清十郎見遁しにして給らぬか、沙汰をするならするといや、幸ひ刃物も此處にある、地直に二人が死ぬるまでサア助けてたもるか殺しやるか、屹度した誓文で承らうと弱身を見せず、責付られて源十郎、沙汰して私徳もなし、商ひ冥利穩密なり、偽りならば各より私が多づ先に、清十郎が脇指にて留めを刺るゝ法もあれと、地言捨歸る其舌も引入れず寄親の、勘十郎に打明て、フンズと語りし不實さよ、地二人は五體に冷汗の、露の命も消ゆるばかり、居直つて溜息をつきも敢ぬに親手代ばらくと走り出、お夏が小腕引出し、清十郎も這出れば、其儘居れ身動きせば、男共打

●空言に云々 傾城に誠なしといふ謬ればなり。
●たまひ 貞實の意。
●かうたう 人柄のよきこと。

のめらせと取廻せば、蚊帳の内にもすごとくと晝の螢の影消えて、籠に窺るゝ其風情、外にお夏は夏の蟬、聲の限りを泣盡し、フン思ひを比ぶるばかりなり、地親は腹立ち涙にて、調やれ女郎奴、おのれが母は流れの者空言に身はまぶれても、心のたまかさこうたうさ、千人にも稀なりしぞ、何時慣ふて其いたづら、遊女の腹とて何方へも、嫁に嫌ふは聞つらん、其袖下は何事ぞ、左様な事をせんよりも、己れが額に傾城の娘と、何故看板は打をらぬと齒切をしてぞ泣けるが、やい丁稚奴不義一通りは許しもあり、十一の年から子同然に育てし奴、事によらばお夏奴と一つにせまい物でもなし、在所の親めと言合せ、嫁入道具に邪魔を入れ、親方に

(448)

耻かゝせ但馬屋の家を覆さうと企んだな、地口の明れぬ事見せんと證文出しこれ見たか、おのれが請狀にある親めが印判、妹とやら嫁とやらが文とも合せて吟味した、芥子程も違ひなし覺があらうあらがふな、主の寝首を搔かんも知らず、エ、憎やと蚊帳越に、額を三つ四つくらはせて、フン涙を翻し怒りける、地清十郎はつと驚き、親の印判妹の手跡とはいひながら、親にさへ逢はぬ身が夢程も覺えなし、在所の親を召寄せて吟味もなされず、片手打のなされ様、地勘十郎め如何に居る、言はせねば堪忍せぬと紋帳より出るを捕て押へ、詞ヤレ勘十郎源十郎は、此九左衛門が兩の眼の代りをする其手代が穿鑿して一札取たに胡亂があるか、

(449)

●はいで 道出なるべし。始めて田舎より來りし時着用したる布子なり。

●無得心 無道心の詠りなりと。

暇をくれた出て失せふ、こりや女子共男共、地彼奴がはいでに着て失た布子があらう尋出し、引剝て着せ換え追出せとぞ喚きける、地お夏は斯る有様を目も當りれず涙にくれ、言はゞ我身も遁れぬ科、餘りといへば親ながら、無得心なるお心や人の譏りを思召し、少しは宥免あれかしと、フン聲を揚てぞ泣居たる、詞チ、慘いも辛いも知たれども、をのれが母の遺言に傾城の娘とて、侮られうかあさましや、未來の障りはこれのみと返すくも歎きしに、氣遣ひするなよい婿取て、名を揚させうと請合しを嬉しさうに打笑ひ、地それで成佛くとして死んだ容顔忘れかね、千兩附ける嫁入を止め、大事の娘を教唆し、惑者になしたる恨み、但馬屋

●奪衣婆 衣類を引出し苛責する故、三途川の娘が亡者に對して、衣を奪ふが如しと。

の九左衛門は、胴慾者慘い者といはれねば、亡人の位牌に對ふて言譯ない、胴慾者には誰がなせしと、わつとばかりに堪え兼ね、咽せ返りてぞ歎かるよ、地其間に下部共、衣裳を剝て振袖の、汚れし綿衣に着せ換ゆれば、さしも美形の清十郎、山田の案山子とうぞ顛ひ、二目とは見られぬ容貌、お夏は我も一所にと飛付くを下女侍女、引分け宥め教訓し、フシ常の部屋にぞ伴ひける、地父は彌々腹を立て、勘十郎は何處にある、何に恐れて引込むぞ清十郎奴が入物吟味し、衣類諸道具押へ置、追出せく、フシと吩咐、奥に入れば、地心得ましたと勘十郎、半櫃箆筒鼻出させ、ぐはらりくと打明て、衣類引出し取散らすは、三途川の奪衣婆の、

フシ苛責も斯やと哀れなり、地錠前を叩き破り提物差換取出せば、包みの小判七十兩これは扱、此金子はお夏様へ祖母御よりの譲りの金、身が包ませて覚えある極つた大盗人、首のあるは旦那の慈悲、叩き出して追拂へと手足を取て引出す、調清十郎大聲上げ、ヤイ勘十郎盗人する男でなし、おのれが私商ひに赤穂鹽買ふて損をして、首縊らねばならぬ首尾、どうぞと談合したるゆゑ、お夏様へ申して己れに貸す爲預つた、戀する者の因果で朋輩の機嫌取、追従したが身の仇となつたるか口惜や、調をのれが損は入れ合せ、今は銀も要らぬといふ、察するに此度の嫁入道具の代銀を、遣らずに己れが引込んで、我親かたつて一札させ、人を損

●相讀

相手のと。

●温燗

温燗會のとにて二月十五日なり。

ふ工面とは鏡にかけて知たれども、相讀なければ是非もなし、是を見よ清十郎は破れ布子一枚で、地非人の體にはなつたれども、心の内は紗綾縮緬、錦より潔いエ、辛いぞやれ恨めしい、と齒がみをなして泣きけるが、地旦那にさらく恨みはなし、十一歳の彌生の花いろはともちりぬるとも、知らぬ者の是程まで、算勘商賣讀書の、硯の海より山よりも地優つたる御高恩、拳一つあたられぬ身が、如何なる月日か今日の今日主從の縁切るよ、如何なる神の咎めぞや、今一度旦那の顔拜まんと駈入るを、地情なくも男共手取足取大道へ追出し、門口はたと鎖しけるは、詮方もなき 三重 次第なり、フシなだ如月の 地臙夜や涅槃の雪の名残の門、

●香寫山 四教寺と號す、播磨國飾磨郡にあり。一條帝の水延二年に住空上人山を開く。水野は丈八の如意輪觀音にして西國三十三所第廿七番の札所。

●手鍋 下婢も使はず、自ら煮炊きの勞に服するをいふ。

立留りつ立去りつ、フシ凍え狼狽へ竹立めり、地無慘やお夏は魂も、布子の袖に入るばかり、身は脱売の力も切れ、もしやと部屋を忍び出て、門の戸明て密と出、四邊を見れば人影のお夏様か此處にかと、いふより先に抱き合ひ、聲を立てじと諸共に、肩の縫目に喰付て、フシ忍び音に泣くばかりなり、地今の間の物思ひ、ま一度逢せ下されと、いくら願を掛たやら、清十郎の清の字なれば、先此處の清水様京の清水室の明神、書寫山伊勢の御神様住吉様金比羅様不動愛染大師様、拜み頼みし験しにて、顔を見て有難や、サア二人連にて立逃て、いかなる遠國小借屋でも、二人遣ふを一人遣ひ、一人遣ふを手鍋でも暮されまいものでもなし、い

ざ立退かんとありければ、詞いやそれでは情の親方の憎しみも増るべし、在所へ歸り親共と勘十郎奴が善悪糺し、身の垢脱て詫言せば御機嫌も直るべし、それまで辛抱遊せと泣くく、宥め慰むれば、戀し床しは身の氣隨、男の爲には憂苦勞、厭はずながら只一人、突放して遣れうか、詞これ此小袖と脱換て、其布子を逢ふまでの形身に着んと、地涙ながら、互に帯解き身を合せ片袖づゝを脱換はす、肌睦まじき心ざし、ナクリ戀路一ならずは何故に、フシ生れて知らぬ木綿物、服紗の衣と引締て、顔と顔を見合せて、わつと泣入る心底に、フシ萬の涙籠るべし、地物にて顔を押し包み、さらばやといふ處へ侍女下女共、お夏様がござらぬ裏よ井戸よ

とひそめきしが、門口明てこりや此處にじや、詞ア、申しお夏様、お前は悪い合點な何方の爲にもならぬ事、地先づ御入と衣裳をしるしに、清十郎を取巻き、フシ連て内に入りけるに、地お夏續いて入らんとすこれ清十郎殿、詞お夏様がいとしくば先づ往んだがよいはいの、男の様にもない人じやと、地恥しめ突出し押出し、大戸をはたと鎖ければ、清十郎は詮方なく部屋へ入る體にして、大釜明て身を縮め、そろりくと忍び入り、中より蓋をぞしめにける、お夏は門に撞れて入るべき便を待つ處に、詞水使の玉はそろくと、地門口明てなふ清十郎様清様、とお夏が袖を慥と取り、詞ア、此方は戀知らず、私が此方に絆されて、お主様を袖にな

上方詞に餅のとなあしといふ。

し、朝晩に心を付けしんぞ思ひを盡せども、お夏様に
心中立て、一度も靡いて下されぬ、恨みの焰火吹竹、
七や十四五すつとんとんと打度いが、ア、いとしいが
因果の種、人は落日の心ざし、詞コレ此あもは正月の、
在所へ遣ふと思へども、君に何が惜からん、恥しなが
ら此玉を喰ふと思ふて、賞翫して下さんせと、地懷中
に押入るゝ、お夏は色を知らせじと、じつと抱付締め
ければ、ヲ、慄とするほどお嬉しい、怨みの雲も晴渡
り、これで千倍く、とても事に盃せう、酒取て來
ましよと、入る跡に、引續いて突と入り、部屋に駈込
み夜着引被ぎ、フッ身を顛はしてぞ臥居たる、地清十郎
は斯とも知らず、お夏は外に如何ぞと、釜の蓋明け見

廻せば奥には人も寝入花、勘十郎は親方と寝酒の相伴
ひよる酔ひて、夜着蒲團引出し、フッ常の所に臥にけり、
地跡より又源十郎、これも微酔ひ來りしが、勘十郎
もう寝たか、少し談合ある目を覺せと、頬杖してぞ寝
轉びける、いや寝入はせぬサア話せと、夜着の内より
烟草盆、寝ながら行燈行寄て顔を竝へて語りける、源
十郎小聲になり、其方が頼ふだ鹽商ひの損銀、彼の金
子で濟して、請取手形も餘り金も一所に上した届いた
かといへば、ヲ、過分く慥に届き請取だが、其状も
請取も大事にかけ笠の頂に入れ置、其笠を道頓堀の群
集に、芝居の木戸に預けて、餘所の笠と變つて、地詮
議しても知れなんだそれは失せても大事ない、お蔭で

(458)

●おぞい
おぞい

萬事忝けないといへば、源十郎一段くそれに付き、清十郎奴が諸道具七十兩の小判まで、旦那が身共に預けられた、お夏女郎と清十郎が盗出した分にして、してやる様な工面がなと、分別すれど能はぬ智恵、其方が今度のおぞい仕様魔法でも適ふまい、どうぞ思案はあるまいかといへば、勘十郎首肯で、間入道具の代銀を此方へ遣ふて損を埋め、まんまと間には合せしが、一度は大坂へ上す銀、あれをと胸に當て居る、工面を聞くと叫び合せて吸付る、烟管の先にて行燈は、フン消て聞とぞなりにける、地清十郎は幸ひと釜の内より這ひ出る、酒に酔たる源十郎、チクリとろくく寝入る體なれば、勘十郎揺り起し、鼻に手を當て仕済したり、七

(459)

十兩を盗み取り預り手の此奴に負せんものと分別し、そつと起出源十郎を我寢處に押遣て、夜着打被せさし足し、奥の納戸に入りにつけり、地清十郎はそれとも知らず、さては彼奴等は寢入しな、エ、憎さも憎し、とても斯なる憂身なり、身代の敵此首尾に助けておめおめと戻られず、勘十郎奴を刺殺し、有甲斐もなき我命しぞこなふたら浮世は闇、前後見えぬ出来心、内の勝手は覺えの庖丁、心の錆も荒砥の研立、尋ね寄れば高軒、前後も知らず不思議の本望、夜着引退けて咽笛をぐつと剋れば源十郎、呟といふを引起し肝先を一刀、又刺通して息を留め、耳に口を差寄て、調こりや勘十郎まだ魂はよも去るまじい能く聞け、朋輩に科を被せ

●大ら骨願といふに同じ。えらは魚の願なれば、これを轉用したるなり。

身の爲にせし報ひの劔、名乗合ふて殺さぬは、近頃殘念至極ながら、地譏詠したる此えら骨願かけて斬下げ、此胸から企んだかと鳩尾前を背中まで、思ふ様に留めを刺し、死骸を夜着に押込み、立上れば血落て滑つてのつけにどうと臥す、はつと起て蒲團にて、足摺拭ひ静くと、身仕舞して立たる處に、奥よりお夏は手燭の影、表へ出るをこれくく、ム、其處にかと走り寄り、血に滑つてア、怖、と聲を立てるを押鎮め、様子を囁き此上は一所に退かんといふ處へ行燈提て勘十郎納戸の方より來る體、南無三寶人違ひ、假しこれもうぬが身の、火を吹消して車戸を、押明け飛んで出にけり、遅れてお夏は詮方なく、蚊帳打あげ身を潜め、フッ

生たる心地はなかりけり、此音に勘十郎走寄て手燭を上げ、夜着引捲て、調ヤア源十郎が斬れたはと、地呼はる聲に下手人、男女残らず起合せ、疑ひもなき清十郎、門の戸明たは落つらん、引入れあるか吟味せよと、フッ上を下へと返せしが、調なふお夏様がござらぬは、ヤア是ぞ曲者探して見よと、地二階内藏様の下、湯殿まで探せども、蚊帳の内は氣も付ず、表の口に錠下し裏を探さん尤もと提灯燈して駈惑ふ、お夏は我身の恐ろしさ、清十郎が氣遣ひさ、氣も逆立て散亂し、南無天照太神様、觀音様氏神様死ぬとも二人一所にと、胸を騒がす折からに、勘十郎が聲として、調蚊帳の内を見なんだ探して見よといふ聲す、地南無三寶と飛んで

出表には錠下りたり、裏には大勢充滿たり、跡へも先へも因果の網の、かゝる憂身は佛神の、直なる法も横町の、相の細路次蹴破ればさつと開くも戀路の念力、かけし願ひの神力の、神變奇特毒蛇の口遁れ出たる如くにて、落んと契り西の辻東の辻になふ我つまくと、聲を限りに往還り、偕は俘となりけるかと、ハヤ狂亂と鳴る鐘の響の末にあれお夏くと呼ぶはいの、おふく其處にか何處にぞ、いやくいや待て暫し、あれは我屋に父の聲、我を尋ねて我を呼ぶ、親も床しやつまも戀しや、父は子を呼ぶ夜の鶴、我は妻呼ぶ野邊の雉子、追蒐行かん、夜は何時ぞ、鐘はいくつ、八つか七つか曉風の、辻行燈を吹消して、道も心も 地眞暗

●夜の鶴 燒野の雉子夜の鶴子に迷はぬはなしといふ跡あり。
●夜は何時ぞ云々 *

●卵を渡る危さ 累卵の古語に取
りしものなるべし。
●夜さ來い云々 當時の流行小唄「重井筒」にも此の唄を引けり。
●観ずれば夢の世や……心といめぬ假枕 こゝまでが歌念佛の唱歌なり。
●びんざら 數十枚の小板を合せ、其の一端を糸にて綴り、板と板と相撃ちて鳴らすものにして、古くは田楽などに合せ、後々は祝詞歌念佛等にも用ひたり。
●熊野の修行者 歌比丘尼のとないふ。これは熊野権現の事聞れな

くらく、くるくくく、狂ひ亂れ泣亂れ、亂れて唄ふ雞の、卵を渡る危さの、狂女となるこそ 三疊 哀れなれ

お夏笠物狂 下之卷

歌 夜さ來いといふ字を金紗で縫せ、裾に清十郎と寝たところ、裾に清十郎と寝たところ、観ずれば夢の世や、寢て温めし懷子、何時の間にかは浮れ初、三界を只家として、袖笠雨の宿りにも、心とゞめぬ假枕、地流れにあらぬ河竹の、笹の小笹のびんざら、花の手おほひお手を引れた、是も熊野の修行かや、姉様のこれの勸進柄抄の、笑顔好しと

なし、又鳥王などを配るゝわれ
 ばなり。(歌比丘尼の條参照)
 ●勸進帳抄 これは願禮の御珠歌
 を歌ひて門附をなし、報謝を受く
 る時に錢米などを受くる柄抄なり
 ●歌念佛 既經節に似たるもの、
 寛永頃京都にて流行す、其太夫と



(載所葉圖蒙訓倫人) 佛念佛

しては日暮小太夫、日暮林清など
 最も名あり。「人倫訓蒙圖蒙」巻七
 「太念佛」といふは萬徳開演の佛説

て柳が招く、柳の髪を何故に、浮世恨みて尼が崎、尼
 が崎とは海近く、小チクリなぜに其方はしほが無い、節
 は哀れに身は伊達に、歌は念佛の歌比丘尼、向ひ

通るは清十郎じやないか、笠が能く
 似た、菅笠が能く似た笠が、笠がよ
 く似た菅笠が、笠を知るへの
 物狂ひ、地物に狂ふも我ばかりは
 鐘に待宵鳥には別れ、戀する人の夜
 なくを、氣違とてな笑ひ給ひそ、
 傳へ聞く、孔子は鯉魚に別れ、思
 ひの火をば胸に焚き、白居易は又我
 子を先立て、枕に残る、藥恨むは道理や、それは子



(載所葉圖蒙訓倫人) 尼比丘歌

なり、然るなそれに節をつけてう
 たふべきやうはなけれども、末世
 愚鈍の者を導き、せめて耳になり
 とふれさせべきとの権者の方便な
 らんそれを猶誤りていろくの唱
 歌を作り、是を鉦に合せてはやし
 淨瑠璃のせすといふ事なし。「咲
 分五人娼」往昔日暮小太夫が水調
 子の三味線に乗せ、歌念佛の林清
 が鉦に合せて附ける」

故の別れの涙、親より子より我身より、いとし殿御の
 いとしほや、それより便宜音信の、聲も聞ねば顔も見
 ず、我は秋鹿夫を戀、歌かいろと啼と知らせたや、な
 ふくあれなる御僧我殿御返してたへ、何國へ連れて行
 く事ぞ、男返してたへなふ、いや御僧とは空目かや、

熊野を信じて諸方に勧進しけるが
 いつしッ衣を略し齒をみかき頭を
 仔細に包みて小歌を便りに色を賣

七枚、起證誓紙の牛王のうらなく、灰に焼つゝ互ひに

我も焦るゝ丸太船、浮世渡る一節を、諸
 へや諸へ泡沫の、歌「小舟作りてお夏を
 乗せて、花の清十郎に櫓を押さしよる、
 地観音薩埵の誓には、枯たる木にも花が
 さ、笠に挿いたは椰の葉、腰に挿いたも
 椰の葉、一枝二枝、地三日に三枚七日に

るなり、功跡歴たるをば御寮と號し夫に山伏を持ち女童の弟子あまたとりて仕立るなり、都鄙にあり都は建仁寺町樂師の園子に侍る、皆これ末世の類なり。

●向ひ通るは清十郎じやないか
當時の流行唄。「好色五人女」にも出てたり。●傳へ開孔子は鯉魚に別れ 孔子一子を擧げて伯魚と號く、時に魯昭公鯉魚を賜はりしかば、孔子これを榮とし、其の子の名を鯉と命じ、伯魚を字とす。伯魚早生、孔子これを愛惜するを深ければなり。「日吉丸雜櫻」に久吉が五郎助に向ひ、「孔子も我子に後れては思の火を胸に焚くは此文句を取りしなり。白居易は唐代の詩人白樂天のとも。●枯たる木にも花がさ 枯木も親音の慈悲に逢へば花が咲くといふを、花がさにかけたるなり。●笠に挿いたは柳の葉、腰に挿いたは柳の葉 此はなげ節の本歌にて熊野の道者の歌ひしものなりと。「野傾友三味線」に曰く、「たつふりと面白事な歌ふて聞せ玉へと、いづれも訴松顔になつて怒めば、こゝを通る熊野道者手に持たも柳の葉笠にさいたり柳の葉といふ歌を、今の目から見れば、鼠のかぶるやうに痒かきならせば、さても此いくすじもある縁を一時に指はたし三本にて分ならし給ふは名譽なりと聲をそるへてほめたてける、これ近代なげぶしといふは、なきぶしの代りにて、龍の鳥かやうらめしやと、好色大監の作者がつくりかへたる讃歌の根元なり云々」。

飲んだる水も漏さぬ中々に、フシ引も合せぬ神心、熊野の神のお留守かや

地足柄箱根玉津島貴船三輪の明神も、神とも覺えぬ神ならば、尋ぬる人に逢せて見や、それく逢せず逢せぬは、皆偽りの御神と、譏つても祈つても、神の力もかなはぬかと、笠も搔も搔投捨、フシ狂ひ歎くぞ哀れな

●盤上 碁將碁雙六等の遊戯をいふ。
●打離し 太鼓鼓の類。
●疵なき玉の盃 「徒然草」に「色好まざらんをのこは玉の盃底なきが如し」。
●睡語は云々 これより説經が、

る、共に濡らせる尼衣、二人の比丘尼も涙を押へ、我も尋ぬる人ゆるに、假に扮せし修行の道思ひあたる事あらば、知らせ申さん國處、フシ有様語り給へとよ、嬉し人の問事や、國は播州姫路の者、尋ぬる夫の容姿、フシ姿は詞に語るとも、心は筆も及びなき、ばんじやりとしてきつとして、花橘の袖の香に、昔男の業平作り、黒い羽織が好きすき油、鬢付髪付眞黒々、黒目勝なる目の中に、鼻筋通つて櫻色、年頃は二十歳餘り丈高らす低からず、茶の湯盤上打離し、男の藝に一ツでも、疵なき玉の盃の、酒もよい酒假名文書手の萩の露、轉寝し夜の、睡語はおれと其女が中ならで、岸の濱松ねほれても、漏すまいぞや顯はすな、變るまじきと

扇の女
班女が故事。

末かけし、末の松山浦の波、地上越す人もなかり
 しに、友朋輩の猜みにて、犯さぬ罪の仇名を啣ち、世
 を憂きものに出給ふ、今は我名を包みても、何か其か
 ひなつ果る、扇の女の物狂ひ、其人の名は、フシ清十郎、
 地有し姿は變るとも、まだ佛は残るべし、教へてたへ
 の人々として、フシ伏沈みてぞ泣居たる、地二人の比丘尼
 縫付、さてこそは餘所ならぬ、一ツ流れの和泉の國其
 人の爲にこそ、我は妹、我は嫁、親の歎きを宥めかね、
 フシともに亂る、我身ぞや、狂女といふも何故ぞ、そ
 なたは妹脊の忍草、身ははらからを思ひ草、同じ由縁
 の草葉ぞと、手に手を取て泣叫ぶ、フシ物の哀れをとゞ
 めける、なふあさましや、今里人の語りしは、詞但馬

屋の清十郎は人を殺めし科によつて、方々へ追手かゝ
 り、長崎とやらんにて終に捕はれ囚人となり、彼の松
 蔭の竹垣にて七日曝し其後は、地但馬屋の門口に、獄
 門にかけらるゝと語りしゆゑ、せめて餘所目の暇乞に
 是迄は参りしが、御存じなきかいとほしや、なに我つ
 まは捕はれて、終に首を斬らるゝとや、それは誠か今
 迄は狂氣の中にも若もやと、頼む念力切れ果て、同じ
 刀に斬られんと、駈出るを二人の尼、歎きはかはらぬ
 我々なれど、最期に心亂れては、人の譏後世の爲、皆
 其人の仇ぞとて、ナクリ泣く、制し留むれば、フシハヤ
 先拂ひの警固の者、山賊夜盗の其如く、厳しく堅め引
 出す、生ての思ひ死する罪、元一筋の縛めの、繩目に

●上壇

首斬り臺。

五十年忌歌念佛

五〇

遭ひて清十郎、フシ引れ出るぞ無慘なる、地矢拂の内に
 土壇を構へ、高手を許し羽搔締、北向に引据ゆるは目
 も當られぬ風情なり、お夏は涙に目も明れず、聲も立
 ねど伸上り、なふ此處に居るこれこゝに顔を向て下さ
 れと、呼はる聲は往來の群集の歎き念佛に、地紛れ聞
 えぬ哀れやな、不便やな清十郎、顔も容も疲衰へ最期
 極る心にも、後生菩提も思はれず、お夏が歎き古郷の、
 親兄弟は如何ぞや、お夏に知らせ今一目、せめて面影
 ばかりでも姫路の方を見廻して、目と目をふつと見合
 せて、お夏はわつと泣出す、清十郎は聲立てず、膽よ
 り出る憂涙、刀の刃より先さきに、思ひに命絶えぬ可
 し、涙を中の架橋と、心通はす心の色、世に取沙汰の

●清十郎殺さばお夏も殺せし五人女に出たる唄なり。これ

五十年忌歌念佛

五二

諺や、歌、清十郎殺さばお夏も殺せ、生て思ひをさし
 よよりも、思ひを生て、生て思ひをさしよよりもエ、
 なまみだく南無阿彌陀、南無阿彌陀佛なまみだく、
 地南無阿彌陀佛と回向して、フシ皆く袖をぞ絞りける、
 地清十郎涙を押へ、何れも有難き御回向、千金萬金
 より、一遍の回向に優る寶なしと承る、最期の悦び何
 事か是に如ん、去ながら心にかゝるは此高札、主人の
 金七十兩、盗むとは身に取て覚えなし、相手勘十郎を
 斬殺さんと思ひしに、過つて人違ひ遁るゝも業悦びな
 らず、殺さるゝも業歎きにあらず、地某生年二十五歳
 十一歳の春より奉公し、主人のはご育み情にて商人の
 道一通り、藝能文字の本末まで人並になりたるも、皆

●非業 定命にあらして死する
ないふ。

●佛とも法とも 佛は南無阿彌陀
佛、法は南無妙法蓮華經のとも。
●高き山の頂き云々 及ばざる
の喩。木によりて魚を求るの類な
り。

●僻事 心得違ひといふくらゐの
意。

●此の世の羈絆 親于夫婦などの
縁に引かると。

これお主の御高恩、明暮主の教へに任せ、親に孝行主
に忠、調只正直を守つて一言も、偽りをいふまじと毎
朝天道氏神を祈りしかども、地若き者の悲しさは、只
今非業に死んとは思ひも寄らず、佛とも法とも一遍の
念佛申せし事もなく、今のくやしき詮方なく、調高き
山の巔にて、一杯の水をもとむるが如しとは、此身の
上に知られたり、地此群集の中にこそ、清十郎が一命
にかはらんと歎く人もあるべきぞ、必ずく僻事なり、
存命へて追善し、菩提を弔ふ善根こそ命を助け、不老
不死の薬を與ふるよりも嬉しきぞや、人々の回向を受
け、佛の御國に至らんと、思へばく此世の羈絆はふ
つとと思ひ切たぞや、ア、思ひ切ても切られぬは、い

●末期の水

●頓證菩提 機会を得て俄に佛道
に證得するないふ。

とし可愛の只一人、よしこれも夢の戯れ頓證菩提南無
阿彌陀佛と、潔くはいひけれども、お夏が歎き妹の、
變れる顔を尻目にかけて覺えずわつと泣出せば、お夏を
始め二人の尼、警固の上下縁もなき、貴賤群集に至る
まで、フン皆々袖をぞ絞りける、やゝあつて清十郎、如
何に警固の方々、調口涸きて苦しきに烟草一服所望し
たし、此群集の其中に、姫路の人もあるならば、地吸
付て給はれかし情のお主の御手より、末期の水と觀念
せん、如何あらんと言ひければ、調苦しからじそれ
くと烟草烟草を出しける、地お夏悦びなふ我こそ姫
路の者、一樹の蔭も他生の縁況して一ツ國なれば、未
來も一ツに生るゝ爲約束の烟りぞと、餘所ながら暇乞

●十惡五逆 殺生、偷盜、邪淫、妄語、兩舌、惡口、綺語、貪欲、瞋恚、邪見これ十惡といふ。五逆は害母、害父、害師、破僧、出佛身血の五罪をいふ。
●充滿吾願如清涼池 後世樂、涅槃樂等の願を充して心のすがたしたるをいふ。
●四惡種 六道中より人間、天上の二道を除きたるもの。
●沙羅林 釋迦佛の入滅し玉ひし沙羅双樹の林をいふ。
●梅檀 佛成に、夏時涼しく、冬時暖かなる香樹なり。之を香に作り檀香といふ。「法華經」にも「即以是此岸梅檀香、積供養佛身」とあり。

ひ、烟草吸付垣越しに、警固の者取次て清十郎にぞ渡しける、夫婦は物も言たげに、顔振上しが咽返る、涙を中の關の戸にて、とかうの詞も出ばこそ、泣より外の事はなし、地やうく、涙を押留め、人も多きに御身の手より、末期の一ふくを受る事の有難さよ本望さよ、此烟草にて十惡五逆の睡を覺し、充滿吾願如清涼池と嘯きて、地獄餓鬼畜生修羅此四惡種の苦患を解脱し、吹出す烟は沙羅林梅檀の霞と變じ、三寶供養の焼香となつて、三十三天に薰じ渡らば日月は、兩の眼に入代り給ひ、梵釋二天に手を引れ奉り、佛の御前に此度は、立別るゝとも藻汐焼く、烟は同じ鷲の山、りやうぜん浄土で待へきぞや、南無阿彌陀佛といふより早く、烟

●三十三天 帝釋天、東方白銀峰八天、南方琉璃峰八天、西方頗伽迦峰八天、北方黄金峰八天、これを切利三十三天といふ。
●梵釋二天 梵天と帝釋天なり。
●鷲の山 釋迦山又靈山ともいふ。佛此の山にて八ヶ年を説し法華經を説けりといふ。
●りやうぜん 靈山の。

管押取雁首まで、咽の内へ押込んで、フシ眞逆様にぞ伏たりける、地警固の上下ふためきそれ殺すなと引起せば、色もかはつて目眩めき、血は紅の瀧津瀬と、口に流るゝ風情を見て口惜や後れたり、我こそ清十郎が二世の妻但馬屋のお夏、人々の情には同じ土に埋みてたべ、南無大悲觀世音助け給へと、立たる拔身の鎗押取咽笛ぐつと突通す、二人の比丘尼抱付、なふ皆様頼みますと、泣けど叫べど囚人の、自害に各々仰天して、勞る人もなかりしは、フシ是非にかなはぬ次第なり、城下に斯と注進す代官所の役人、馬を飛ばして駈來り矢拂の内に飛で入り、大聲上てヤア早まつたり清十郎、汝朋輩の源十郎を、人違にてあやめし段は、白狀

紛れなしといへども、盗人の科未だ分明ならぬゆゑ、
 曝し者となして成敗の日を延し、盗人の本人あらはれ
 なば、汝が命を助けんとの評議なりしに、地近頃残念
 千萬なり、只今但馬屋一家を召寄する、事の詮議済む
 までの命を生んと思はぬか、狼狽者と力を付け、二人
 が口に氣付を入れ、さまざま看病なし給へば、お夏は
 少し息出る、清十郎は心配の臟腑を破りし長烟管、フシ
 頼む方なく見えにける、詞程なく但馬屋九左衛門手代
 勘十郎、一家残らずお召によつて参つたりとぞ訴ふる
地斯る處へ老たる百性あはたゞしく狼狽來て、一目見
 るより南無三寶しなしたり、地待てむざくと一人は
 殺さぬ、敵を取てとらせうと、せきくる涙を押拭ひ謹

んで、詞我らは清十郎の親和泉の國水間の佐治右衛門、
 年寄ながら面目なや、其勘十郎めに瞞され、お主を大
 事子が可愛さ、よしない手形なんぼう後悔仕る、それ
 につき其時分、娘子供が道頓堀にて取違へ歸りたる、
 笠を此頃取出せば、頂の下に此文あり、地御詮議なさ
 れ清十郎が科を輕め下されと、涙を流して訴訟する、
 それく是へと取上て披見ある、詞幸便に任て一筆啓
 上せしめ候、此度お夏様嫁入道具の代金百四拾兩の内
 百二十一兩、こゝもとにて鹽問屋へ相渡し、貴様の損
 金残らず相濟し、則ち請取手形殘金十九兩上し申し候、
 追付御下り待入候、但馬屋勘十郎殿參る同く源十郎、
 何と此手蹟相違なきやと仰せける、九左衛門一見して、

●熊坂長範 石川五右衛門いづれも盗賊の巨魁。

相果し源十郎が筆判形ともに疑ひなし、サア返答あるか勘十郎、御前にて申せくと責つければ、勘十郎少しも怯まず、尤我ら私商ひ損金の立用に、道具の代金暫く取換置たれども、追付右の金は才覺して、道具屋へ濟し置く、商賣の慣ひ、廻り金の無き時は、氣轉を利せ表裏をつかひ、主人の金を手前へ加へ、自分の銀を主の銀に廻し、間に合するは世間共に手代のならひ、我等ばかりに限るでなし、彼の清十郎は朋輩を斬殺し、金七十兩盗取る是も手代のならひか、地エ、残り多いまそつと早ふ生れたら、熊坂長範か石川五右衛門が手代にせば、よい給分を取らうものをと、憎體にこそ申しけれ、地今を最期の清十郎、眼をくわつと見開き

●えらひ過ぎる

口が過ぎるぞ。

やい／＼勘十郎、廣い世界を己が口から、世間手代のならひとは、えらが過て聞憎い、悪い事を習ひといはゞ、主殺し親殺し、屋やき強盜、世間の慣ひと許さうが、人を殺せば我身も死ぬる、此清十郎が七十兩や八十兩の金に替る命でなし、旦那の御恩お夏様の情に捨ふと思ふ身を、地おのれが口一ツにて勘當させた其恨み、おのれを只た一討に仕舞はふと思ふたに、仕損ふて口惜し、エ、／＼無念な口を利するなあ、ハツ／＼我らゆゑにお夏様の自害、御恩の旦那の憎しみも嗚や増らん情なや、此年までの御面倒、御恩を報ずる事もなく、御苦勞をかくる事、これぞ黄泉の障りとなる、これ親父様妹どもと地呼向け顔をじろくと、言度き

事のありさうに、目は働らけど息切れに、人脈絶ゆる
 兩眼より、涙ばかりを嘔乞ひ、親子他人の隔てなく、
 皆々哀れを催せり、地佐治右衛門涙を流し、申し殿様、
 地勘十郎がお主の銀を引負し、我らを瞞した慥な證據
 出るからは、七十兩も彼奴が盗みに極つた、地御詮議
 なされ清十郎を御助け下されと大聲上げてぞ申しけ
 る、詞代官職聞給ひ尤々、不便なれども清十郎は人を
 殺せし、白狀紛れなき上は、斷罪遁るゝ處なし、又勘
 十郎が七十兩、盗みしといふには證據なし、然れども
 勘十郎おのれ一旦主人の金子をわだがまり、清十郎親
 子に無實を言懸け、迷惑させし不届、元皆をのれが悪
 心より事起つてお夏も自害に及びたり、主殺しとも謂

●わだがまり
領などの意。

こは着服又は極

つ可し、屹度處刑に行ふべきが、手を出して人も殺さ
 ず、盗人に極まる證據なければ、慈悲を以て助け置く、
 命の代りに髪を剃し出家して、彼等が菩提を弔ふべき
 かと仰せける、ハア、有難しと勘十郎頭を地に付け三
 拜し、小刀抜いて髻よりふつゝと切て捨ければ、詞ヲ
 、神妙く、佛弟子となつたれば、例へ誠の科ありと
 も、彌々命は取難し、此上は汝が行末、彼が後生の爲
 ぞかし、和睦して恨みを晴させ往生させよとありけれ
 ば、勘十郎一念發起して、これ清十郎、今は我も懺悔
 せん、彼の七十兩の小判は、此勘十郎坊主が盗んで、
 源十郎めに塗らんと思ふ折節、斬られしを幸ひに、其
 方に負せたり、地恨みを晴れて成佛あれ跡弔はんとい

ふ處をさてこそ盗人顯はれたり、其奴縛れ承ると、踏
 付けく腕捻上げ、はや切繩にぞかけてける、直に國
 中引渡し、獄門に切かけよと、引立れば妄執は、晴れ
 つゝ清き清十郎、臨終顔も菩薩の敷、二十五歳の命は
 消えて、浮名は今に残りける、お夏も共に取付くを宥
 め伴ひ立歸り、其夏衣墨染に、年忌くの手向草、花
 の帽子に修行の笠、笠がよく似た阿彌陀笠、彌陀の御
 國に生れける

●阿彌陀笠 「俚言集覽」に曰く、
 「おみた笠は笠の名にはあらず、笠
 を仰いで後の方へ着たるが佛の後
 光めく故にいふなるべけれど……
 ……思ふに守武千旬に南無あみた笠
 きぬ人もなしといへる秀句ありし
 より出しなるべし。

おきさ 今宮心中

解題

寶永六丑年の秋、大阪本町二丁目菱屋四郎左衛門下女きさ及び子飼の手代二郎兵衛の二人、今宮戎の森にて心中せし事を近松新作し、翌寶永七寅年正月廿三月初日、竹本座にて『今宮心中』と外題し、前は『曾我虎が鷹』三段目までの切に出し、なり。門左衛門五十八歳の時の作なり。上の巻西横堀へ涼船にて別家由兵衛が、本家菱屋の内儀息子隠居等を招き饗應するに端を發く、大暑に涼船を出し大川に遊ぶことは大阪の風俗にして今も變ることなし。此の船中下女おきさの親三田村太郎三郎が、娘を在所へ縁付んとして暇を取りに来る。然るにお象はかねて二郎兵衛と懇ろし夫婦約束までしたればこれを拒むで従はず、別家の由兵衛はお象に心あり彼れを女房にせんとと思ひをれる所にて、お象の縁談を嫌ふは、我に意ありての事と自惚し、親父とお象との間に立ちて口を利き、隠居貞法尼へお象の縁談を任すと

の證文を親太郎三郎より取る。此間由兵衛のひとり合點の仕打滑稽を盡す。中の卷は菱屋の場にて、おきさ二郎兵衛此の證文を取らんとして、四郎左衛門の灸をすへる間に四郎左衛門が腰に下げたる鍵を窃み、戸棚を明けて手形を引き破る所へ、由兵衛來るゆゑ、二郎兵衛は戸棚の中へ身を隠す。象は手早く戸をしめしが、鍵の其所に落ちぬたるに氣付かず、由兵衛は目敏くこれを拾ひ、戸棚の錠を下しければ、二郎兵衛は袋の鼠となり、お象は其の前に立塞り、由兵衛を宥めんとす。由兵衛は此の時ぞとおきさを口説き、二郎兵衛を助けんとなれば、我意に従へよと脅迫す。おきさが肯せざるを怨み憤り、大聲あげて盗人呼ばりして一大事となる。されど主の情にて穩便に計らはんとし、戸棚は其の儘になしおき、象は一たん親元へ預け、由兵衛も飯らせ跡にて貞法戸棚を開け、二郎兵衛に向ひ、象ばかり女でなし思ひ切て、由兵衛に添はせなば浪風立す納る道理と懇々の意見を加へしかば、二郎兵衛はじめて夢の覺めたる如く、貞法の意に従ふこととなりしが、貞法が前の手形は後日の紐々を慮りて既に破りたることを聞き、然らば今破りし手形は何なるぞと接合せて見れば、彼の手形にはあらで主家に取りて大事の家質の證文なれば、喫驚し折角お象を

断念して事納まらんとしたれど、證文を破毀したる罪は遁れ難く接ぐにつかれぬ我命と觀念し、再びお象と出會して情死を遂ぐるに至る。筋はさまで込入りたるにあらざれど、其の結構頗る妙を極めたり。やがて二郎兵衛は家を忍び出で、表に窺ひぬたるお象と手に手を取り、今宮の森に到り、日野絹一反を松の木にかけ、二人並んで経死を遂ぐ、其の状さながら掛鯛に似たりとて掛鯛心中ともいひ、又其の松を爾來連理の松と呼べりしより、正徳二年四月豊竹座にて演じたる時は、『今宮心中丸腰連理松』と外題を改めたり。

二郎兵衛 今宮心中

近松門左衛門作

●月見花見はいつくも同じ。歌おんどの節にて詰り出す。歌謡伎の世話場にて、在郷歌にて暮を開ける格なり。

●舟遊の。大坂にては大層になれば大川に船を浮べて納涼するも今も變るゝなし。大坂名物として誇るべきものなり。

●瓜を二ツに云々。兄弟など頗りよく似たものを「瓜を二ツに割りたる如し」などいふ詞によりて、其の似たりといふ詞によりて、更に似たりや似たり燕子花といひ、其の花の色より紫帽子とつけ、紫耶帽子を利かせて役者評判の前撮としたるなり。

●紫帽子。「役者全書」下巻「歌舞伎にて用ゆ紫帽子はそのかみ鳥居庄七といふ女形はじむ、是びらりとさけてきせたる由、又天和の頃玉川子之丞と云女形黒きじゆしな上にて折込み左右へ下らぬやうにしたり。夫より加茂川のしほ兄弟兵衛と云もの工夫してやでん帽子とて四角なる箱の切れの角々におもりを付けて落ぬやうにしらへかぶりしとぞ、其後元祿の頃加茂川のしほ水木辰之助工夫して縮緬にて風流にしらへ色は紫に定めたりとあり。紫帽子は即ち加茂川のしほ、水木辰之助等の工夫せしものなふ。

●天満川。淀川筋天満橋下流の名。

●本町橋。東横堀本町通りに架する橋。

●瓜を二ツに云々。兄弟など頗りよく似たものを「瓜を二ツに割りたる如し」などいふ詞によりて、其の似たりといふ詞によりて、更に似たりや似たり燕子花といひ、其の花の色より紫帽子とつけ、紫耶帽子を利かせて役者評判の前撮としたるなり。

チンドゑい〜く〜ゑい〜く。月見花見は何所も同じ、諸國名所の其中々に、類ひ浪花の舟遊び老も若いも下人も主も、男女がござく船に、袂涼しき川風は、秋と云ひても嘘でないよの、じやれてないよの本町橋を、漕出で見れば天満川、市の側なる初甜瓜、買ふて冷してひいやりと、瓜を二ツに分割は、似たりや似たり燕子花、紫帽子河水に、映らふ影を水汲みか、汲て荷ふて持や桶の棒、坊主頭を振立て、道正坊の金柄

市の側。天神橋北詰上手より龍田町までの濱側を、天満市の側と稱して、こゝに寄物市場あれば、甜瓜のなふ。

●瓜を二ツに云々。兄弟など頗りよく似たものを「瓜を二ツに割りたる如し」などいふ詞によりて、其の似たりといふ詞によりて、更に似たりや似たり燕子花といひ、其の花の色より紫帽子とつけ、紫耶帽子を利かせて役者評判の前撮としたるなり。

●紫帽子。「役者全書」下巻「歌舞伎にて用ゆ紫帽子はそのかみ鳥居庄七といふ女形はじむ、是びらりとさけてきせたる由、又天和の頃玉川子之丞と云女形黒きじゆしな上にて折込み左右へ下らぬやうにしたり。夫より加茂川のしほ兄弟兵衛と云もの工夫してやでん帽子とて四角なる箱の切れの角々におもりを付けて落ぬやうにしらへかぶりしとぞ、其後元祿の頃加茂川のしほ水木辰之助工夫して縮緬にて風流にしらへ色は紫に定めたりとあり。紫帽子は即ち加茂川のしほ、水木辰之助等の工夫せしものなふ。

構、あれあれ撫て通れば一撫に、はや本復の伊丹酒、茶舟で下る樽肴、在所嫁御の里歸り、上荷で送る葬禮や、世の有様のさまぐを、一時に見る舟遊び、是常になきお肴と、一つ勸むる盃や、然れば船のせんの字を、君にすむと書きたり、船の屋形に三味彈ば、納屋に油の白を引、橋のいよ此橋のうへにて賣る聲は、煙管團扇煙草入、役者評判扇賣、浪花藝者の風俗を、橋々名所に擬へて、書集めたる藻鹽草、いせおの海士に有らねども、其はま萩野八重桐を、詞龜井橋じやとおしやる、心はの、先はおたびの神かけて、跡先に又續く者がないは扱、袖島源治は新靴じやとおしやる、それなげに、鹽物町のしたるたる、然も藝

●水汲み 昔は淀川の水を汲み、飲用水に供したり。

●道正坊の金柄抄 これは川の中に七五三繩を張り水垢離を取つてなる僧のなるべし。

●茶船に樽肴 大川の上を種々の船の通行する景色見る如し。茶船に樽肴を載せ里取りする花嫁あれは、上荷船にて葬禮を送るもあり。

●船の屋形に云々 屋形船に妓を乗せて三味引くもあれば、濱納屋に油の白を引く音もすと。

●橋のいよこの 「増補松の落葉」 「五尺手拭」の唄「はしなはいよこのつきよやれ、はしなつきよやれ船橋を、はしなはいよこの下には、橋の下にはうの鳥が」に取れり。

●役者評判 役者の評判は續賣の類にて、心中の繪草紙なども此の川筋にて賣ると「雁金文七」の淨瑠璃中にも見えたり。

●扇賣 これは古き風俗にて、「七十一番歌合」にも出てたり。「あふきは候、かな一ぼん扇にて候」とあり。「蜘蛛の糸巻」にも、江戸の扇賣の事を詳しく記したり。されど是等とは多少風俗異なる所あるべし。

●浪花藝者 歌舞伎役者でない。藻蘆草を採るには、藻蘆を掻き集めるより、物を齊き集めるの代名となる。

●其の演藝 「菟玖波集」に「物の名も所によりて變りけり、難波の音は伊勢の演藝」といふ連歌に取り、濱萩の萩を萩野にかけたるなり。

●萩野八重桐 正徳享保頃の女形の名。正徳四年「役者色紙圖」に位上上吉、其評の一節に「それゆゑ容顔色有り香もあり難波の梅、萩の好く風、當世若女の開山」とあり。

●龜井橋 は今大湊橋のある所、こゝに龜井橋あるのみにて、今の木津川橋なければ、跡先に續くものなしとなり。龜井橋を渡ればあびす島にて、こゝに天神のお旅所ありしなり。(今の川口居留地の南端)これら大坂地圖上の變遷、近松の作文と今日の状況とを参照すれば趣味深きものあり。

●袖島源治 女形の俳優。「二挺三味線」に「先以て色よく光りある御面體、御目に世界の戀をかめ見る人の心を薄し給ふ」とあり。「役者友吟味」には「したるいお

には骨が有るといひ、桂本常世は江の子島とよ、フンなせくゝゑのころころく、抱寄せて手飼に、フン愛らしや、地扱又嵐三十郎、鯉座橋とおしやる、心はの、何の料理に遣ふても仕出しが甘いは扱、櫻山庄左衛門福島じやとおしやる、心はの、小體なれども張詰て舞臺一はいかさも有り、藝に身も有る口中のしよりくしたる雀鮓、夫で蓼穂の何所やらが、フンひりよとするとぞ答へける、地音羽二郎三を雜魚場とは、鰭が有るとの譬かや、上村吉彌は伏見堀じやとおしやる、義理はの、舟板町の舟板の末には沖に乗出し、帆を充分の印とて今から人や焦るよと云ふと、扱市村玉柏梅田橋と見立たり、夫なせに、はて渡れば色町越れば火屋、濡

にも憂にもよふうつるは扱、調杉山平八を四ツ橋とは是どふじや、江戸からも京からも四方へ引つり引張た、地踏ばたがつて山村がくはつと擴げた兩足は、百間堀を思ひ出す、善悪二つを噛分けて、六義を正す柴崎に思案橋を思ひ出す、篠塚二郎左を見る時は大佛島を思ひ出す、地三代續く奴風、嵐が風を譬ふれば、其江戸堀を思ひ出す、嘉十郎が貌付に炭屋町を思ひ出す、敵は三原重太夫、序にて作りし悪心の、切で報ひのくるときは、猪喰屋橋思ひ出す、思ひ出し、陳ね行く先是迄が片おもて、裏の御堂もたかくと立賣堀を漕廻し、辨當濟は碗家具も、釜もちやくくあらや橋、跡へはんなり入花の茶びんご橋はこちくと、寄よく

濱際の瓦町橋にぞ着にける

●新釈 今の四區中通をいふ鹽魚干魚干錦間屋仲買町なり。新釈とは本朝(今の東區伏見町一丁目)と區別したるなり。即ち源治の目元の鹽の瀕るにたとへ、其の中にリツとした氣骨もありとの評。 ●桂木常世 女形にして中位の役者。桂木は葛城の假字。 ●江の子島 江戸堀西北橋の西より、立賣堀筋まで、東川筋四川筋の島にして、今大阪府大坂市廳のある所。其のころは、犬の子になぞらへたる意不明。 ●風三十郎 鹽屋九右衛門座の座本にして、立役なれど藝風軽く半道の評あり、多く端役を勤めしより、鹽屋橋に比し仕出しが甘い酒落たるなり。 ●鹽屋橋 長堀南五丁目に架する橋。新玉造橋と白髮橋との間なり。 ●鹽山庄左衛門 「役者三挺三味線」に、此人はたらきの藝よりは居狂言よし、是坂田流のいきかた、第一常世の男、傾城買中村七殿風に似たり、ゆれ事大きにうまし、實事さつぱりとしてよし云々。 ●福島 堂島より蜷川を北へ渡りたる所。上福島下福島あり。(曾根崎の西の端)以前は農家の分なりしが、元祿の川警備の後若干の人家出来、次第に開けて繁昌の地となりたりといふ。此の所に雀餅とて名物あり。江船の小さきを背割りにして潮に浸し、之を乾かし飯を入れて餅を作るに、魚の腹の腹れて形雀に似たり名付くと「攝陽群談」に見えたり。「兩家萬葉記」には、ちいさいいな骨わたを抜き、白き飯を詰めてふくらし、脊を折ておし曲げたる形の雀に似たり、雀餅といふとあり。 ●音羽三郎三郎、立役。「三挺三味線」に、實事はお家程ありてつぼりとしてよし、小兵なれども鬚有て藝に幅有り、當風實事司の名人」とあり。 ●雜魚場 江戸堀と京町堀に挟りたる西の濱側にして、こゝに魚市場あれば鱈があるなり。 ●上村吉綱 女形、年も若く觀の美しきを以て名あり。 ●伏見堀 京町堀の舊名。此の町筋船板を南の家敷軒ありしより、板屋町といひしなるべし。 ●市村玉柏 女形面てい美しく、器用肌の藝なりと評判にあり。 ●梅田橋 蜷川に架する橋。渡れば色町、堂島新地即ち蜷川をいふ。越れば火屋は梅田の墓所なれば濡にも憂にも利くと。 ●杉山平八 立役、實永の初八百屋お七の狂言に吉三郎、助六心中に助六に扮して高評を博し、今にも上々吉に昇進すべく思はれたりしが、正徳に入り藝風頓に衰へた等と。此の評は流行當時のこゝにいへるなり。 ●四ッ橋 長堀川と四橋堀と交叉する所に架する橋。四橋堀に上繋橋、下繋橋あり長堀に吉野屋橋、炭屋橋これを四ッ橋といふ。大阪名物の一なり。 ●山村 歌左衛門のとなるべし。始め京にて正木甚左衛門といへり元祿の末大阪に下り岩井座に住込み、山村歌左衛門と改む。實方の俳優。 ●百間堀 江の子島の東を流るゝ川。 ●柴崎林左衛門 實事に名あり。家老役など得意なり。 ●思案橋 東横堀大手通りに架する橋。よく考へて理非をたゞすに喩ふ。 ●篠原三郎左 篠原次郎左衛門の事なるべし。大阪の實業の名人。 ●大佛島 富島町のと。(安治川と古川との間にあり)。

●嵐 嵐三右衛門のと。三代徳川は、今三代目にして丹前六法を家の藝とすればなり。 ●江戸堀 京町堀と土佐堀との間にあり。嵐の奴風は江戸の風俗なればしがいふ。 ●五十郎 道外方大島落十郎。 ●炭屋町 炭屋橋より南、四橋堀の濱側をいふ。 ●三原重太夫 敵役。 ●猪喰屋橋 猪喰つた報ひといふ世話あれば、仇を報ずるにかけたるなり。此の橋は立賣堀南五丁目に架する橋。 ●立賣堀 猪喰つた報ひといふ世話あれば、仇を報ずるにかけたるなり。此の橋は備後橋 四橋堀の相生橋の古名にや。 ●瓦町橋 四橋堀今の新天満橋を瓦町橋といへり。菱屋の遊出船は、最初東横堀の本町橋を發して大川に出で、納涼しつゝ段々川を下りて四橋堀川に入り、瓦町橋にて船を繋ぎそれより飯宅せしなり。 ●如法 備後橋の行狀よきを如法といふより、轉じて俗の柔和なるを如法といふ(狸渡談)

地菱屋介五郎は如法なる氣も丸額にこやかに、調申し
 婆様母様、此永き日の馳走ぶり亭主由兵衛さぞ草臥
 地暮も近し是からお上りなされと有りければ、隠居の
 眞法七十三眼鏡いらす杖つかず、齒は一枚も抜目なき
 男勝りのかみ様にて、調ヲ、それく是由兵衛、念の
 入た馳走でいかい慰、此方の内から出た人が、店一軒
 の主に成り商賣もしにせて、親方一家を振舞とは此方
 とも會稽其身の手柄、さりながら女房が無れば、人の

●しにせ 爲似にて父祖の家業をよく守り繼ぐとなれども、こゝは商賣を段々に仕上げたるをいふ。

●かみ様おる様
こいは女主人二人あれば、祖母良法をかみ様、母をおる様と區別したり。

●笑壺
嬉しさの込み上るも。悦に入るなどいふに同じ。

●よんしやんく
由兵衛獨り嬉しがり、手など打ち上機嫌の様子。

世帯は落付ぬ、身代薬の女房を早ふ持て落つきや、左様でないかと有りければ、内儀も共に打笑ひ、何故に女房持やらぬ、地但何所ぞに思ひ入がな有るかいの、由兵衛思ふ圖に乗りて、詞誠に今日はお心よふお遊びなされし忝なさ、其上女房の事までお尋ね、御意の通り少思ひ入ござれども、地此女房がいきやすふていきにくい、どふでかみ様おる様の、お口を借ねば参らぬと、はてこちとが云ふて濟む事ならば肝入らひで何とせふ、其思ひ入の名は何と云ふ誰ぞいの、詞由兵衛殆ど笑壺に入り、ヤア有難い忝ない三度禮拜仕つる、名を申せばつい御存じされども、先唯今はお名をばえ申すまいよんしやんく、サア是からが本酒、亭主から

●ござ殿
女官人を船に乗せ餘興に淨るりでも語らせるなり。

●法隆寺
大和國平群郡法隆寺村二郎兵衛の在所なり。

●心中
心中淨るりを二郎兵衛が口頃好むと、例の場當りなり。

●祭文
これはおきさが好むとなり。いづれも心中する前兆とする。

●つがもない
譯もない。

又はじめ、憚りながら介様へ、お着にござ殿一節頼むと云ひければ、詞介五郎盃うけ申しかゝ様、地二郎兵衛が法隆寺より戻つたら伴て来て、彼れが好の心中を語らそもの、チ、さればいのせめてきさが居たらば、祭文を聞ふものと、云へば由兵衛興醒顔、詞ム、二郎兵衛は母親の年忌に當り、在所へ参ると申したが、きさも一所に二郎兵衛と連れだつて参つたか、ア、つがもない、きさは此頃風ひいて頭痛がするとして宿へ往たと、聞きもあへず由兵衛、地エ、内方もこちらが居た時分と違ひ、自墮落になつたなあ、青二才の二郎兵衛め丁稚上りの分として、母の年忌で候ふとして、此忙しい最中に、十里ちかひ法隆寺へうせさまが氣に入らぬ、

●一人腹 自分一人腹を立てやきしきするなふ。

●知盛が沈みし其の有様 謡曲「船辨慶」の文句に「沈みし其の有様に、舟のく、知盛が沈みし其の有様に、又義經をい海に沈んと……前後を蹴立て悪風を吹かけ……前後を忘するばかりなり」とあり。義經を出兵衛にかけ、山兵衛が船端を蹴立る状態を知盛の亡霊にたとへたるなり。

●百貫町 五町の堺筋西を百貫町といふ。今の五町二丁目なり。

殊にきさが煩ふて宿へ歸つた時分に、同じ様に家を出で祿な事は仕出すまいと、滅多無上に一人腹人も知らぬ心を苛ち、船辨慶に有らねども、知盛が沈みし其の有様に、又由兵衛がしんきをもやし、舟端蹴たて地益踏わり、フン前後を忘する計りなり、地菱屋一家の人々は何の心も付かざれば、はや日も暮れた最早是から歸らふと、上り支度を由兵衛危ないことは些とも無し、提灯用意致せしと取出せしが南無三寶、蠟燭を忘れは是久三、太儀ながら一走り此通りの百貫町、地四五丁往ばおきさの宿、定めて知て有ふぞ由兵衛が申す、蠟燭一挺貸したも、些と氣色が能ならば鳥渡爰迄出たもと云て同道しておじや、地序に内に氣を付て誰

もないか見廻しや、早ふく合點か心得ましたと帶もせず、縋絆一つの裸身や、フン百貫町へぞ走りける、地昨日今日前髪取つて下手代、未だ新物の二郎兵衛おきさと深き中入の、南京綿の上へには手のない様に仕立口、在所はいかな横堀の知邊の元に隠れ居て、暮れば其處へと通路の、仄に見ゆるあの舟の屋形には、貞法様おる様、舳には安堂寺町の由兵衛ヤア是ならぬ、外しませふありや何様じや、菱の提灯久三が持て、跡から來るはおきさじや、様子が無ふては叶はぬ筈と、氣ももやくつて蒸暑き、材木納屋に立隠れ、チクリ事の様をぞ窺ひける、フンきさは程なく地走り寄り、是は是は皆様今日はお慰みと、只今久三の物語私が氣色もし

●三田

攝州有馬郡にあり。

●手いたい

手殿しき。

かぐとは無けれ共、かみ様おる様へ頼み上ます御訴
 訟事、直に是へ参りしも、ア、おとましい事出来まし
 て一倍氣合に當りますと、フッ溜息吐て居たりけり、
 地貞法も熟見て、此方へ訴訟の事有とは何様した事ぞ、
 咄して見や成るべき事なら聞いてはと、さも懇切の詞
 の末、ア、お馴染とて忝なや、詞昨日の暮かた三田か
 ら私しが父親上られ、少さい時から在所で、約束しを
 いた男の姑の煩ひゆへ、急に嫁入を急いで來た、此度
 お暇申し請け、三田へつれて歸りて嫁入さすとの申分
 御存じの通り私は幼い時より大阪に育ち、手いたい
 とは仕付ず殊に病者な身を持って、在所の手業がなんと
 して、詞夫故當座の間に合に、内方のかみ様が御念頃

●きうこう

家に功勞のあると。

●つどく

に遊ばし、きうこうなした若い者共數多の中、ひとつ
 にして此大阪で物の美事に寝て遣ふ、必ず外へ約束
 すなと常々のお詞、是が反古に成るものか在所へと
 ては歸るまいと私は申します、夫では親の一分が立ぬ
 と、云ふての親子争論、地多分是へ見へませふ、私が
 口の合ふ様に、在所の嫁入をお止なされ下されと、
 フッつどく語る下心、地二郎兵衛は合點にてあの云
 分は我故、男に親を見返る心中者めと、材木に抱付
 フシぞくく悦び居たりける、地親はとぼく尋ねつ
 き、詞菱屋殿のお船は是か、きさが親三田の太郎三郎
 でござります、ヤア親仁殿か、それ酒進ぜ茶進ぜと、
 取々挨拶ありければ、いや茶もたべました、詞定めて

●なづけ 結なづけのとも。

●云ひじよ 云分といふに同じ。

●親のこうげん 親の威光といふに同じ。

●世帯佛法腹念佛 當時の世話なるべし。佛法より世帯念佛より腹のふくるゝが肝心。即ち口に食ふが「大事」となり。

きさめが咄でお聞きなされませふ、在所でなづけの方より、急々に欲いと申すにつき、中途ながら一生の身のかため、道理立てお暇取れと申せば、在所へは往くまい大阪で男を持つと申す、夫は我儘親の云ひじよを背くかと、叱つても聞き入れず、おれが男は内方のみ様次第に任せて有る是非とも親のこうげんに在所の男持てならば、己や死るが合點か、娘殺そと云ふ事かとお聲上げてほるゑする、お主のお慈悲に御意見を頼みます、在所の婿と申すも喰兼ね身代、地行きをれば彼奴が果報、世帯佛法はら念佛、口に喰ふが一大事彼奴が喰ふは違ふて、大阪の男に喰付たか、やい其處な虚氣者、在所の男じや大阪の男じやとて喰ふに二ツの

●しむない男 未詳。

味なし、地一人の娘に親の身でもむない男を喰そふか、エ、親の思ふ程にもないと、フツ涙を流し恨みける、地おきさも流石親心思ひやれども、二世かけて交せしとも捨られず、唯かみ様のお情を頼みますると計りにて同じく、泣いて居る姿、貞法も不憫さに親仁の云分理が聞へた、去ながらあのきさが病者で、在所方の荒働き一年と續くまい、身に藝もないと銀の湧く手を持つて居る、二百目近い給分を唯の女子にかこふか、廣い大阪に男養ふ商賣とはあれらが職、五人三人は針一本で、樂々と過す手を持ちながら、山家在所へ煩ひに往ふとは、無分別かと思はるゝ此談合は取おいて、きさは此貞法にとんと預けて置ても、此方の家にも子

●變がい

破談するまいふ。

●胃の腑に落ちぬ

合點のゆかり

飼の者賤る者がたんと有る、よい婿取つて後々は、親達も大阪へ呼ぶ様に仕て遣ふと、念の入たる割口説、由兵衛扱はあのきさを我等へ隠居の心當、日頃の念願成就と是親仁、調隠居様へ任せて在所は變がいたがよい、此由兵衛も旦那の蔭で、安堂寺町に手も擴ふ商内し、手代の一人も遣かふて今日の様な振舞に、二兩三兩遣ふも皆親方の光り、未だ女房を持ぬはかみ様へ、とんと任せて彼方の媒酌待て居る、かみ様のお心で此方と私が婿身になるまい物でもござらぬ、なふきささうじやないかと、云へどもきさは胸塞り、ア、何様やら知りませぬと、フシ打傾ぶきて居たりけり、地太郎三郎一々に聞届け、調きさめが申した分ではさら／＼胃

●手形

※

●ほつき 一念發起のほつきなり。但しこゝは親父が我を折つた。

の腑に落ませぬ、かみ様のお御意でほつき致した御尤もく、地親方の賤らるゝと申すに先は幸一門中、何の仔細も申すまい此上はきさめが縁附は、どうなりとも最ふお暇と、立んとすれば由兵衛分別顔にて、調是れ貞法様、是は大事の請取物おきさも若い人の事、後日のもやく／＼喧し／＼ちよつと親子に手形させ、きさが縁付貞法様のお指圖背くまい、外から一言邪魔させまいとの、地手形が、取たい物と差込ば、貞法打領き、是は由兵衛が云ふ通り手形を取つて置たい、調夫でも父様無筆なり明日でも私がかみ様へ、地手形して上げませふと、辭退する程由兵衛、いや／＼たとへ無筆でも判がなれば筆の軸、手形は我等筆取と煙草盆の硯引

●差別 証文の裏に、花押を書き
又は印判を押す。

出し、はや書つける提灯の蔭二郎兵衛見すまし聞すま
し、ヤア彼奴が勸めて手形させかみ様賺してきさを貰
ふ分別、此判させては一大事何とせふぞ石を打て、提
灯を打消してのけん、石を尋ぬる其間に手形の文言
思ふ通りに書濟し、問是宛名は菱屋四郎右衛門様貞法
様、親三田村太郎三郎 問サア印判と云ひければ御念が
入つて忝ない、私の荷が下りましたと、巾着の印判く
ろぐくと、問サアおきさ我身も判をすや、いや私は印
判持ちませぬ、そんなら父が裏判をと、同じくすへて
貞法様、いよく頼み上ますと差出せばチ、く、是
では此方も如才がならぬと、珠數袋に納むる内二郎兵
衛溝の石をあげ、由兵衛目がけて打石が、舳板に當つ

て一はづみ川へざんぶと水散て由兵衛一絞り夫や暴れ
者が石うつはと、立ち上る所を續けて打てば由兵衛が、
額に當つてあいたしこ是は危し、皆々屋形へきさも乗
つて戸を立やと、無理無體に舟に乗せ親仁も早ふ往つ
しやれ、問怪我さつしやれなと云ひけれどもいやく
是は目出度、きさが嫁人の談合に石打とは吉左右、
地目出度ふござると云ふ小鬢にはたと當れは南無三寶、
こりやどうじや目出度過て目が出たと、ッ抱へてこそ
は歸りけれ、地猶も續けて打つ石は提灯も打破れ、由
兵衛も敗亡しおきさに心有る奴が、てんがうかはくに
紛れない船頭船をやつても、久三おじや、此奴を踏
んでくれふまかつしやれと、上るを見て二郎兵衛横へ

うなよく

うなよくの約。

きれてぞ三重歸りける、由兵衛久三大汗にて何方へ
 うせたくと、橋へ廻れば年輩なる浪人侍、髭奴の草履
 取何心なく来る所を、闘うぬ覺へたかと久三郎奴を橋
 へ横なげに、眞向を四ツ五ツたよみかけてくらはする、
 主人是はと立歸り久三を擱んで打つけ、踏つけく踏
 む所へ由兵衛駈つけ、ヤア爰にけつかるかよふ舟へ石
 打つたと、擱み付く手をしかと取り、何さ石打たとは誰
 が事、慮外者めと云ふを見れば歴々のお侍、ア、御免
 なりませ、人違で粗相致しました御免されて下されま
 せ、お慈悲でござると泣叫ぶ何のお慈悲と捻上げ、向
 脛をうつふけにはたと蹴返し、是奴腸の出る程此奴踏
 め、任せておけると土足にかけ、うなよく身を打せた

●身のひし
 ●酒盛つて尻踏まれた
 切られるとしいふ。 酒盛て尻

ナア、覺へて居ると、地洞骨尻骨うんと踏めばぎやつ
 と云ひ目玉も出る計りなり、闘もふよいはく、死ぬ
 程にしておけさ、此方へ来いと主従は優々として歸り
 けり、命からく由兵衛あいたくと起上り、闘久三
 其所にか、エ、聞へぬぞや、今の様に踏居るを見て居
 やる筈は有るまい、ヤ此方が聞へぬ、此方故に最前
 からはされたり踏れたり、エ、振舞喰ふた計りに言れ
 ぬ人の肩持て、阿房くさい振舞が戻つた、ござれ戻ろ
 と立上る、チ、其方はせめて振舞を喰ふたが、此方は
 物入ふるまふて、あげくにしたよか踏れた、向後振舞
 致すまい、御馳走が身のひしや、酒盛つて尻踏れたと
 獨言して三重歸りけり

●女とも見えず男なりけり 歌舞
 伎役者萬之助といふ若者すぐれて
 女に似たりければ堺の半井ト釜
 「女」と見れば男の萬之助ふたな
 り平のこれも面影。但し女とも見
 えず男なりけりは樂平の故事な
 り。

●すれこと、ねすりと *
 ●乾反り 張り物などの日に當り
 て反りたるをより轉じて腹立つと
 にもいふ。

中之巻

フシ本町や 新物見世の若衆は、女とも見えず男なり
 けり、女子交りの針仕事、つい一針が永き世の縁の端
 縫しどけなく、尻も結ばぬ絲櫻 フシ縫ひかゝるうたて
 さよ、地二郎兵衛は在所より戻つた顔して二三日、仕
 事は常より精出せ共きさにすねごとねすりごと、乾反
 し直し上下を盤にかけて打けるが、間エ、是は糊加減
 の悪い袴じゃ、よそくの人の心の様に、彼方へはひ
 つたり此方へはひつたり、移り易いどう根性なふおき
 さ殿、此方がやがてかみ様の肝煎で、安堂寺町へ嫁入
 の時、此袴を婿殿に着せたらよかる、其晩に石打れて

●何處やらの男云々 とんくと
 つや打の眞似をして七草を叩くに
 擬し、唐土の鳥と日本の鳥と渡ら
 め先に云々の七草の嘶しなもち
 りたるなり。
 ●ほたへ *

小鬢先割れぬ様に、抱締て居さつしやれやいの、おき
 さ殿やいのおきさ殿う、ヲ、かしましい、己や聾じや
 ごさらぬ是、此私が仕立る布子も、誰やらが氣によ
 う似て、なんぼ直に縫ふても横へくといきおる、聞分
 の無い物は此方に似合ふ着さつしやれ、私等が氣には
 入ぬと云へば、ハテ氣に入らずは打破つてのけたがよい、
 ム、打破つてもだんないか、夫はどうして打破る、ま
 づ此様に打破ると、地槌振あけて打盤を、とんく
 く、何處やらの男とよそくの女と、渡らぬ先にと
 んくく、とんとんとぞ フシ打にける、地重手代
 口々にやい、ほたへな、夫れ向ひの出見世から旦那
 のわせる見へぬかと、云ふ所へ四郎右衛門は、眼病に

●廿三夜一向宗は云々 灸する日のよしあしについてなり。

毒とは知れど渡世の世話、調なんと仙臺の注文は仕舞
たか、秋田の荷を積たらば今橋へ往て金請取りや、ヤ
アト庵老はまだ見へぬか、地下庵が見へたら灸をせふ
女子の手が薬じや、きさにすへて貫はふし二郎兵衛に
手傳さしよ、手のふるはぬ様に仕事しまへ、残りの者
は出見世へいけと云ふ所へ、調物もふ遊川下庵御見廻
申すと、つゝと入ればヤアお出か待兼ました、地先是
へと上座へ通せば下庵、今日は二十三夜なれど一向宗
はお構ひない、明日から八専土用前一段とよふござろ、
どれ脈を見ませふか、私の申した通り薬喰をなさる
ゝか、ハアいかふ脈がよふなつた、玉子をまいる効し
に左の脈がふはくと打まする、ム、魚の中にも鱈な

●大うんの物 未詳。

●土器あぶり 土器をあぶり、それ
に艾を載せるは艾の濕氣を去ら
んが爲なり。

●あるじやう あるだけといふに
同じ。

どは大うんの物、兼て無用と申したよもや喰ひはなさ
れまい、右の脈があたまたがちなは若し榎木などは參ら
ぬか、風氣もなし點を致そふ硯々と云ひければ、奥で
點を頼みませふ、是きさ二郎兵衛、油火灯して艾をも
み、地先二三百ひねつて置やとチクリ打伴れ、奥に入り
にける、地あつと云ふて二郎兵衛行燈灯しつ土器あぶ
り、艾出して揉んとするをきさは立寄り胸倉とり、
調是あんまりじやぞや酷いぞや、先度から染々と物云
ふ間も無い故に、心底が語りたさ傍へ寄ればびかしや
かと拗言の有るじやう、安堂寺町とは何事じや、ア、
嫌らしいく、地是なふ誰しも此方の年ばいでは、十
六七の振袖を好このむ最中に、四ツも五ツも年層の私

●やいと行 やいとぎやう、又や
いとげともいふ。炎の意なりと。
小兒が炎を下す時に其の熱さを感
むる爲め即復美に菓子など與ふる

に惚て下された、私や其心に打込で親兄弟も捨てたぞや、
在所は生れ古郷なり兩親の傍に居る物が、往ともない
筈はない何の由縁に大阪に、執心はなけれども、此方
と云ふ人に離れるが悲さに、お主を欺し親に背き身を
狂はす心を、可愛やとも云はずに面白さうに拗言、コ
レ死んで見せふか死乗は仕ませぬ、二郎兵衛殿と抱き
つき聲をも立てず隠し泣、二郎兵衛もしほくと、こ
らやくと背中を撫で共に涙を流せしが、地シテ先度
の手形の文言は、どうぞくと云ふ所へ、卜庵奥より
立出る、爾や是はもうお歸りなされますか、されば歸
らふか、まそつと遊んでやいと行の相伴せふか、地や
あるいと煙草盆引寄る、二人は艾拵へながら此首尾に

より起る名なるべし。種彦作「唐
人擬今兩性急」に「吾妻はとつ
り思案して、これ袖襟袖はそつ
ちにごさんせう、私がちいさい時
にやいとをすへく、母様が、何で
も欲しくば突きやうに取らせうと
仰つた、側にあつた佛様、あれが
欲しいといふたれば、いやあれは
大奉の物云々、こゝは食物なられ
ども、菓子等の代りに佛像を請求
したるといふまでもなし。

語りたし、早ふ去ねがなくともがけど去る氣色なく、
調なんと灸行言つけは無つたか、冷麥か素麵か、なま
なか茶漬位ならいつそ戻つて寝てくれふ、地内證知
しやと言ひければ、きさは悦び差心得、旦那様は毒斷
で夜食はあがらず、卜庵様へはつい茄子の淺漬で、茶
漬進せとおる様の言ひつけ、早ふ歸て御寝なつたが増
してござろと誑せども、何じや茄子の淺漬じや、一段
よからふ、地夫れに出花をつけたらばと茶白形になる
を見て、おきさも呆れ寧そ泊つてござんせと、佛頂顔
に二郎兵衛艾に火を付庭の隅、卜庵が雪駄の裏、物は
試と煽ぎ立、煽ぎ立てぞ煽らする、地呪咀は理外に
て卜庵氣にや徹しけん、是は不思議千萬、調俄に宿へ

●淡漬 一鹽に漬けたる香の物。

●對駄に云々 長座の人を早く
去らせんとするには、履物の裏に
灸をすへ、又は棒を立るなどの咒
阻世俗の行ふところなり。

歸りたいもふ往まじよ、地滅多に往たふなつて来た、
 ハテまちつとお遊びなされませ、いや／＼俄に往たふ
 なつて足の裏がこそばいと、畳に足をすりつけ／＼降
 ければ、二郎兵衛雪駄をちつくと直し申し卜庵様、
間旦那の眼も直りませふ灸が早ふ驗ましたと、地いへ
 ども我身の上とは知ず、ヲ、卜庵が名人御覽あれ、一
 炷で驗が見へましたよと、足の踵のさび悪げに雪駄擦
 せて歸らるゝ、地サア旦那の出来ぬ間に手形の文言早
 ふ聞たい／＼、地さればいの文言は何様やら讀ても聞
 せず、宛名は菱屋四郎右衛門様貞法様、親子が印判し
 ましたと語れば二郎兵衛はつと驚き、地エ、由兵衛め
 が文言聞さぬは曲者、娘きさを由兵衛殿へ遣はさふと

書たやら知れぬ、日頃和女に心を盡す由兵衛め、どう
 こけてもうぬが爲のよい様に書たは定、間三田の親仁も
 粗相な、手形の文言吟味なしに判すると言ふ様な、是
 後の邪魔とは其手形、地どふぞ手形を盗んで破つて捨
 たい物じやと云へば、間ア、苟且にも盗むと云ふは恐
 いく、ハテ錢銀の手形か慾徳になるにこそ、朋輩由
 兵衛との色づく旦那に損徳かゝらぬと、何時も彼の筆
 箭に手形ども置るゝ、鍵はそこらに見るぬか何のこゝ
 らに置れふぞ、おる様かみ様旦那様、三人の外介様へ
 さへ持されぬ、何時ぞ序にかみ様頼み文言見たがよい
 はいのと、云ふ所へ四郎右衛門なるときさ二郎兵衛、
地艾がまだ出来ずは向ひの出見世へいて、女房共にも

●あはせくるりと灸のばい 未詳。

●十四の灸に水が湧 當時の俚語。

●ましも草 艾の毛。艾を植ゆるには、其の木を切りて土に挿すゆゑましも草といふと。

燃つて貰へ、更ぬ先にしまひたいどふじやく、気がせ
く、あいく、灸も皆出来ました、御勝手に遊ばしませ、
そんなら爰で斯う向いて、それ二郎兵衛菓子盆、
られ煎豆さんせうに、小蒲團敷けとあはせくるりと灸
のばい、前を後に目は見へず何をせうとも領いて、
地くすりくの灸ばし、痴話の「便りの薄煙り、
地十四の灸に水が湧く盛りの女盛りの男、手をしめ身
を撫で口を寄せ、誰を忍ばんさしも草、
皮切なる、地やうく、灸もすへおろす主人の帯の前巾
着、後へ廻る紐とけて、繋ぎし鍵は巾着より、半分こ
ばれかよりたり、二郎兵衛見つけて、
箆筒に指しきささ目に目くばせ、
天の與へと取んとす、
きさは嫌じやと手

●から猫のおき 猫が火をいらふ如く危しとなり。

を振れば、大事なとて頭ふる、手をふる頭ふるひ
く、手を出し手を引くから猫のおきをいらふ危さ
や、
調申し旦那様熱くば少押へましよか、いや熱うは
ないが精がつきた、よい加減におきたい、まちつとで
ござんす夫れまちつとじやく、
地夫やよいはと鎰引
出せば狼狽て、はしの灸を取落す熱やく、
もふ
く、是でしまはふ奥へ往てちと寝よう、二人ながら休
んでくれよふ仕てくれた過分なと、
悪事と知らぬ主の
慈悲、
仇となりたる身の果ての、
冥加に、
盡しも道
理なり、
フシ二人は顔を見合せて鎰を取りは取たれど、
主の目を晦ませば胴が慄ふて恐ろしい、
誰ぞ来るか番
しやと、合せて見たる箆筒の鎰に、
あたるも地獄の鎰

●三原の合口 備後三原住の刀匠正家の打ちし合口なり。

●蓮如様の名號 蓮如上人は本願寺第八世法主の号。蓮如自筆の名號は門徒にてはやまじきものなり。

●だんない 大それたの詠り。

前を、明て捜せど衣類の外は三原の合口時代の印籠、箱に入しは蓮如様の名號、ハア合點のいかぬ、手形箱は何時も土藏へは入らぬが、戸棚に入たか知らぬと地常見覺へし戸棚の銚、なんの苦もなく戸を引明け、捜せば一通上書に手形と有り、サア忝ない是が欲さの狂亂と、戴きく二ツ三ツにびきさき、懷中に捻込で跡しまはんと爲る所へ、門を明たは誰ぞ、だんない者と由兵衛上り口までつかくと、地蔭を見るより二郎兵衛戸棚の内へ這入は、きさは前にひつそふてハア由兵衛殿か、上らしやんせと後手に、フシそろく戸棚をさしにける、由兵衛とつくと見濟し、旦那は灸をなされたげなと、つくと上つて是やなんじや、大事の

銚ども取散し簞笥の口も明て有る、是おきさ退や、此世間物騒に戸棚の銚はなぜおろさぬ、地さらば銚も腰につけ銚をおろして置ませふ、ヤアしやんとなと地おろす銚の音、内に響けば消入る心地、きさはわなくくくと、直に死たい計りにて前後にくれてぞ見へにける、由兵衛きさが手をむすと取り、是おきさ、先度舟へ石打れた其疵が是また治らぬ、此打人が知れました、今宵旦那の戸棚へ入た盗人と同人、定めてこなたも助けたからふ、戸棚を明けて沙汰なしにして遣か、旦那の耳へ入うかこなたの心一つじや、地なんとくと云ひければ、手を合せて頼みまする、日頃は恨も有る筈を打捨て其詞、生々世々迄忘れませ

●津山三三
可醫者にてもありし
なるべし。

ぬ一生の内此御恩、何方してなりども送りませうどれ
鑑貸んせ明けましよと、取付ば押退け、ヤアうまいこ
と云やんな、何時ぞくと今迄釣れたは何十度、此以
前貴様が津山立三殿に奉公した時から惚て居た此由兵
衛、是非思ひを晴さふなら、和女の口へ手拭捻込で、
寝る術も知たれども夫は戀とは言れぬ、地此戸棚が明
けたくば此首尾についちよつと、身を汚して下されち
よつとくと、取付ば突放し遁て廻れば追廻し、抱付
く所をあた面倒なと突倒し、間由兵衛の生畜生、文言
知れぬ手形によふ判をさしやつたのふ、今其方と寝た
らばなんじや戸棚を明てやらふ、忝ない嬉しい、夫が
嫌さに此苦勞云ひたくば言や大事ない、地二郎兵衛殿

と此きさと念頭を仕て居る、戸棚の中なは二郎兵衛私
も科は免れぬ、靡ぬ仇に訴人しや生畜生の死畜生と、
所存極し涙の體由兵衛聲をたて、調ヤア若い衆は出見
世にか、盗人が入つたぞ久三や竹は宵の口、地何所に
居ると呼はる聲貞法始め長兵衛權兵衛、皆跣足にて駈
付る、由兵衛威丈高になり、調是御覽あれ、旦那衆の
腰を離れぬ此鑑を、盗み出しあの如く、箆箭を明け戸
棚を明し所へ、身が来るを見て戸棚の内へ逃こんだ、
所をしゃんと錠をおろした、中に居るは二郎兵衛、
地手傳は此おきさ證據人は此由兵衛と、出来し顔の腕
捲り、きさは涙に性根もなく、内外の者ははつと計り
フシ顔を眺めて居たりけり、地貞法鑑を腰につけ四郎

右衛門は最ふ寝てか、旦那に聞せて兎も角も思案が有らふと有りければ、由兵衛先町代を呼びにやり、宿老殿へ報せて地町中提灯、繩よ棒よとひしめけば、奥より由兵衛くと、手を叩いて呼はるよ、あいと答へて奥に入れば、四郎右衛門小手招き、調次第とつくと聞届けた、子飼と思ひ肌を免し扱もく憎い奴、灸の間、鑑取るは恐ろしい仕方、去ながら俺が聞ては六かしい、夜中にわやわや町内の外聞もよからず、外へ物さへ散ずば俺が聞ぬ分にして、濟し様も有ふこと、何云ふても夜が更る、二郎兵衛めは籠の鳥、其分て戸棚に置き、きさめは今宵請人の、姉めに急と預けにやりや、急ては粗相も有る物、とつくと分別して見よふ、

女房子供が恐がらふ直に出見世に泊まらしや、手代ども、向ひへ、母者人は爰へ来てお休みなされと申して、其方も歸つて明日おじや、必ず何にも穩便に宵の中に皆寝さしやと、蚊帳に入れば、由兵衛元の所に立出て、夜中に旦那のお耳に入り、眼病に障れば如何、何事も明日の事、これ長兵衛權兵衛、大儀ながら此きさを請人の姉めをとに、地急度預けて直に出見世へ往て寝や、サアきさ立と云ひければ、申しかみ様参ります、調私が身は構はねども、二郎兵衛に科の無い段は申譯の有る事、おる様へもお取成萬事頼み上ます、盗人の名を取り是が悲しうござんすと、わつと泣出し送られ行く、目もあてられず不憫なり、地サア貞法様

●夜ざと 目敏く寝るも。
 ●廿三夜の代待 二十三夜待は、月の深更にのぼるを待ちて拜するないう。代待ちは代祭りといふに同じ。

奥へござつてお休み、我等も明日早々久三も表をよぶしめて、夜ざとに寝やとて出ければ欠伸を直にあゝと云ふ、返事眠たき夜なか聲、フン廿三夜の代待や、地門の通りはまだ四ツ、内は静まる燈火も心も細く三更にけり、フン物の憐み深きこそ後生願ひの心なれ、人も寝入て貞法は寢醒の床を起出て、戸棚の傍に差足し、詞こりや二郎兵衛いきすりめ、聲聞知たか阿呆めと、地ごとくと敲かるれば地獄で地藏に逢ふ心地、阿、かみ様かお耻しや、地庖丁でも薄刃でも柄を脱いて戸の間から、そつと入れて下されませ、お馴染だけのお慈悲ぞと泣聲、漏る計りなり、詞ヤレ死る程の生根でさもしい事を爲る物かと、地袖を覆ふて錠錠の音せ

●ねた ねたに持つなど。意趣に思ふも。

ぬ様に戸を明けて、其所へ出おれ、町人と云ひ年寄の婆なれど、菜刀でなり共己が首を切て遣ふと、わざと詞をあらゝかに叱られてしよぼくと、這出る帷子も汗にひたりて、時の間に顔も瘦たる酷らしさ、地流石子飼の主心叱る心はわきへなり、思はず涙を流さるゝ、詞二郎兵衛顔拂上げ、貞法様面目もござりませぬ、地お主の罰と計りにてはたと俯伏し泣きけるが、御存じの通り今迄に一錢掠める我等でなし、氣も違はねども耻しや、きさと念頃致せしを由兵衛めがねたにこみ、何かな見出そふくと文言知れぬ手形を書き、詞きさ親子に判をさせ旦那のお手に入し事、いかにしても覺束なく、此手形取らん爲ばかり、戸棚の内を微

でんと

に聞けば旦那のお耳へ入らぬとやら、地どうもお耳へ
 入れずに済む様に頼み上まする、彼の直真な旦那殿お
 心の蔑みが、首切るより悲しいと、隠居の膝を戴き
 く、フシに喰つき泣き居たり、調やれ其言譯は已
 が心の了簡よ、主の腰の巾着あけ、屋内の鎰を盗み取
 り、此だいたいそれた言譯が、でんどでそもや立へさか、
 地由兵衛が我儘な手形とは見たれども、其場は其日の
 亭主方無興と思ひ其手形は、とふに破つて捨てたぞや、
 きさめと己を夫婦にして、末では世帯に躰んと、此年
 寄が苦に持たも斯う破れては水の泡、何程慈悲がした
 ふても、理を非には枉られず、目の明ぬ主と由兵衛な
 どが言立ては、朋輩共も氣がふれて跡で人も遣はれず、

己に不憫もかけられず、思ひ切てきさを由兵衛にや
 れ、時には四方圓くなり、其方も是に勤めよく、主の
 恩も送らるゝ己が心持次第、池田の姪の中にて、
 女房には事かゝぬ、地きさを遣るかどうするぞと、我
 子に意見をする如く、叱りつ泣つ割口説、二郎兵衛も
 唯泣入て、暫時返事もなかりしが、詞一々のお詞聞入れ
 ぬは、畜生に劣る二郎兵衛なれども、あつと申して御
 恩はよも送るまい、元服を致したものを丁稚よりなほ
 押下て、地差でもない事言立に踏ぬ計りに擲たとき、
 蟲でも堪忍なりがたき無念を凌ぎ参りしも、お家のお
 影で一日もきさと一所に住居をせば、由兵衛が面を踏
 返した當然と、思へば今日の奉公も心まめしう勇しに

やみく／＼ときさめを渡し是や見たかと云ふ面が、見て居られふか口惜や、どふも私は堪るまいと、無念涙は目にあまり、袖を喰切り我身を掴み、身を慄はして歎きしは、フシ心底道理にむざんなり、いや申す程お主の慮外、兎に角元の戸柵に入り彼奴が致した通り、錠をおろして下さりませ、直に籠へ参らば、是今生のお暇乞、御恩を報せぬ段は御免有つて下さりませと、這入る所を引出しやれ恩知らずの物知らすと、腹立涙の際よりも、十二の歳より飼育てし、二郎七の昔忘れたか、三日にあげず煩ひて迎も用には立まじき、往せくと人毎に言ぬ者もなかりしを、地此婆一人情をはり在所へ戻さば死るは定、眞の慈悲とは此事と十八

●朝勤参 一向宗にて、朝早く御堂へ参詣するをあさぢ参りといふ

●情を情に立る 剛情を張り通す

の春まで、咀呪よ薬よと孫子にもせぬ世話をして、地四郎右衛門にも物入させ、やうくと人になし、朋輩共も嫉む程人に勝れ目をかけしに、籠びつに入る時菱屋の婆が阿房盡し、盗人かひたて親方は眼病なり、身代あけるも知ぬと四郎右衛門まで誹せても、己れが一分立てたいな、御堂の朝勤参りにも、女子共起して苦勞かけては後生にならぬと、己計り伴しに明日より朝勤に参られず、願ふ後生も願はせぬ淺ましい氣が附初た、此家に馴染ば犬でも猫でも貞法は酷いめが見ともなく、可愛さにこそ口たしけ、此上にも我を立て己れが情を情にたて、死たくば戸柵へ入れと泣つ威しつさま／＼に、慈悲心餘る涙の意見 フシ後世に入りたる

●奈落に墮す 誓文を立る時、自分の母を地獄に墮しても今の罰は遠へのなどいふ。

しるしなり、地二郎兵衛聞き入れてや御成もく、合點參つた、思ひ切て由兵衛にきさを遣りませり、同ム、夫が定なら誓文立て、來月は母の七年忌、此頃取越致した此母を、奈落に墮しませふと地跡先知らぬ誓文の、フンひとつは罰も當るべし、チ、出來いたく、此家次しい重手代、由兵衛と張合て勝て頃と云ふ物、何事も眞法が美しう濟して遣ふ、二階へ上つて最ふ休めと戸棚の鏡前しとおろし、阿房めがおきさ計りが女房か、彼の様な洒落者より、おむくむくの手いらすを抱せふぞ、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛とて奥に、フン入る心殊勝に哀れなり、地二郎兵衛夢とも誠とも氣もうつとりと成りけるが、さもあれかの手形隠

●家次 上木町の家を披露に取、七貫五百目を貸付たる手形なり、一災起れば二災、惡事の引き續き發生するなふ。

居の破つて捨てしとや、今破つたは何じや知らぬと取出し、合せて見れば南無三寶、七貫五百目上木町の家質の手形、此晦日に元利残らず相濟む筈、はア、はア、地はつと明た口も、何に塞がん身の罪科、一災起れば二災起る、雨雲の空恐ろしく、よろめく足元判の破れを引寄せて、合せて見繼で見、繼に繼れぬ命の難儀、どもも生ては居られぬ死るとも生るとも、きさは離さじ離れじもの先此家を脱殻のひよろつく足を踏留めく、表へ出る中の間の、合の戸そつと明ければ、竹が蚊帳に丸裸身蚊を燵く紙燭めいくたり、エ、邪魔な爰を通らば咎むべし、ア、如何せん何と扇子の一煽き、はつと消ればア、悲し、阿憎の風めや火を消し

●朝比奈ならねば門破り 建保元年五月二日、和田合戦の時朝比奈の三郎義秀鎌倉御所の南門を破りしをいふ。

●割菊の紋 心中の現勢などに遺留したる品にて、事實に據りたるものなるべし。

●おいの おきさの返事なり

た、今宵一夜を蚤と蚊に此肌を手向るじや、地あつたら物を久三でもおじやらいで、地二郎兵衛殿とおきさ殿挨拶見れば羨山しうてたまらぬ、地此方も益には在所へいて、あは畑でしげると、ころりと寝たる音計りフン軒の闇はあやなしや、地やうくと門口の貫の木堅き家の風、鎰は久三が預りにて、朝比奈ならねば門破り、フン詮方つきて立居たり、地預けられたるきさが身の出ては姉の迷惑と、知れど夫の床しさと、分て割なき割菊の紋の風呂敷引包み、菱屋の門口樞の穴覗いても音信は、蚊の聲ならで便りなく胸じやくりして泣聲の、内へ徴に聞ゆれば二郎兵衛も樞の穴、顔を寄れば鬢の香の、梅花の薫はおきさか、おいの二郎様か、

●極楽の四風

昏中に冷風の吹く

●此の月一重が關守 近松半二が作「奥州安達原」に「此の垣一重が鏡の云々」全く此の文句の換骨奪胎といふべし。

語りたいた事計り、爰がどふも明けられぬ、地此戸一重が關守と互ひに身をすり氣を蹴き、フン泣くより外の事ぞなき、地浪花橋の辻に寝し犬一疋吠かゝる、聲につれて方々より七八疋、きさを威して吠立る、恐ろしなんども詮方なく、放れがたなく門口に猶取付て立ちりしが、中中の間の竹目を醒し、あれ久三門にいかふ犬が啼く、何も無いか起て見や、おふと答ふる寢聲の返事、夫りやこそ久三と、きさは東へ二郎兵衛は、中戸の影にぞ隠れける、久三は例の繻袴一ツ、より棒提げ貫の木明け、潜り開いてつと出で、中ハテなんにもないもの非人がな通つたか、来いくくと地呼ば犬共尾を振かゝる、エ、蒸暑いが外へ出れば極楽の西

今宮心中

時極樂風などいふ。四風の涼しきを吸ひて、極樂の四風と囁きしなり

風、エ、忝ないど涼む間に二郎兵衛、積重ねたる染地の日野絹、壹反ほどいてくるくく、身も頭も眞白に引包み潜をぬつと飛出れば、なふ悲しや幽霊じや、幽霊よくと逃込み門口はたと鎖す、危なや地獄極樂の堺筋から是れ爰と、招かれ寄りて何事も先此近所を退いての事、あては無けれど南の方人や咎めんくるくと絹をも包む世を包む、其風呂敷の木綿巾身のなり果てこそ 三

二郎兵衛おきと道行

一ツとや、ひとつ涙の瀧の絲、落ちて三途の川となる、二つとや、筆もあれかし我心、書て後世に留めた

一ツとや云々 當時流行の歌へ明なるべし。

今宮心中

地獄の釜の蓋 俗に釜と正月の十六日には、地獄の釜の蓋の開く日なりとて休業す。

や、三ツとや見たや聞きたや 故郷の親の生顔 フン夢にだに、夢さへ見せぬ死での夢、醒てはいつか此娑婆へ、歸りこんどの藪入りは女夫連での約束の、地盆正月の十六日を待ち樂みし我々が、哀れ地獄の釜の蓋を開を待べき罪人と、チクリ呵責の、責はよもやその、シテいとしいこなた、マキ可愛いそなた、シテ脱すまいぞや 二人脱さじと フン縋り抱よせ泣婆 咎めて吠る犬の責、此世に地獄見せけらし、是も思へば親の罰、私は親よりお主の報ひ、チクリ育て、られたるお情けや、後生願ひの親方の、宵にや和讃夜中にや念佛、早眞夜中の月しろの、フシ空を力に東堀、澄み行水に影映る、我身の燭り耻し、恥は暫しの浮世なりとも、戀をする身の

手本町とは二人が、心ひとつに米屋町とも、思ひ計りて後生七生助かる、おれが殿御は、日本おろかよ唐物町にも稀な男のちよきりこきり小女房、花の様なる和子設けて久太郎町とて、やがて寺入久寶寺町、地其かねごともし、いつしかに、徒寝の夢のばくろ町、誠に私もこなさんも、跡には親のかれ残る、老木の老の世はさかさまに、フシ順慶町も空ごとや、安堂寺町も子故の闇に、迷はせません不孝の罪何と脱れん淺ましと、フシ又引きよせて泣く涙、袖にさし来る鹽町や、長からぬ世に長堀の、樂な世界を心から、九之助橋や是やこの、歌 瓦屋橋とや油屋の油しめ木の音に聞く、おそめに染めし久松は、いつの時雨の一雫、洗へど落ちぬ

●師走時 俗に師走油をこぼせば火に燃るとて水を浴びせ災難を免るといふ、呪詛なり。

●二ツ井戸 道頓堀の東堀留町にある名水なり。

●死掛尋ねて露にしみつく帷子 當時の流行歌。

●おぼろ花色 醜染は「近代世帯談」に寛文年間、京都の紺屋新右衛門といふが初春の月の色を見て工夫し染出したる色なる由を記せり。おぼろ花色とあれば花色の一種なるべし。

●死に行くもの知らいで人の、浮世

ナヨイ戀衣、世にひろがりし仇し名をよそに謠ひし言の葉や、其油屋の一節も、師走油が身の上に、かゝる涙とこぼれそひ、明日より同三味線に、法の灯し油屋のチクリ回向を、なすこそ、フシ哀れなれ、ひとつ有るさへ惜き世に、今宵限とほりづめや、命二ツを二ツ井戸へ深い縁とて死にたいも、皆罪障の大和橋、あの千日に立つ煙、無常の雲のさつき雨、降ぬ先にと、歌 死に場尋ねて露にしみつく帷子、肩と裾とはおぼろ花色、腰に弘誓の舟に帆掛て、妻に磯馴の松原、是を最期に京橋やら、西に川口船の帆柱、此處に恵比壽の松原、松のくろみか雨雲か、降らぬさきとて道急ぐ、早曉の旅人や、歌 死に行くものヨホ知らいで人の、浮世仇口曲も

佛口曲もなや

流行吹。

今宮心中

五四

なや知らいで人のヨホ知らずや人の、浮世念佛も頼も
 じく、傾く月を知る邊にて、空を拜めばおちかたに、
 とゞろくくと遠くなるをの海かと聞けば、あれくよ
 そに轟く、フシ雷鳴の、落ちかゝる共、我夫を除けて涙
 の袖おほふ、いや我は男よそなたをと、互に覆ひおほ
 はれて、今死ぬる身も生身には、目に恐ろしさ稲光り
 野中の水に飛ぶ螢、御燈の影はまがはじと、歩みよろ
 く足たゝぬ、恵比壽の森にぞ、三着にける、フシ二人
 は松の、下蔭にどうと座を組み泣けるが、男は氣弱
 き若者、阿、譯もないことしたはいの、内に居る時
 走りのさきの、菜刀でなりとも一人死ぬばよいものを
 地死ぬるに連を拵らへて、旦那には事缺せ、家の名を

●恵比須の森 今宮神社の森なり
 今は人家立並び昔の御更になけれ
 ど昔は、この邊一面の松原にて頗
 る淋しき所なりしと

●走り 流しのこ。

●格好こそは大ぐれ
 なるなふ。

體格の大き

今宮心中

五五

出すと云ひ、女房の親兄弟に、難儀をかける筈太いや
 つと、死顔をまぶられ、日頃立てた正直も無になりよ
 しない者に縁ふれたと、そなたも世間の評議にあふ、
 許したもやと計りにて涙、正體なかりけり、地なふ
 死際迄其様に私が事思ふてか、嬉しうござる忝ないど、
 供に打伏し泣きけるが、地されども夫は愚痴じやぞや、
 格好こそは大ぐれなれ、昨日今日の前髪を姉と云ふて
 も大じない、きさめが酷や殺したと、憎みは我身一ツ
 にて、そこは露ちりいとね共世間晴て宿小屋持、若
 い衆のつき合ひに老女房持つたどて、人が笑ふが、フシ
 譏らふが、此兩の手の有りたけは、命限りに稼ぎ出し、
 まあ十五年辛抱すれば、こな様は三十六私ばちやうど

●老女房のいとく 威徳や、但しこはお陸といふに同じ。

●中有 佛説に人死して七七四十九日の間は、現世と冥途の間にある時き世界にさまよふといふ。

●六道 畜生界 畜生道といふに同じ。

四十一、老女房のゐとくに、男に家を買せたと、譏りし人にうらやませ男に緒を付ふぞと、思ふたこと云ふたこと違へば違ふ現世さへ、未來は猶かし覺束なや、中有の旅の雲霧に見失なふと有り共、犬死と思ふて下さるな、六道の辻にて必ず巡り逢ふぞや、ヲ、をんでもないこと譬畜生界に落ち、蟲けらに生るゝとも同蟲と生れふと思ひ詰たかつめました、さは去りながら何に成らふも知らぬ身の、人界の見をさめ、ま一度顔がよふ見たい私も見たいと引よせく、我故に殺すか、女房故に死なしやんすか、いとしいぞやいとしいと、盡させぬ歎きひぬ思ひ、思ひ亂るゝ夏草の、フッ萎れ伏てぞ泣き居たる、あれく夜明も近付くか、ちらく人

●求塚 攝州鬼原郡東明村にあり昔し津の國に住める女あり、二人の男に戀はれ、いづれとも選びかね、生田川に浮べる水鳥を射中たるものに身を任せんとし、いしより二人の男ひとしく之を射る、一人は頭に一人は尾に射當て、これまた優劣を辨じがたきに、女困じ果て遂に水に投じて死す、二人の男も悲み女の跡を追ひて死したるを、三人の親其の遺骸を埋め塚を築くといふと、大和物語に見えたり。これも一種の情死なれば、こゝへ引合せに出したるなり。

●夢の浮橋 無明の橋。
●足袋の片足 足袋の片足の脱ぎ

の通ひも有る、二人が帯を結び繼ぎ、云ふた通りと解んとすれば、いや帯は解ては見ぐるしからん、此絹は親方の商ひ物、盗みはせね共、斷はり云はねば盗みも同然、是を此木にゆはへ付け旦那の絹にて首くよれば、旦那の手にかゝるも同然、一つの罪や脱ると、昔の例求塚、是も男と女郎花それはくねる是は又、うねりし松に手をととりて渡るも夢の浮橋や、無明の橋の最細き、ナクリ心の罪に踏滑る、フッ足を踏しめ、地踏しめても上り煩らふ男の體、女子の身でさへ上る物、是やどふぞいのと手を引けば、二郎兵衛涙をはらくと流し、詞ア、主の罰の恐ろしや、此足袋の片足は旦那のお古、常は兎もあれ此時は頭にも戴くはず、地土足に

捨てありしと、これも非難なるべし。

●はたし神ものなふ

●無縁とて雷の激しき

かけし其咎めお許しなされ下されと、脱ぎ捨て登る松が枝に、そりや電光り鳴ふぞや、吃驚して落まいぞと、夕立頻るはたし神、目指も知らぬ松影に何やら暗ふて見へてこそ、慾深い事ながら顔をばせて下さんせ、電光の影になりとも顔が見たい見せたいと、くわつと光ればわつと泣き、叫ぶ聲々雷神も、思ふ中をばよもさけぬ、涙の雨に二重三重纏つけく、二丈の絹も我々が一ツ蓮は一丈ぞ、往生浄土は一寸ものへも縮めもサアよいか、首の結め生々世々解ぬ契りの堅結び、サアもふ物は云はれぬ云ひたい事はござらぬか、和女は無いか私は父様母様が、懐しい是計り、我はかみ様旦那の事、云て盡せぬ此外は、唯南無阿彌陀佛はつかりぞ、

●岩代の松 岩代は紀州の地名、こゝに結び松とて名物の松あり。

●心中の新物 総死は其の例えしきより新物といへるなり。

サア唯今が南無阿彌陀佛く、南無阿彌陀佛と踏はずし、落る袂を引き寄せて、抱き附ても苦みの、寄りては離れ離れては足を締め手を伸し、虚空を掴む臨終の互ひの目には見へながら、物は云れず岩代の、松にかよれる下り藤、嵐になやむ如くにて、次第く弱り果て、消行く星と諸共に、一度に息絶へ目を塞ぐ、桁丈揃ひし死婆、又に伏すは古手にて、これ心中の新物と、聞く人回向をなしにける

心中又は氷の朔日

解題

此の淨瑠璃は寶永七寅年六月朔日の朝、會根崎神明の森にて心中せし鍛冶屋平兵衛と北の新地平野屋小勘との事を仕組みたるものにして「今宮心中」と同年の作なり。同月十六日初日竹本座にて前が「野守鏡」三段目、切が「氷の朔日」なりき。「氷の朔日」と外題を据えたるは、六月朔日なればなり。此の日遊廓にては正月納めの紋日として遊女等駕に乗りて勝曼参りする事、今日戎におけるが如し。又郊外にて風を揚げる事、今は絶えて無き事ながら、當時の風俗を知るに足るもの多し。殊に此の作にて北の新地の位置を詳に知るべき文句あり。上巻、平兵衛が内儀及び娘の供をして北野不動参りの時、雨の降り出しければ、親方利右衛門氣遣ひて、他の弟子供に傘を持ちて迎ひに行けと命するに對し、弟子供は不平面をして、平兵衛の供からは氣遣ひはござらぬ、堂島新地、蜷川茶屋くらや、煮賣屋で、かちやの大盃平様と誰

しらぬ者もない云々といふ。これにて當時大阪北の新地は堂島にありし事を知らるべし。換言すれば寶永七年頃は未だ遊廓として會根崎新地の存在は認められざりしことを證するに足る。而して平野屋は中巻に中こめたる中町やとあれば、今の堂島中通りなるべし。又當夜小勘の忍び出し茶屋は和泉屋といふ。同巻に初手は内にて二つめは濱筋の和泉屋さがもととあり。和泉屋は揚屋にて濱通りにありしを知る。(會根崎心中「解題參照」)

心中又は氷の朔日

近松門左衛門作

上之卷

フシさりとても戀は曲者みな人の、地金をへらす焼釘は、敲き直いて意見して、焼直いても悪性の、酒と色との銚や、煮ても焼いても、フシ噛れぬは、地鐵橋あぶりこ鐵火箸、其癖細工は器用にて精さへ出せば二人前、せねば釘貫ぬけていく、讀書かな文鐵挾、兎角萬能一れん物鐵鎚こたへぬ糟釘で、後は吹あげ鞆ふく、鐵鍛冶屋のてこの衆てつからり、ころりてんくからりちんからり、ちんくからりと、フシ打あげて、帳面計り

●戀は曲者 曲者は不思議又奇態なもの、意。口では種々通達を云つて見るもの、戀は實に不思議なものなり、と詠歌の詞。
●地金 木地といふに同じ。本性を見せるを俗に地金を現すなどいふ。此の作主人公の平兵衛が鍛冶屋なるより、女服切の刀盡しの如く、鐵物盡しにて卷を開く。
●煮ても焼いても 古語に煮ても焼いても食はれぬといふとあり。手にも足にも乗らぬ人間などに對していふ。
●糟に釘 塵へのない喩。
●てつから 以下鍛冶屋の槌の音を形容したるなり。

●打出の小槌 大黒天の手に持てる槌にして、財寶を心の儘に打出すの意にて、打出の小槌と名く。

●灰猫 猫は寒氣を嫌ふと云しければ、冬は蓋の下に入りて暖を取る故、常に灰にまぶれてあり。それを鍛冶屋の親父の顔に喩へたるなり。

●虎が涙 昔我兄弟仇討の時、頼朝は急に鎌倉に歸らんと五月廿八日八ツ時富士の裾野の狩場を出立せんと用意あり、但し雨が三粒でも降れば明日五ツ時に延引さるといふ。虎少將は頼朝鎌倉に歸れば、兄弟仇討の時期を失ふが故に天に祈りて雨の降り出し、首尾よく本望を遂ぐ。されば後世五月廿八日の降る虎が涙とはいふなり。

合あひに合あひ槌つち、いかな打出うちでの小槌こつちなり共とも、フシつ續つくべき様やうなかりけり、地弟子でし子こ大勢おほせ遣つかふ身みは油斷あぶらさせじと旦那だんなから、灰はいまぶれなる灰猫はいねこの顔かほ振ふるあげて、調ヤア虎やあこが涙なみだのしるしが見みえて空そらが曇くもつた、五月廿八日雨あめ三さんつぶでも降ふねばをかぬ、かゝや子供こどもが不動ふどう參まゐり氣きの毒どくや雨あめに逢あふ、地仁介にすけでも長三ちやうざうでもちやつと傘かさ持もつて走はしれ、大降おほふりがするならばおつまが帷子かたびら濡ぬそふより、八分はちぶんくらゐで駕籠かごをかれ、かゝにも足袋たびをぬぎやと云へ、雪駄せんだを腰こしに挟はさむとも新あらたしい紙遣かみつかふまい釘包くわづんだ古反ふるほん古こ一いち二に枚まい持もつていけと、そこく氣きのつく職人しやくじんの、フシつ金出かねで來かす氣きぞ格別かくべつなる、地弟子でし共どもは不承ふしょう顔かほ、調雨あめが降ふが雪ゆきが降ふが平兵衛へいべゑの供ともがらは氣遣きつかいに御座ござらぬ、地堂島どうじま新地しんち蜷川ながわ茶

●くらや 人の目を眩くらすゑにて、個人こじんより出たる語ことばなりとあり。くらやは此のくらより出たるものなるべし。人の目を眩くらび男女密會みつゑする所。一種の淫賣宿よんばいしゆくをいふ。

屋やくらや煮賣にうり屋やで、鍛冶屋かじやの大盡おほじん平様へいさまと、誰知たれしらぬ者ものもない平兵衛へいべゑ殿だん、傘かさの五本ごほんや十本じゅうほんを借かりかねは仕しやるまい、私等わたくしらが持もつた傘かさでは、お山衆やまもろの濡ぬかけは堪たまるまいとて動うごかねば、調親方おやかた利右衛門りゑもんやいこりやく、又またしては已おのれらが、誇こほりはしりに兄弟あいで子この中言なかごを云いひをるか、あの平兵衛へいべゑめは是こゝの見世みよを任まかせる程ほどの久ひさしい者もの、なんばうでも身みをうつて仕損しきまふ者ものでない、地平兵衛へいべゑが眞似まねしたら汝等なんぢら當あたが違ちがはふぞ、同じ様おなじやうに己等おのれらが文ぶんの使つかひも仕しをるげな、連立つらだちたも知しるあの邊あたは人ひとを釣つる、うまい餌えに喰く附つお山の味あじを喰く覺かくへたら、夫限たねかぎりに追出おきだすと苦くる々々しく云いひければ、調いへく私わたくしら文持ぶんもちてたつた一度いちど、仁介にすけは先度せんども連立つらだちてお山やま喰くふて來きたげな、エ、

あの人の嘔吐やる、我がどこに喰ふたぞ、チ、我身先
 度いやらぬか、ほん山寺の開帳から平兵衛殿と新地へ
 いて、喰ふて来たたとサアなんと云やらぬか、あいそれ
 はの平兵衛の茶屋へ連れていて、旦那様に云ふまいなら
 うまい物喰はせふとて、地主は奥の座敷でお山を喰や
 つたそふなれど、私は端の上り口で鰻の蒲焼はつかり
 お山は口へも寄せなんだがめいよな鰻といふ物は、喰
 へば喰ふ程お山が喰ひたふなつてくる、鈍な物じやと
 笑ひける、親方も返答を他へそれたる槌の音、てんて
 ん天気も照降雨に五十餘りの女房の、とつて置をば濡
 さじと、嬉しや此方そふな連、走り込しは、誰でござ
 るぞ何方からぞや、ハア、ごめんなりませふ、大文字

●取て置き
 晴着のとき。

古くいふ詞と見ゆ。

●鐵櫃せんべい
 當時名物の煎餅
 ありしにや、或は蝦治屋に縁を求
 めたるまでにや。

●手があけば口があく
 仕事を休
 めば、活計が立ぬといふことの喩。

●さよ

おへ様の尋。

屋の利右衛門様とはこなたか、北野鐵櫃煎餅三郎兵衛
 と申す者の女房、こなたの若衆平兵衛殿一寸呼び出し
 て下されませ、ハア、中々や、平兵衛は今日かゝや娘
 が不動参りの供をして、こなたの近所へ往たが今に戻
 ろふ、煙草でも吞で待つしやれ、茶進せやと云ひけれ
 ば、ア、お構ひなされますな、平兵衛殿とはふとした
 縁で念頃に致しあひ、今では親子同前、とふに内方へ
 もお禮に参る筈なれども、地夫婦の手ばかりの商賣
 手があけば口があくで自づからの御無沙汰、今日は平
 兵衛殿に用ついで、おゑさまにもお目にかゝらふと存
 じ参りました、副是はとゝの手焼の鐵櫃煎餅、さまに
 進せて下さりませ、皆平兵衛殿の朋輩衆か、暑い時分

に熱い仕事、御太儀でござんする、あれ〜辻迄平兵衛殿お供して見へまする、おる様そふなと云ふ所へ内儀娘平兵衛が差掛傘の印にも新地平野屋墨ぐろに、櫻の丸の花の露、花の雫もなまめきて、地人々歸れば、ヤ、戻つたか、雨にあふて気がせかふなあ、いや〜平兵衛の近附多ふて、傘も借たり休んだり、地ゆるり〜と蜷川の新地を、おつまに始めて見せましたと、語ればおつまもなふ父様、平兵衛の案内で、美しいお山衆をたんと見て來ました、ヲ、そりやよい慰み一段〜、北野の煎餅屋のお方平兵衛に逢ひたいと、地先から待てじや噴土産がある禮を云や、煎餅屋殿も先づ内へと、亭主は奥に入ければ、地ア、お

る様でござりまするか、今日は宿におりましたら、澁いお茶でも上ましょものお残りおほやと挨拶す、聞さればの事平兵衛の念頃と、かね〜咄し家も知てゐまする、重ねてから寄りませふ、あれみなおここの時分ちや、サア先づ内へそれ平兵衛、馳走しや〜と人あいよく、チクリ皆々奥へぞ入にける、地平兵衛あたり見廻し傍へ寄て小聲になり、聞なんとしてござつたぞ今日立ながら平野屋で、小かんにちよつと逢ふたれば物案じ顔して今夜中に、是非共ちよつと來て下され、ひよんな事ができましたと、跡先もなふ云ふたれ共供の事なりや二言と聞かず、あふと云ふて戻つたが、どふしたいはくじや氣遣ひな、萬事こなたを頼んでおく、何事

●肝煎 遊女の口入するも、色道大盛に、傾城屋の女を抱ゆるに肝煎といふ者方々に子供を見立置き皆知らせ口入す、何れの道にも肝煎る事はあれども、此の媒介に限り肝煎といふ、是れ劇中の詞にて外に用ひざる所なり。

●一昨年の大地震 畿内をはじめ諸國大地震ありしは、寶永四年十月四日となり。其の十一月富士山噴火して寶永山を現出せしと人の知る所なり。此の作寶永七年六月十六日初日にて、一昨年の語合はざれば、此作は恐らく寶永六年

ができたぞと、恨み顔にぞ見えにける、地女房も早涙ぐみヲ、道理去ながら、つい云ふて濟ぬ事、せかずと様子を聞つしやれ、爾今迄はわしが身を、小かんの肝煎取次のとこなたへも隠したが、眞實はわしが姉の子現在の伯母姪、父親は播磨で鷹匠頭の奉公人、五十石に五人扶持二本指た人の子なれ共、親ごせが殿様の御秘藏のお鷹をそらし、お氣に違ふて浪人しあの子ばかりを大阪へ、伯母を便りに何方へも仕附て呉れと登されしが、折節悪ふ不仕合こちのとよの長煩ひ、やうく本復めさつたりや一昨年の大地震、私はきじやくで床に附、身代とふも立兼、既にかまどを破る處、詞あの子が私等に隠して肝煎頼み、堀江の茶屋へ、三年

なるべし。但し登場一年後れたるかも知るべからず、なほ考ふべし。

●さしやく

氣難なるべし。

●大阪三郷 大阪を二分して北組南組となし、天満組を合せて、これを大阪三郷といへり。

を十二兩に身を賣て呉れました、地私は聞いて目をまはすと、は男の腹をたて、身こそ貧なれ大阪三郷隠れもない、鐵植煎餅三郎兵衛か、が氣色が本復して、千百年生よふが大福長者にならふが、女房の姪に身を賣らせ、其金取て立物か、腹を切るとて喚かれたを可愛やあの子が涙を流し、伯母様許して下さりませ、國の父様母様が浪人でなければ、こなさま達へみつぎの筈地其ならぬが悲しさに私が身を捨ました、他人でも有ることか伯母は親の片はれ、こな様達はかりじやない、國に暮るる母様への、孝行と思ひます、伯母様を母様と私や思ふてゐますと、病はふけた伯母に抱附て、聲をあげて泣やつた顔、今に忘るゝこともない、其陰

●人參 藥草の名。朝鮮産にて人の形をなしたるのを最も真品とせり。昔は人參を起死回生の靈藥としたれば、其の價貴く、貧しき者が之を購ふに妻子の身を賣りたるなどの話あり。されば「人參飲んで首縮る」の喩へあり。

●けく 結局のこ。

で人參の、百服餘りも飲だ故、病の根を抜此様に身代の尾もみせず、暮すは小かんの孝行故、こな様元は知らぬ小かんがいとしがる人と、云ふて互の念頃あひ、命を助け身を助け、姪ではなふて親じやもの、如才にせいと云やつても、私等に如才はないものを、恨みがけくて聞えぬと、邊りを忍びしくくと、フシ泣くどきてぞ語りける、地平兵衛手を合せ、餘り氣遣ひ切なきに恨みらしい詞つき、眞平く御許し、こなたを伯母御と云ふことも、小かんがいふて知つてゐる、先此度ひよんな事できたといふが氣遣な、落つかせて下されと猶氣をせくこそ道理なれ、問ヲ、さればいの、内々國の親御せへ茶屋奉公は隠して、大阪の歴々の奥様へ

預けた分、地所に今度小かんの兄御、殿様より呼返され御奉公にありつかれ、それゆへあの子を國で縁につけるとて、乳母の息子の乳兄弟が、昨日の朝おつや様迎ひにきましたと、幼名いふて登つて、安治川に宿をとつてゐる、こちと夫婦は當惑して、さま／＼思案して見ても、地今で請出すてだてはなし、恥を捨ていふたらば國の迎ひが藏屋敷で、つい銀を調のへ國へ連れて歸らふし、時にはこなたと縁切れる、どうした物で有らふと、小かんに問ふて見たれば、問いとしやあの子も泣入て、國へ歸つて親達の顔も見たふはござれども、平様に一寸も離れふとは得云ひますまい、地叶はぬ首尾に極つて國へ下るが定ならば、私は見事に死まする

ひき日

伯母様を頼みます、國へ遣ずに平様と長ふ添はせて下されと、歎くもいとしう道理なり、恩を受けた大事の姪爰は一つと思ふても、手わざにかぬは金事、國の迎ひは早ふといふ、あの子はどぶちやと氣をせきやる、詮方つきてこな様と談合に來ました、三年を十二兩、一年半は勤める、残つて半金六兩なれど、ひき日の何の皮剥でも調のへましよ、まあ四兩二分あればあの子をしやんと請出して、地こな様と疾から夫婦にしたといひなし、國へ遣るにも夫婦づれ婿人させて濟せ共、其四兩が見へぬ故犬事の姪が望みも遂ず、死に生も出來かねまいと思へば胸も塞つて、今朝はおもゆばつか

行當る

行つまること。

●しやちらさんぼう 詳ならず、但しさん／＼になどいふに同じ。
●痛手を負はせ 借金を返すと出來ず、債主に迷惑をかくるをいふ
●からくむ 企むこと。たくらむなどいふ。
●ほうはつら 頬は面が、脊は腹にかへられずなどの類が、詳ならず。

りで何も喉が通らぬ、是程しきでこなさまへ身代打明け咄すこと、恥しい口惜い無念にごさると手拭も、絞る計りに泣居たり、地平兵衛はあと吐息をつき、はて扱思案に行あたつた、調私も近年彼故に旦那の懸けも何もかも、地しやちらさんぼう近附中に痛手を負せ、動かれぬ身になりし故、高少借金を輕めん爲あちな商ひからくんで、三兩餘りは今日明日に請取る筈の約束地はてほうはつら此金を請取次第遣ませふ、二分や三分の足ぬ口夫は其時どふもなる、何とぞ首尾して、小かんを手へ入れる様に頼みます、國へ下るに極れば此平兵衛から死にます、二人の命を助ける慈悲本の後生に成りませふ、伯母様偏に頼みますと、又手を合

せ泣ければ、いや頼む事ではござらぬ私が身に掛つた事、其金さへ調へば何の案する事もない、ちつと胸が開いた平野屋へも立寄て、小かんに云ふて落つかせふ、そんなら早ふ歸りましょ、内方へもよいやうにと、出れば是々此傘、小かんに返して下さりませ、なふく是は幸と、差て出たる傘や、とらが涙も引かへて、牛天神ののへの露、消ゆる間近き 三重 命なり、フシ見送る道も、しみつきし、草鞋に編笠の田舎商人二人づれ、ヤア平兵衛殿いかい暑さでござるの、誂へ物共出来ませふ、今日受取て金も濟し、明日下り度ござると云ふ、いかにもく上物は皆出来たが、急な細工が支へて中から下の並物が揃ひにくい、地金は先づ請取て

●四兩あし
るへし。

あしは足らずの意な

出来次第に跡から下しませふ、金を持ってござつたか何程持てござつた、四兩あしもござるか、フシをぐろに高をぞ聞たがる、地いや上物さへ出来たれば並は遅ふて大事な、誂への分算用は今日残す仕切てと、腰のうちがひ取出し、前 先度手付に一貫文渡し、今三兩三分相場は金六十目、錢十五両合二百四十目、しかけの代に引がない、こなたの方には是が徳、ちよつと一筆請出して出来た分下されと、いひも仕舞ぬ半分聞き三兩三分につかみ付き、是でざつと濟まする、まあ二分や一分は伯母がどふぞ仕やりましょと、我計り合點の敷もよむやら讀ぬやら懐に押入れ、請取ても手形でも起請でも、仰付られと硯紙取出し是旦那様 同上物の

●いきる

急ぎたつこと。

●あひる 陶器に赤色の釉にて模
様を描きたるもの。

裏金二千足戸棚に有ふ、地取出し下さりませとぞいきりける、亭主裏金束ねながら持て出、平兵衛が咄しで聞きました、大和の雪駄屋殿は各でござるか、是はあはぬ細工私が聞けば請取るまいに、平兵衛が在所から念比中じやと申してどこでやら請取た、地重ねて斯は成りませぬそれおつまお茶進じや、あいと返事も色づきしあかゑの茶碗手にすへて、出花一つあげましょと差出せば是はく、忝ないと取んとせしが、いやくお茶はたへますまい、御無用になされと云ふ、お前はいやならお連様、いや私も御免なれ、平にお一ツあがりませ、何しにお辭儀申しましょ、兩人ながらお茶は得たへませぬ、そんなら白湯でも上ましょか、聞いや

く所望にござらぬと、地いへばおつまも打笑ひハア愛想もないことや、こりや仁介煙草盆持てこいとて入にけり、仁介が奥より煙草盆鐵冷屋炭火のおこり立、有る火はおいて懷中より火打に火口打出し、煙草のむ身は石の火の、光りの間をも待かねて、フ身の程知らるゝはかなさよ、地亭主是に心付き、何れも大和のお衆とある、奈良郡山左手右手、吉野郡の奥迄も雪駄屋衆は皆存じた、地御兩人の御在所は、何國と問へど聞かぬ顔、あちらへすべらし紛らかし只名所を隠すにぞ平兵衛も親方に根問ひさせては悪かりなんと、サア請取は仕舞たり渡して早ふ戻しましょと、取んとすれば亭主押へて、聞いや此商ひはせまいはい、金請取たら

●金銀たんと持た村 前に身の程が知らるゝとあり、此の二人は六和地方穢多村の人といふ事を知るべし。昔穢多は下り者と稱し普通人と伍する能はず、彼等は牛馬を屠殺し其の肉を食ふ故、身の穢れたるものとして普通人の家にては遠慮して茶も吞まず、煙草の火も借らず、別火なれば前の舉動にて利右衛門は彼等の素性を知りしにて、昔より穢多は金持なりといへば「金銀たんと持た村」といへるなり。

●うつけしの 心の空けたる者痴漢のこ。

●目代 監督の意。

早戻せ、始め聞けば請取らぬ、地あの衆は大和の金銀たんと持た村の、牛馬迄持った様あの衆の誂へ者、此利右衛門は請取らぬ、我等が家職に疵がつく、勿體ないと搔さらへひん抱へて奥へ入る、先づ待つしやれ夫では私が立ませぬ、損のいく細工でなし金に一厘不足なし、手付取て手形して渡す段に變改して、職人が立ますか様子があらばある迄、夫なら私が内證の自分仕事にしませふ、時には家に難つかず疵が附けば平兵衛が疵、渡さねばならぬと取付く所を突こかし、はつたと睨んでうつけ者、疵が付けば平兵衛が疵とはどの口で吐した、此利右衛門が目代にして弟子手間取をも引廻す、己に疵を附まい爲よ、京御所方の御普請の下

●ごくに立ぬ 役に立ぬも、ごく漬し、ごくだうなどのごくより轉じたるなるべし。

細工の釘請取、火水を清める最中に正しふもない金を取り、伴ひつきあふ己が先いきせふと思ふか、冥加が有らうと思ふか、地五兩に足らぬくされ金、寶の山と惜みをる、根性のかひなさで商ひがならふか、けつく丁稚の時分には人にも成らふと思ふたが、エ、ごくに立ぬ根性と涙を浮め齒きしりし、向ひ隣りへ聞えぬ中金を戻して去せをれと、フン怒りけるこそ尤なれ、地平兵衛至極に詰れども、懷の金に離れ難く、よふござる今の間に私が打てやる、地鐵は後で算用と横座に直つて足鞆、地鐵打くべ吹きたてく丁稚ども、朋輩の好みに相槌ひとつ打てくれ、平兵衛が一生の恩に受ふと頼め共、親方の顔色みて、誰か詞の相槌さへ、フン打者

とてはなかりけり、平兵衛恨み泣き、エ、そふはせぬもの聞こへぬな、うぬらが草臥眠たがる時には、己が代りをして二人前を働らいて、宵から寝させたり休ませた恩徳を忘れたな、よい頼まぬおきを、裏鐵の千足や二千足平兵衛が肩腕、半日の仕事に足ぬ親方朋輩ひとつに成て、此平兵衛が一分すてさせ、此首尾なら死ふも知れぬ死だらば此一念、己等が首引拔て、とてこくとつてらこくと、とてこくと打つ槌に、落る涙も溢れそひ、湯玉とたぎるばかりなり、親方土間に飛でをり槌鐵挾取て投げ、朝晩清める鐵床に涙をかける罰あたりと、槌の柄をおつ取直し胴骨を四ツ五ツ、たよき付けく、汝が敵は此金と、懐に手を押入

● 舊功爲した育立 子飼ひのうちから仕込んだ年功ある者の意。

れ是金を返せば云分ない、此方には請取らぬとこそ外で誂らやと、投返せば二人の者詮議無益と思ふ顔、手附の一貫覺へたか、地平兵衛重ねて取に來ると、フシ云ひ捨てこそ歸りけれ、地平兵衛わつと大聲上、邊りも耻ず歎きしが、去とては旦那殿舊功なした育立を、可愛が定か憎いが定か、只今のお詞は、弟子子不便な云ひ様で又此仕方は平兵衛に、首縊れとのなされ様、鍛冶の道一通り、火を清めるといふ事は商賣なれば知つて居て、其上でする商ひ、一旦はさも有れ、一生主に逆らはず詞一つ返さぬ、此平兵衛が是程迄逆らふて申すからは、身ぬけのならぬ、フシ譯有と、大目に見て下されて、其御恩を忘れる平兵衛めではなき物を、但

●宿村

種多村なるべし。

●額に毛貫もあてるもの 一人前の男の意。

し金を引こんで損懸ふとの氣遣か、同年の切は去年明
 き、身を質に置からはお氣遣はない事、平兵衛が身一
 生、生る瀬か死ぬる瀬の、大事の銀に行詰りやうく
 大和の宿村が、地誂物を天のあたへ、時の間を合せた
 く奉公して十八年目、始めて旦那に叱られ能はぬ身に
 は能はぬ金、命を捨つるも世のならひ、夫に悔みは殘
 らね共、額に毛貫もあてる者、見世の先で晝日中、町
 の衆道行く人友朋輩も見ざるぞかし、丁稚小者をする様
 に曲もない打擲き、背骨は折ふが碎けふが、打たるゝ
 槌は痛ふない、憐れを知らぬ親方殿、見て居て打する
 おる様やおつま様の情ない、お心の鐵槌が身節へしみ
 わたり、いたい悲しい恨めしいと、泣いては恨み恨み

●鹿を退ふ獵師山を見ず 利慾に目が眩み、道理を忘るゝに喩ふ。

●悪性金 酒色に徒費する金ないふ。悪性の解前に出せり。

ては、我身の科を悔み泣き、色に迷ひの心の闇、フン推
 量られて不便なり、親方彌々腹を立て、鹿を逐ふ獵
 師は山を見ずとは己が事よ、お山狂ひに眼がくらみ、
 人の理非も身の上も、一寸脇が見えぬよな、己が身の
 立とあらば彼等に商ひする迄もなく、五百目や六百目
 は此利右衛門が出しかねぬ、遣ふてもく止りの知れ
 ぬ悪性金、氣儘にさするはをのが身に毒飼と云ふもの
 よ、内外の者も町衆も三人寄れば己が評判、聞いて無
 念な親方の心の内を推量せよ、調さきにも仁介長三め
 が、噂をするを叱りつけ、今で彼等に面目ない、去年
 の春から際々に、或は百目八十目懸の算用不埒にて、
 何時の際か帳面のさつぱり濟んだ事がある、夫のみな

●鍛冶屋の仁藏 名妓吉野に懇想し、戀に煩ふを吉野其の心をあはれと思ひ、抱き入れて一夜の情をかける、仁藏我志の叶ふを喜び遂に水に投じて死するも既に前に説けり、爰も平兵衛が鍛冶屋の丁稚風情にして、身にも及ばぬ傾城狂ひするを、親方が仁藏に尋へていへるなり。

●罰利生 罰利生は理非を能く辨じたるの意なるべし。

らず堺筋の絹屋から、紺縞子の女子帯五十六匁、緋縮緬八尺三十五匁と云ふ書出し、覺えが無とて返せども、跡からは持て来る、不思議な事と思ふたに、今日と云ふ今日内の噂が、緋縮緬の正體を見届けて歸つた、ヤレ勿體ない冥加ない、灰まぶれの鍛冶屋の仁藏、身にさへ着にくい緋縮緬に、足を四本踏こんで其罰はなんとせふ、身の行末がかあいひと、聲をあげて泣ければ、女房娘諸共に、悪ふ聞きやるな平兵衛と、フン共に袖をぞ絞りける、罰利生有る親方にて涙をとゞめ、聞こりや平兵衛、云ふて居ては果しがない今迄の事は皆許す、是から魂入かへ世帯を持て出る迄は、茶屋の見世へも揚るまいお山と詞をかはすまいと、きつと誓

●不動の刃 不動明王は、左手に縛の繩、右手に利劍を持つ其の刃なり。

文たてふならば、此度の金たとへ四兩が五兩でも、今出して取らするがサアなんと云ひければ、地平兵衛飛退り兩手をついて頭を下げ、申しおる様おつま様、旦那様へ詫言して御禮申して下さりませ、道知らず恩知らず大悪人の私に、金迄出して此難義お救ひにあづかること、親も及ばぬ主の慈悲今日は祝ひ月、廿八日御縁日不動の刃に喉笛を、突通され身の家職の鐵床に、打ちしやがるゝ法もあれ、又や二度悪性ごと、ふつと思ひ切ましたと、涙を流し云ひければ、地ヲ、でかしやつたく、それが其方の身の果報と、皆々悦びほめにけり、親方も機嫌を直し、調流石男じや満足した、此上ながら此方の心の落附ため、地誓文の證據に

●内侍所 禁中温明殿のにて、
八咫の神鏡を此に安し、内侍之を
守護し奉る故に内侍所といふ。又
賢所ともいふ。

●鐵火を握れ 火起踏のとも。豊臣
氏の時、徳本といふもの、其の弟
の爲に訴へられ、兄弟固く執て伏
せざるより、官鏡ありて北野神社
の庭に於いて、火起踏をなましむ
然るに弟は鐵火の爲に手焼け、徳
本は自若たりしと。

●發起 一念發起せしをいふ。

●まかなひ つくろひの意。

は三尺ばかりの棹鐵の、夕日の如く焼けたるを鐵挾に
て引出し、鐵床にどうと直し、詞是は此度禁中様御内
侍所の釘下地、此内侍所には日本の神々御ばん有り、
八萬餘座の神の司の御寶殿、地其釘になるくろ鐵、今
の誓文偽りないと見る前で鐵火を握れ、心に誠ある者
は氷よりも冷やかなり、少しも偽り有る者は腕焼けた
ゞれ落ると云ふ、佛神に虚はない其方も發起して、今
の誓文立るからは熱いことは有まい、サア握れと云ひ
ければ、平兵衛色變り、只はつくくとばかりにて、フシ
跡退りにぞ成りにける、地女房笑止がりハテ爰な人う
ろたやる、思ひ切たが定なれば鐵火に怖い事はない、
但しは當座まかなひに金取欺しの空誓文か、去りとは

悪い合點一生の病をぬき、身上の固まる事さつばりと
思ひ切りや、思ひあふた馴染の中、離れがたない筈な
れど、それは一度の皮切、なんばいとしい戀しいも、
身が立ねば叶はぬと但し思ひ切られぬか、サアいやお
ふの返事じゃ、どぶぞくと手詰になれば、平兵衛顔
も心もうろくと、否と云へば主人の慮外、おふとい
へば年月の、小かんが情仇となる、思案涙に胸つまり、
なふ旦那様おる様おつま様も頼みます、其御返事は私
が身に成代つてどうなり共、思ひ分て下さりませ、鐵
火は御免とばかりにて、かつばと伏して泣きければ、
地親方も是迄と燒鐵追取り大地へどうと投つけ、詞工
、欺された騙られた、十八年此方たとへ犬猫飼たり共

●火を改へる 昔は火を清浄にする習慣あり。例へば忌服、又女子の月の障り等ある時は、其の家は火は汚れたりとして神籠をなます。其の明きたる日に當りて、新に火を改め清浄にす、これを火をかへるといふ。こゝは穢多の爲に汚されたれば、火を改へたるなり。

是程にはよも有るまい、地半時も内には叶はぬ叩き出せと飛びかゝり、胴骨をどうと踏む情なき丁稚ども、柄長の鐵槌手々につ取り目鼻もわかず打出す、平兵衛大聲あげ、たとへ擲ふが叩かふが、此平兵衛は是の内より外往き所はよそにはない、死ぬる共此内から直に死ぬると、駈入るを敲き出し、走り入れば敲き出し、なんなく辻へ打出し、打て清めの鹽水や、跡は火を改へ水を改へ、表をかゆる備後町、へりも切れはて縁切れて、とこ離れ行 三重戀路なり

中之巻

戀草の、フシ種うへんとて、地かためしは、神か佛の堂

●堂島 「丹分船」に、此の島は昔し聖徳太子守屋を退治し、後玉造の岸の上に伽藍を建立せんとしたるに、猶も守屋が憤やまず、其の亡靈風波となり、彼の用木を吹流し、此の所に留りしより、俗に堂島といふと。故に神か佛の堂ときかせたるなり。

●田籠橋 堂島川に加せる橋の名。波邊橋と玉江橋との間にあり。

●大江橋 堂島川の最も上流に架せる橋。

●櫻橋 蜷川に架する橋。今の櫻橋は波邊橋より梅田停車場に到る道筋なれど、當時の地圖を見るに堂島二丁目の中程に架せり。又今の櫻橋は、當時の堂島橋にして今の曾根崎橋及び助成橋は此の頃の地圖に見えず。

●法華長屋 此の邊り新地の名なるべし。

●中町 堂島中町なり。平野屋はこの中町にありしなるべし。

●吉野川 これは地理の關係あるにあらず、下の花の網といはんが爲めのみ。

●一まき 一伍一什に同じ。平野屋小かん身の上の一まきなり。

●和泉屋さか 揚屋の名。

島をきて見よとてや田籠橋、夜々を重ねて大江はし、はしのゆきげた雪ならば、いくたび袖を拂はまじ、花のふゞきの櫻橋、梅田のみどり曾根崎の、青葉隠れの鳥の音も、法華長屋の名を立て、神祇釋教戀無常中にこめたる中町や其家々の吉野川、流れの数の多ければ、よねが情の花の網、掬ひとられぬ人もなし、色里に誰が身の樂で身を捨る、人はなけれど取わきて、地平野屋小かん一まきは、語るも聞くも、フシ哀れなり、今日は六月朔日の正月納めの絞日ぞと、思ひくゝの揚の客小かんは田舎の侍に、初手は内にて二つめは濱筋の、和泉屋さか許へと出かけたる、女子亭主の譯よしがほながのすゝを打拂ひ、人に情を掛鯛のむしり肴

●かき餅 かき餅はもと武家にて正月の鏡餅を閉くに當り、双餅にて切るとを思ひ、破毀せしより餅の名起れり。またへき餅をかき餅といふは、洛東國山安養寺、双林寺、靈山正法寺にて、嚴冬餅を製し、片圓となし、半乾の時三寸ばかりに薄く之を切り、陰干に乾かし、遺火にて焙り、蓋の内へ蓋へ置きて賓客に供せしむ。一般に廣まりしものにて、之を岡山餅といふと「雅州府志」に見えたり。上方の青樓にては今も此のかき餅を、酒のあしらひに肴を調ふるまでの間に出す。

●辨愛参り 又愛染参りともいふ。天王寺勝愛院の愛染明王は、毎年六月朔日本尊が開扉し、参詣人群集す。昔は此の日を曲輪の大紋日とし、遊女は所細色駕籠に乗り参詣するを暗とせしが、何時の間にか愛染参り廢れ、今日我の貧寒駕籠に其の節をといむ。

●下向 神佛に参詣し歸ると。

●さいめく 陽氣に暖き立ちると。

●愛染 愛染明王は三月六臂にして、獅子冠を頂く。一切衆生の惡心を滅滅せしめ、無上菩提の法財を施すといふ。併遊女の参詣す

と春めかす、其かきもちの氷より、涙の氷とけやらぬうき身の上こそ無慘なれ、地あれく勝曼参りの妓様達、駕籠が戻ると云ふ中に、早表まで昇よせて、簾打あげコレさが様、頭今下向しました小かん様爰にか、こなさん参ると云はんしたが、道寄せずにおとなしう、早ふ下向さんした夫も合點、地早ふ逢ひたい人があると、さゝめき戻る駕籠の數々、衆人愛敬愛染の、威徳も見へて、フン頼もし、地さがもそれく挨拶して、松屋丸屋河内屋の、よね様達も此方の揚て参らせました、遅いことやと云ふ所へ、程なく駕籠を昇入る、皆様緩りとやらしやんす、道頓堀でござんしよの、同よいすいく三十郎の初日見て、芝居では大酒戻り

●此方の揚て 和泉屋の客の揚てにて松屋、丸屋、河内屋の女郎も参詣せしとなり。凡て色駕籠を出すは、いづれも客が女郎に花を附けて出すとなれば、一つも多く駕籠を出すを以て青樓の榮譽とす。

●三十郎の初日 嵐三十郎の、やつし方の俳優。正徳頃の位附上々白字の吉なれば、名人とまではいはれざるも、此人纏屋九郎右衛門の座元なれば、三十郎の初日といへるなり。

●狂亂 夏日の飲食より起る激烈なる吐瀉病。

●信田森 信田森は和泉の名所なれど、こは保名狂亂の事を引きうらみ葛水にかけたるまでなり。

●一けん 一見と書く、初對面の事。

●提灯二ツ紋付 役者遊女等、愛染明王へ願をかけるに、各自の紋所を飾きたる提灯を奉納する風習あり。

は駕籠でむしたてる、熱いことく、地此暑さでは霍亂して、信田森のうらみくす水、一ツ飲しやと喚きしが、ヤア小かん様、こなさんは参らずか定めし夕平様と、手を引あふてござんせふ、小憎いことやと云ひければ、地小かんはつと肝にしみ、そうした事ではなはいいな、今日の客は一げんの田舎の侍、日が暮れて見える筈、それ迄は愛染様へ参らふと儘なれども、心に大願有る故に提灯二ツ紋付で、今日の間合ふ様に一昨日から誂へ、今にも提灯出来次第参りたふござんすが、提灯の出来ぬのも氣に掛りますといふ所へ、地提灯屋の息子走り来て、小かん様爰じやげな提灯が出来ました、二ツで四匁四分じやと、フン云ひ捨てこそ

●佛に受けられず 提灯の出来損
ひしを願の叶はぬ光といへり。

●梅田へ行く 墓所なれば、死ぬ
るとの謎にかけ、白張りの提灯は
やがて用に立つと皮肉をいひしな
り。

●晩のじあひ 晩の準備の意。

●いふてな、歸らぬ死出の旅
の山の文句なるへし。

歸りけれ、地嬉しやくさが様つい參つてきませふ、
むずかしながら四郎兵衛殿、此提灯の絞の脇に、書附
けて下さんせと云ひければ、料理人はお易い事目出た
う一筆みしらせふと、提灯あぐれば絞なしに、眞白四
郎兵衛興さましこりやどぶじや、四匁四分で白提灯氣
轉の悪い提灯屋、ちやつと絞を書せてこふと、走り出
れば是々、もふよいはいの提灯屋に料はない、私が佛
にうけられず、願の叶はぬ知らしめ、そふして置いて下
さんせ、やがて梅田へ行く時にどふで入らねば叶はぬ
と、浮世をすねし言葉のはし、一座のよねや下女久三
仕直に遣たらば、多分晩のじあひにならふ、歸らぬ
ことは悔まぬもの云ふて歸らぬく、云ふてな、歸

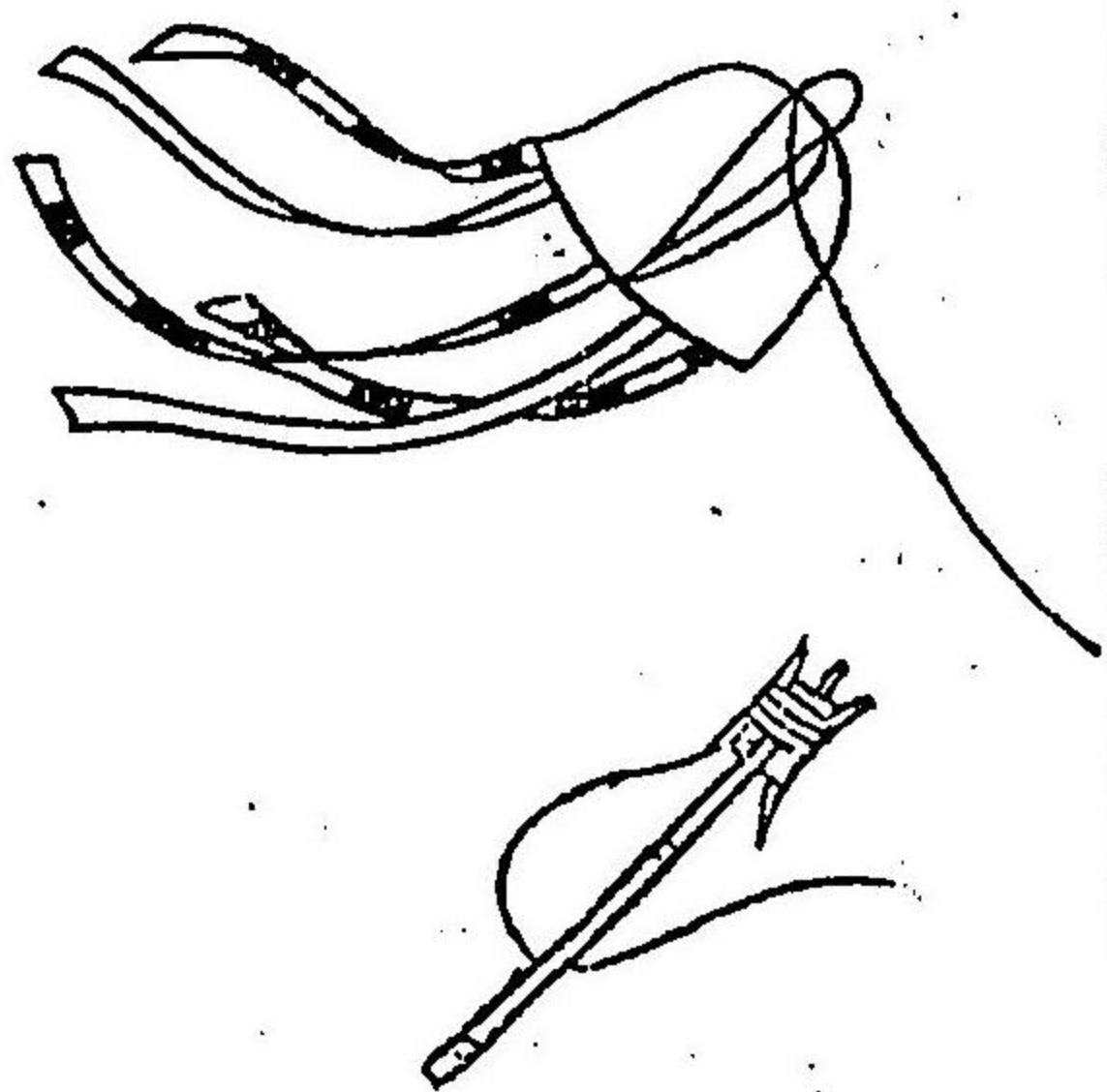
●間夫 情夫のこ。

らぬ死出の旅、サア飲かけふと祝ふても、定まる前世
の約束を、フのがれざるこそ哀れなれ、平野屋の小
めらうが風呂敷包みうちかたげ、ア、熱やとて走り入
り、さが様ちとお耳借ろと耳に口よせ、内儀様のいはし
やんす、アノ小かん様には、鍛冶屋の平様と云ふ間夫
のお客がござんすが、様子あつて逢せませぬ、晝から
ちらく此邊で見へます、門より外へ出しませず、
行水もそこで頼みます、氣を付て下さんせと、叫
きちらし歸りけり、地小かんははしく聞附てさが様
今のは何のこと、平様の事であらふさりとては氣の毒
な、先の方は親方持浮名が立ては職人の、身の爲によ
からぬ噂人の云ふは皆悪口、地間夫の何のと云ふ様な

●世間の口に月をたてて、人の口に戸は立てられぬといふ古語より取れり。世間の口うるさきないふ

●いかにのぼり 風上りの鏡技は、今も諸國にて行はる。但し大阪にては寶永正徳の頃流行せしものと見え、正徳六年版「好色入子枕」に「折から紙馬のぼり世上にはやり云々」。尤もこれは徳川忠兵衛の語のうちにあれば、寶永末の頃其の後此の事餘り聞かざるを見れ

深い譯では更々なし、今でもふつと見へたらばどこぞでそつと逢せてや、此方からとんと埒明て手を切て退ましよと、口には云ひて目は涙さがは五音で推量し、ア、そんな事氣に掛て此勤めがなるものか、世間の口に戸をたて、錠おろす其錠鍵は、いかな鍛冶屋の平様に誂へてもなるまいと、地夕暮近き人日かけお客様達見よふぞや、行燈の用意しや甜瓜も冷しや、湯もとつてたも小かん様もお行水、私も汗を流そうと奥に入れば一座の色、私らも行水してこふと、皆々表に出にける、フシ空も涼しき夕風に、はやる今年のいかにぼり雲に舞鶴とんびいか、から風招く唐團扇鬼の頭も色里の、うへにあがれば、フシたよくと、しなだれ上



(紙凧) 藤園集所載

は一時の流行なりしなるべし。「脚色録」に、此の日町々の子供色々に好みたる風をのぼす事あり涼風に乗じていろくのはす風盛の文あるは、此の頃ははやり物珍らしとあり。此の風盛しに、今の風とは異なりて、種々の形なしたるを見る、即ち次に挙げたるは類る珍風なり。舞鶴、唐團扇、鬼の頭、藤の花、文風、小袖風、杯風、菊牡丹、太鼓風、鯉、瓢箪、鮫風、絹風等なり。但し當時一般に行はれたる形は圖の如し。

る藤の花、誰文いかにの一結び、其思はくの紋つけて、袂すゞしき小袖いか、盃いかに品もよく、菊や牡丹の花いかを、戴きあぐるたいこいか、鰻瓢箪鮫いか吹ぬ風もつ扇いか、雲をるどるに異ならず、フシ往來の人も立留る、地此内に彼人の見へよかしと紙鳶見る顔で表に出、上下に氣をつくれば、梅田橋の西詰に、淺黄縞に深編笠、ア、あれそふなが夕顔の、黄昏たどる覺束なさ、先にも見付て編笠の下目遣ひ届かねば、心の中に招き合目はいかにのぼり爪先は、其方の方へ行水の、橋の詰までそろくと、跡の恐さに身も慄ひ、傍へ寄りは寄つたれども、人目にせかれ抱付れず、文を見てから

●乳兄弟 同じ乳母にて育ちたる
本々互ひに呼ぶ稱。
●ばしやれ 風俗華者にして、端

私が氣は、死んで居るぞと計りにて、泣くにも涙落次第、拭ふも人目つゝましや、男は笠のうち惜れ、親方も道理の勘當是以て恨なし、そなたを國へ下さずば親に不孝の冥罰、地行末善らふ様もなし、下したいも一杯なり、別るゝは猶つらし、此平兵衛が胸一つで、本國の親達まで嘆をかけ苦をかける、許してたも悪縁じやと、フシ笠を傾け泣き居たり、あれやうくと忘れて居たもの、親の事又言出して泣さしやんす、地打るゝ杖も床しいと云ふものを、拳一つ當られず、かはいがられた現在の親、是はさんげじや忘れぬ、迎ひに來たは乳兄弟顔恰好は覺へねども、親達と思ふて見たけれども、町方に居る分に言成した私が身が、ばしや

りなきをばさうといふ。これに同じ。色里の風に染みてはすはなるものなり。

●優曇華 天竺にありといふ樹の名。實を結べども花常に咲かず、されど三千年目に咲くといふ故に極めて遺遇しがたきと喩ふことにては最早再び逢ふとの出来ざるの意。

れた形で逢れもせず、親の事を思ふやらこなさんの事思ふやら、心を推して下んせと、又さめぐと泣きけるが、地是ではすはといふ時に國へ心が引かれて、未練の出来まい、フシものでなし、地こな様に逢ひ次第死んでのけうと覺悟をすへ、髮剃は身を離さぬは見さんせと、袖口から手を引入れて懷の、髮剃の柄包みながら、男の手にしつかと持せ持添て、南無阿彌陀佛と我腹に突立るを、挽取て、引たくればこりやなせに、もふ逢ふことは優曇華、こなさんの手で死にたいと、フシ呷き口説ぞ哀れなる、向はて悪い合點なまだ人立も有る中に、思ふ様に死そふか其心底に極らば、まそつと爰にさまよふて日の暮るに程はない、人顔見へぬ時分